イタミヒメ

かへん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
イタミヒメ

【Ｎコード】
Ｎ３１４６Ｒ

【作者名】
かへん

【あらすじ】
“九歳の誕生を迎えたあの日、姉さんは僕の身代わりとなって死んだ”
一族で唯一妖術の使えない狭霧界（さぎりかい）は、突然襲撃してきた山賊たちによって天涯孤独の身となった。
追手が迫る中、復讐のためにと盗み出した家宝から謎の女が現れ、界に向けこう語りかける。
「あなたは死にたい？　それとも生きたい？」
痛みを与える仮面の男。直感で動く赤の城主。傍らで戸惑う男装の

麗人。
邂逅と崩壊を繰り返し、姉の復讐と自分の気持ちとに揺れながら、少年は様々な出来事を経て成長していく。
（新人賞応募予定作品）

序、闇を／森を逃走する（前書き）

投稿済みのものにあとから手を加えることがままあります。

感想、批評、酷評なんでもどうぞっ！

序、闇を／森を逃走する

石造りの重い扉を開けると、地下室特有の淀んだ空気が放たれる。細川礼次郎は思わず鉤鼻をつまんだ。緩めに結んだ髷（まげ）が拍子に揺れる。

「あの……ここでいいんですよね？」

躊躇いなく進んでいく上司の背中に、不安げな声を投げかけた。

「そのはずだ。奥に棺があろう」

上司が提灯（ちょうちん）を掲げると、奥で小ぶりの石箱が浮かび上がる。肩越しにそれをまじまじと見つめて、礼次郎は息を呑んだ。

ただの石箱ではない。棺だ。木製が一般的なこの国では珍しい、いかめしく据えられた石棺。埋められることもなく、このような地下室に安置されているのは何かしら奇妙に思えた。所々朽ちている様を見ると、置かれてから相当の年月が経っているようである。

この棺の中のものを持ち帰るというのが、二人が受けた命令だった。

細川礼次郎とその上司である太田善之助は、ともに強羅（ごうら）幕府に仕える武士だ。数年前に成人を済ませたばかりの礼次郎はまだ将軍にお目見えしたことなどないが、それが可能な身分には属している。恐らく、この仕事を済ませれば初のお目見えがかなうだろう。なにせ、命令は将軍からの直々の手紙によってなされたのだから。

「公方殿がおっしゃられていた通りだ。大きな護符が貼っておる」

棺の蓋には巨大な護符が一面に貼られていた。

細川礼次郎は瞼を小刻みに震わせた。この棺は、奇妙なだけではないように思える。

不吉だ。

「なにを呆けておるんだ。剥がすのを手伝えい」

「あ、は、はい」

提灯を棺の脇に置き、礼次郎は上司の言葉に従った。
そう――これは、国を治めるかの将軍閣下からいただいた特別な任務。怖気づいてどうする。
おずおずと護符の端に手を伸ばす。
かた、と蓋が揺れた。
「……ん？」
気のせいだろうか。中から蓋が押されたような気がする。
やはり――不吉だ。
武士の本分たる忠義や勇敢さなどを頭から消し去り、礼次郎は泣きそうな声をあげる。
「ぜ、善之助さん。本当にやるんですか？」
「当前であろう。公方殿の命に従うのが武士というもの」
「そ、そうですけど……」
太田善之助は怒らせると怖い。仕方なく護符を掴む手に力を入れた。漠然とした不安より、目の先にある恐怖が優先される。
息を合わせ、二人で護符の端を持ったまま反対の端まで走る。大した抵抗もなく剥がれた。
「か、絡まった！」
着地で足をくじいた気分だった。最後の最後で手元が狂い、護符の粘着剤が礼次郎の腰の刀に付着する。焦って取ろうとすると、更に絡まって状態が悪化する。善之助が見てられないとばかりに手助けを始めた。中肉中背。特徴のない外見の代わりに大仰な言葉遣いが印象的なこの上司は、意外にも手先が器用である。「刀は武士の魂だぞ」と小言を言いながら、どんどんと紐解き、剥がし、捨てる。礼次郎は逆に手の出しようがなくなって、ぼうっと視線をあげた。自然と棺の方に目が吸い寄せられる。
提灯に淡く照らされた長方形の石箱は、暗礁に乗り上げた無骨な船のようだ。
否――。
船は船でも、幽霊船。

不気味だ。
中に何が入っているのだろう。死者だろうか。
骨となった遺骸に怨霊が取り付き、突然起き上がって自分たちを襲う。
そんな空想が自然と膨らんで、礼次郎は心臓の鼓動を速くした。
棺から目が離せなくなる。
十秒、二十秒、三十秒――。
一分経っても何もおこらず、礼次郎は深くため息をついた。
自分が臆病すぎるだけだ。怖がる必要などない。棺の中の物を将軍様に渡すだけなのだから。
自分に言い聞かせた。
直後。
礼次郎の視界の隅を何か紫色のものが通り過ぎた。
「ぎゃあああ！」
隣で、悲鳴があがる。
「……え？」
事態を把握しかねて、礼次郎は嘆息のような間抜けな声をあげた。
声の元に目を向ける。
善之助の腹を、紫色の炎が刺し貫いていた。
「な――」
飛び出た鮮血が礼次郎の頬を汚す。
善之助の顔は、およそこの世のものとは思えない苦渋の色を浮かべていた。
いや――。
礼次郎は思う。
この世のものとは思えないのは、その表情だけではない。首が、顔が、肌全体が、どういうわけか禍々しい紫斑に覆われている。
「ひ、ひい……！」
腰を抜かしてその場にへたりこんだ。
同時に、棺の蓋が音を立てて落下する。影から現れたものを見て、

礼次郎はようやく何が起きているかを理解した。棺から紫炎が蛇のように現れ、その先で善之助の腹を突き破っている。
やはり、棺は不吉だったのだ。護符をとるべきではなかったのだ。
自分でも不思議なほどの早さで足腰の力を取り戻すと、礼次郎はよろめきながら駆け出した。
「久しぶりの、世界だァアアア！　ヒャハハハハハハ」
背後から狂ったような笑い声が聞こえる。善之助の声だが――善之助ではない。
「やァっと手に入れたぜ、人間の体」
暗い中、どうにか出口への階段を見つけ出す。
「お、もう一人いやがんのかァ？」
一段目に足をかける。
「ちょうどいい。よォ……ちょっと教えてくれないか？」
二段目、三段目――。
おかしなことを口走っているが、追いかけてくる気配はない。これなら――逃げ切れる。
もう一段――。
「あれ？」
振り上げた右脚が、やけに軽かった。
なぜだろう。
目を凝らして自分の右脚を見てみる。
膝から下が消えていた。
「わあああああ！」
両脚を切断されて、礼次郎は前のめりに倒れた。階段に顔面から激突する。
「な、なんで……」
追ってきていなかったはずなのに。
変形した鉤鼻を後ろに向けると、炎の蛇が宙に浮かび、こちらをうかがっていた。
礼次郎の脳内に大量の疑問符が満ちる。

どういうことだ。炎が自分の意志でやってきて、脚を斬ったというのだろうか。一体何なんだ。
「まァ逃げんなって」
衣擦れの音が近づく。
「い、いやだぁあああ！」
礼次郎は腕だけで階段をよじ上ろうとし――その腕も炎に切断された。
「ぎゃあああ！」
階段が血の沼と化す。
「教えてくれよ」
善之助が姿を現す。
「人間って……どんなふうに痛がるんだ？」
炎に照らし出されたその顔は、これまでにないほど生き生きと輝いていた。

※　※　※

狭霧（さぎりけ）家は妖術師の家系として世に知られる名門だ。
強羅（ごうら）幕府が天下を治めるようになって約二百年。長く続く平和のなかで、かつて戦とともに栄えた妖術は大きく衰退していた。妖力を備える者の数は減り、妖術の存在を知る人間すら消えつつある。
そんな中、依然として優れた妖術師を輩出し続ける狭霧家は非常に貴重な存在だった。一族の規模こそ大きくないものの、本家から毎回偉大な妖術師が生まれる。
妖術師を抱えるということは、大きな力を持つということだ。妖術はいとも簡単に何人もの人間を殺傷できる。妖術師の大家であると同時に、狭霧家は時代に不相応な戦闘集団でもあった。
だが――。
巨大な力を有した戦闘集団。今の狭霧家に、その面影はない。
山賊の襲撃を受けた彼らは、いとも簡単に、その屋敷を燃やされ

ていた。

「はは……」

狭霧家本屋敷、通称「空霞邸（からかすみてい）」の裏の森。木々の向こうで赤く染まる空を見て、少年は乾いた笑いをもらした。

空を赤くしているのは、空霞邸からあがった炎だ。あの様子では全焼は免れない。

一族の人間はどうしただろう。恐らく、屋敷に籠もったままだ。だが、きっと焼死はしない。その前に地下室に戻って、彼らは――。

少年は思考を打ち切った。目を転じて屋敷の反対へと歩き出す。

吸いこまれるような黒い髪がそれに合わせて揺れた。髷を結わず肩まで伸ばしっぱなしにしている。肩衣（かたぎぬ）も同様に黒い。本来家紋が織り込んであるはずの背中と胸までもが、墨汁で塗りつぶしたかのような黒に染まっていた。対照的に、肌はひどく白い。

唇を強く引き結んでいる。決別の強い意志を浮かべたそのさまは、幼い顔立ちに対して何かしらの不均衡を感じさせた。眉も鼻筋も細く、明るく光る目に二重瞼が乗っかっている。幼いだけでなく中性的で、白粉を塗れば少女と言っても通じそうである。

しばらく歩を進めると、流れの強い川が顔を覗かせた。森が終わる。木々がまばらになり、広場のような場所に出る。高い声に呼び止められたのは、その時だった。

「――待ちなさい」

背後からである。少年は首だけで振り返る。

五人の武士が半円を描いて少年を半ば囲っていた。着てるものが色も布もバラバラだ。肩衣が半分破けているものもいれば、その上から羽織をまとっている者もいる。差した刀も不揃いで、一見では山賊の類にしか見えない。

だが――

「……幕府様が何の用？」

襟から伸びる相貌は、どれも山賊たちの下卑た笑いとは程遠かっ

た。規律と闘争で鍛えられた、厳然たる表情。身のこなしや体つきもまた、戦を生業としている人間のそれである。
背を向けられる状況にないと知ると、少年は体ごと振り返り、刀に手をかけた。あどけない顔つきに似つかわしくないほど、柄には使いこまれた跡が残っている。
「幕府？　私たちはそんな恐れ多いものじゃありませんよ。狭霧家に眠るというある秘宝を奪いに来ただけの、卑小な山賊です」
「変装しようっていうんなら、もう少し演技の努力もしてきたらどうなの？　それとも正体を隠す気なんて元からないのかな？」
少年の挑戦的な目つきを、五人の中央に立つ小柄な青年は微笑で受け流した。彼だけが戦乱時代に武将が身に着けていたような鉄兜を目深にかぶり、笑みも口元しか見えない。微笑せずとも少年の睨みは兜に跳ね返されるばかりだ。
「まあ、私たちをどう思うとあなたのご自由です。腰に下げているそれさえ渡していただければ、あとはどうでも構わない」
「へえ……やっぱ幕府はこれを狙ってたんだ。残念だったね、家を燃やす大ごとにまでしたのにあぶり出せなくて」
少年の右の腰にお手玉大の巾着袋がちょこんとぶら下がっていた。
「ええ、確かに予想外でしたよ。まさか狭霧家の御長男がそれを盗んで逃げだすなんてね」
それを聞いた途端、少年の表情が一変した。驚いたように眼を見開き、再び青年をきっと睨みつける。その目つきには新たに激情が灯っている。
「長男、ね。そこまで調べをつけてたんだ。だったらこんな無駄話は止してさっさと殺そうとか思わなかったの？　僕がその気になれば、君たちなんて妖術で一瞬――」
セリフを切って、少年は刀を抜いた。その勢いで、右足を軸に体を回転させる。背後を向いた少年の刃と、背後を襲った武士の刃が交差して鋭い音を放つ。上段から振り下ろされた武士の一撃に、少年は相当の衝撃を受けて半歩ほど後ろに下がった。

「後ろから仕掛けるなんて武士道精神に反してるんじゃない？」
「正面から行けば少年のあなたを殺してしまう羽目になりかねません。卑怯な手を使ってでも、手傷を負わせるに留め、あなたに割腹の余地を与えたかったのですが」
「割腹なんてごめんだ！　死んでもやらないね！」
少年の一言が始まりの合図となった。五人のうち、後ろから襲った一人と、兜の青年以外の三人が一斉に抜刀し、少年に走り寄る。
「ぐっ……」
先ほどの武士は少年と鍔迫り合いに持ち込む。カマキリを思わせるこけた頬が特徴的だ。体つきも細いが、しっかりと鍛え上げているためか押しは強い。
「なめるな……っ」
体全体を使ってどうにか押し返す。だが、その間に残りの三人は少年の間近へと迫っていた。逃げ道は――見当たらない。
追い詰められている。
少年はおもむろに身を屈めた。脚をバネにして跳躍の体勢をとる。
「――ぐぶぉ！？」
カマキリ顔の武士は、鍔迫り合いで押し返されて隙が出来ていた。跳び上がった少年の膝蹴りがその顔面に直撃する。
そのまま倒れ行くカマキリの頭を踏み台にしてもう一段ジャンプし、川岸に着陸する。振り返って再び刀を構えると、
「ッ！？」
少年の目の前に兜が現れていた。否、先ほどの青年が少年を袈裟に斬り下ろしていた。
「お――」
少年は目前を斜めに走った剣筋に反射的に身体を逸らせた。次の瞬間――鋭い痛みが少年を襲い、左肩から胸に掛けて走った傷からどっと血が噴き出す。血は地面と背後の川に飛び散り、力なく後ろに傾いた少年の身体は、川へと落下した。
「取り逃してしまいましたか」

流れに急きたてられ、少年の四肢は浮かび上がる間もなく下流へと消えていく。
少し先で急カーブを描く川の行く先を眺めながら、青年は目を眇める。
「でも残念でしたね。あなたが“夕の狐（きつね）”を持たないことも調査済みです」
口元を歪めると、未だ血の色に染まる空を顧みる。
「狭霧の家も燃えてしまいました。――さて、星流様にどう報告したものやら」

幕間、ある少年の回想その一

「界、こっちだよ、こっち！」
潮風が鼻孔をくすぐる。一面に敷かれた砂浜は白く、太陽もまた白く、果てなく続く海は青く、空もまた青く。二色に分かれた世界で、界と愛は足跡を砂浜に残し続けている。
「ちょ、ちょっと待ってよ、姉さん……」
走っていると、砂が自分の足を絡め取りにくる。息も絶え絶えになりながら、それでも界は双子の姉を追いかける。
「私たちもう少しで九歳なんだよ？　蒼黒の儀式に出るんだよ？　これくらい走れなきゃ！」
「関係、ないじゃ、ん」
姉はようやく立ち止まる。
安堵して界も止まる。汗に濡れたその顔を覗き込まれる。
二重瞼、長い睫毛、深い黒の髪。界と愛は、双子の原則に違わず、瓜二つの容姿を備えている。しかし、他の点ではあまりにも違っていた。外向的な愛と、内向的な界。なんでも出来る愛と、何も出来ない界。
界にとって姉は、いつも前を歩く存在だ。ついてこいと励まし、急かし、時には手を繋ぎ、先導した。姉の行く先は、毎回素敵なものであふれていた。だから界も、励まされるまま、急かされるまま、手を繋がれるまま一生懸命ついていき、姉からたくさんの素敵なものを受け取った。
それを不満に思ったことはない。自分に主体性がないことは自覚している。それでも、そんな自分に満足していた。
だが、今日だけは違った。
「……ん？」
波が押し寄せ、黒く湿った海岸線の砂と、白く乾いたままの砂、その境界線でなにかがキラリと光を放った。

気づいて拾い上げた界の手の中で、それはもう一度太陽を反射する。
「きれい……」
愛の目が輝く。界は見とれて何も言うことができない。
それは石だった。海と空に似た半透明の蒼い石。美しいのに、星型の頂点の一つが欠けたようなひどく歪な形。だけど、石の体内で光が踊るような様は、歪なほど魅力的で――二人の心はいつの間にか奪い去られていた。
「素敵ね、これ！　界が見つけたんだから、これは界が見つけた界のものだね。私が見つけた界のものじゃない、界だけの」
喜色満面、といったように姉が笑う。
――違う、これは。
いつも姉に与えられてきた界のもの。ならば今回は――
「ううん、これは僕が見つけた姉さんのものだ」
「え？」
姉は、驚いたかのように、嬉しいかのように界を見返す。
「でも、このままの形じゃだめだから……もっと素敵な形にして渡すよ。楽しみにしてて」
満面の笑みを浮かべると、界は石を懐にしまって歩き始める。
「まったくもう――」
たたた、と界の後ろを駆けてくる足音。
嫌な予感に振り向くと――姉が今まさに跳びかからんとしているところだった。
「あああっつ！　砂あっつ！」
押し倒されて、背中から砂浜に激突する。薄い着物を通して太陽に焼かれた砂粒が界をちくちくと刺した。
「私の前を歩くにゃまだ百年早いんだからね！　覚えとくのよ！」
馬乗りになって脇をくすぐられる。笑いと熱さに挟まれながら、界はただただ頷いた。

一、光が告げる

半透明の石の中で月光と深い蒼が混じり合っている。手の中でそれを弄びながら、界は口元を綻ばせた。

「結局、形は変えなかったけどね」

知り合いの刀鍛冶に頼んで細い穴を開けてもらい、そこに紐を通して首飾りにした。だが形は変えないままだった。歪さが気に入っていたからだ。

今の界にとって、この石は今も姉を感じさせてくれる唯一のものだった。

そう――。

界は目を閉じる。

姉さんは、あの日――。

凄惨な記憶がよみがえる。大人たちがざわめき、姉さんが目を閉じ、そして炎が――紫色の業火が姉さんを、姉さんを

「姉さん！」

自分の声にびくりと身を震わせ、界は我を取り戻す。

いつの間にか呼吸が荒くなっていた。石をじっと見つめ、鼓動を落ち着ていく。

どんな時もこの石さえあれば、界は生きていける。

「さて」

石を首に掛け直し、辺りに目を配る。

宵闇の中、界は川沿いの大きな廃屋のなかにいた。

川に流されて意識を失い、気付いた時には薄暮が訪れていた。流れが緩やかになってから岸に上がり、幸いなことにこの廃屋を見つけることができた。

月光が破けた天井から差しこんできて、そこだけ明るい。暗順応で辛うじて見えるのは、朽ちかけの柱、折れた梁、剥がれたままの

京壁。奥には床の間があって、ガラクタがうずたかく積まれている。目を凝らすと、縄や壺が含まれていると分かった。奇妙な取り合わせだ。隅に座る界の対角線上では、襖が閉じている。廊下へと通じるたったひとつの出入り口だ。恐らく六畳ほどのこの部屋は、廃屋の端に位置しているのだろう。追手が来たとしても、あの狭い襖からしかやってこれないとなれば、囲まれる危険性が薄まる。

――それに。

心中で呟いて、もたれかかった壁に軽く体重をかける。ギシギシと鳴き声をあげて大きく傾いだ。中身が腐っているのだろう。

――いざ危なくなっても、壁を突き破って逃げればいい。

先ほどの戦いを思い出す。兜の青年は予想以上の使い手だった。相手を侮っていたことが悔やまれてならない。近くの剣術道場で無敵を誇ったからと少々天狗になっていたようだ。ただ、川に飛び込んで逃亡するのは元から意図していたことだ。怪我も出血の割に浅くすんでいる。袴の裾を千切って左肩に巻いただけで止血は完了だ。

むしろ意外だったのは、

――あの人。

斬りつけられる直前に見た青年の素顔が、強く記憶に刻まれている。思い出すたび、悔しさが再燃した。

だが、今は過去の戦いを省みている場合ではない。

しばらく静寂に耳を澄ませ、何も聞こえないのを確認すると、界は巾着袋を手に取った。中から一本の小枝を取りだす。ただの小枝ではない。この暗がりの下にあってさえ、その枝の異常さはありありと見てとることができる。茎が月の光を金色に跳ね返している。その先で生っている実は、逆に光を吸いこまんばかりの漆黒。

「……蓬莱の玄玉（げんぎょく）の枝。その切れ端」

黄金で出来た茎と、黒真珠の実。狭霧家が代々家宝として扱ってきた、至高の価値をもつ代物だ。幕府はこれを狙い、奪取される前に界が盗み出してきた。自らの家族を見殺しにして。

玄玉の枝を畳の上に置くと、脇差を抜きながらおもむろに立ち上

がる。
ゆっくりと息を吐き出し、切っ先を大きく振り上げた。
金属音。
黒真珠を真っ二つに裂いたかと思われた界の一撃は、しかし大きく跳ね返されていた。黒真珠には傷一つついていない。対照的に脇差の方は激しい刃こぼれを起こしている。何かが守っているような、黒真珠ではありえないほどの硬さだった。
「くっそおおおお！」
絶叫とともに脇差を投げ捨て、玄玉の枝を壁に叩きつける。
「やっぱり、ダメだったよ……姉さん……」
折れも傷つきもしない枝の姿を見ると、それをぼとりと落とす。界の目じりにはうっすらと涙がにじんでいた。
「――でも、まあいいさ」
数分の間壁に突っ伏した後、そうつぶやいた界の声は一変して冷たく感情を押し殺していた。枝を拾い上げて巾着袋にしまう。投げ捨てた脇差も鞘に収め、隅に座りなおす。
「斬れないなら、壊す方法を見つけるまでだ」
つぶやいた直後、足音が響いた。複数だ。摺り足で目立たないようにしているが、確実に聞こえてくる。段々大きくなることから、こちらに向かっているのだと知れた。
「……」
立ち上がり、息を潜めて打刀（うちがたな）の柄に触れる。川に落ちたとき危うく手放しそうになったが、気を失う直前で鞘に収めることができた。無意識の行動だったが、お陰で流されている間に脇差だけになってしまうことは避けられた。
足音に交じってどこかの部屋で襖を開け閉めする音が立て続けになっている。しらみつぶしに部屋をあたっているらしい。何度かはずれを引いたすえ、この部屋の前に止まる。
襖が開かれるのと、界がそれに向けて突進するのとは同時だった。
「ぐわ！？」

襖の向こうから現れた賊風の男は、不意を体当たりされて頭を廊下の壁に打ちつけた。界はすぐに部屋の中へと退散し、右腕だけで刀を持つ。

――三人、いや四人かな。

廊下から感じる気配で敵の数を目算する。そのうち一人は既に昏倒している。残りは三人。

一人が襖から倒れた武士を飛び越えて姿を見せた。

「遅いよ！」

堅実に中段で構え、慎重な足裁きで部屋に入ってきた武士に対し、界は恐るべき瞬発力を見せた。あっという間に懐に入り込むと、下から袈裟で斬り上げる。寸手のところで防いだ武士の面は、がら空きになった。斬り上げた勢いで上を向いた界の刀の切っ先がそのまま――

「あ……」

――武士の頸動脈を射止める。返り血が界を彩る。界の全身を嫌な感覚が駆け巡った。

殺すつもりはなかった。だが、そのことを後悔している暇はない。

「貴様あ！」

倒れ行く武士の背後から大柄の男が出てきた。野太い声と半裸の格好、握った野太刀が、山賊の首領然としている。幕府付きの武士とは思えないほどその格好が堂に入っていた。

唸り声とともに太刀を横に薙ぐ。部屋全体を覆うほどの射程だ。

界は反射的に跳び上がっていた。縄跳びの要領で避けると、ガラあきの胴に力いっぱいの峰打ちを叩きこむ。

「ごふっ」

鳩尾を抱えて蹲る男の首筋に再度の峰打ち。呻き声が気絶を示し、巨体が頸動脈を斬られた武士の死体に重なる。

「――ッ」

間髪入れず界を斬撃が襲った。反射的に刀で防ぐ。

「お前、またか……！」

鍔迫り合いで無理やり部屋に侵入してくる相手。そうして月光の下に姿を晒したのは、鉄兜を被った青年だった。
「――女が、なんで武士なんかやってんだよ」
「やはり悟られていましたか」
青年――否、女は兜の下でにんまりと笑みを浮かべる。接近していると、その唇にひかれた紅がくっきりと見えた。
川に落ちる直前、界が兜の下に見たのは、目鼻立ちのくっきりとした女の顔だった。やたらに高い声、男性にしては細い輪郭。今になるとその理由がはっきりと分かる。
「私は部下を見る素質がないようです。二十にもならない負傷中の少年に易々と倒されるとは」
「ひどい言い様をするんだね」
「自分が殺した相手に同情するというのですか？」
「そんなつもりはないけど――」
途中まで女が押していた鍔迫り合いは、部屋の中央に来たところで膠着状態に陥った。界は左肩に力を入れられない。長期戦で不利になるのは界の方だろう。
渾身の力を込めて女を押し返す。
「こんなものですか？」
致命的だった。
押し返しきれずに間合いをとろうとしたところを女に追撃され、更に冗談かと思えるほど素早い太刀裁きで左胸を狙われる。
「まだ……っ」
自分の刀を胸の前にかざす。防いだと思った瞬間、刀身が根元から折れた。音をたてて宙を舞う刃。
軌道を変えながらも勢いの削がれなかった女の切っ先は、界のわき腹と――右腰の巾着袋を切り裂いた。袋の中身が踊り出る。
「玄玉の枝！」
女の意識が界から外れる。
その一瞬を界は逃さなかった。上半身を後ろに傾けた無理な姿勢

から、右足で女の腹を押し蹴る。
「ぐっ」
軽い体は意外なほどの速度で転がって行く。
界は一度倒れてからすぐ起き上がり、目だけで玄玉の枝の姿を探す。
「あった」
ついさっきまで鍔迫り合いをしていた部屋の中央にその姿を見つけ手を伸ばす。その首に冷たいものが突きつけられた。
「宝物に気を奪われてしまうのはお互いさまのようですね」
目だけを声のした方へ向ける。女が刀を界の首にあてて見下ろしていた。
「……これは宝なんかじゃない、仇だ」
「仇？」
訝しんで眉根を寄せる女。転んだ拍子に兜が取れてしまったらしく、肩の上で切り揃えた髪と大きな栗色の瞳が露わとなっていた。長い睫毛と可愛らしい小鼻、丸みを帯びた顔の輪郭とが特徴的だ。予想とは違い、子供らしい見た目をしていると分かる。
「まああなたの事情など構いません。ひどいことは言いましたが、私とて部下を殺した人間を許すつもりはないのです。心地よく死んでいただきましょう」
女はそう言って手に力を込める。そのまま斬り下ろして頸動脈を断ってしまうつもりだろう。界が女の部下を殺したのと同じ方法だ。
「ああ、最後にあなたを殺す人間の名前くらいは教えておきましょう。美花（みはな）きくです。お見知りおきを」
あっけなく訪れた死の瞬間を、界は上手く受け止められない。女のふざけた口上も耳に入らない。
――生きてって、姉さんが言ったのに。
最後の約束。絶対に守るつもりだった。それをこんなところで破る羽目になってしまうのか。こうして死ぬのも、玄玉の枝に気をとられたせいか。ならば、こいつは姉を殺しただけでなく姉の約束ま

でも壊すつもりらしい。
片手で首元の石を握る。自然と心が落ち着いた。
――でも、死ねば姉さんとも会えるのかな。
死後の世界。そこで姉と再会できるのなら、死ぬというのも悪くはない。約束を破ったことは、しっかり謝れば許してくれる筈だ。
だが――界の願いが叶うことはなかった。
きくが留めにかかったとき、突如として部屋を覆うものがあった。閃光。
界ときくの足元、玄玉の枝の発した強烈な銀の光が、二人の視界を奪い去っていた。

「一体なんなの！？」
狼狽で、きくの口調は崩れていた。声が聞こえてくる方向から考えて、どうやら襖近くで倒れているらしい。閃光に吹き飛ばされたのだろうか。
界もまた、きくとは反対の壁近くで倒れていた。ただこちらは閃光のせいではない。押し倒されていた。銀髪の女に。
「え？」
状況を掴めず、呆けた声を出す。
息のかかりそうなほど近くに迫った女の顔。暗がりでどんな顔なのかはわからない。ただ女と知れるのは、界の両の手首を掴む柔らかい掌の質感と、月光を反射する銀色の長い髪、暗がりの中で輝きを放つ黒真珠の瞳。ただ彼女が何者なのか、どこから現れたのか、全く判然としない。
「あなたは死にたい？　それとも生きたい？」
「は？」
表情を変えず、女は繰り返す。
「あなたは死にたい？　それとも」
ごふ、と女は喀血して界の顔に血を上塗りした。女の腹から刃が突き出る。見上げると、月光をスポットライトにしてきくが返り血

を浴びていた。
「時間、ないみたいよ。早く答えなさい」
「ぼ、僕は」
逡巡しながら、自分に向けられた瞳を見返す。黒真珠。女が何者なのか、界は既に分かっている。
少年は、自分を騙した。否、その瞬間、少年は正直になったのかもしれない。どちらにしろ、そのとき口をついてでた少年の言葉は先ほどの心情とは真反対の方角を向いていた。
「僕は――生きたい。だけど」
「――生きたいのね。じゃあ叶えてあげる」
瞳が細まる。どうやら笑ったらしい。そうして立ち上がると、きくに向けて体当たりを仕掛けた。あっさりとかわされ、すれ違いざまに首を一閃される。ごとり、という落下音とともに首から上が消えた。胴体はしばらく何かを探るように腕をぶらぶらさせたのち、確かな質量を伴って床にくずおれる。
「し、死んだ！？」
界は思わず息を呑む。だが、腰を抜かしていることはできない。慌てて立ち上がる。肩と脇腹がずきんと痛んだ。刀は折れたままだ。
「蓬莱の玄玉の枝はあの程度じゃ死なないので心配はいりません」
「あれが……？」
――やはり、そういうことなのか。
余裕の表情で刀を構えるきくの表情が、そのとき一変した。
「……それは、一体」
その声が裏返りかけている。緊張からか、恐怖からか、突然震えだす。
暗がりでよく見えない。ただ、界の右手の先をじっと見つめているのが分かる。疑問に思いながらも、同じ場所に目をやった。
界の刀に、異常が起きていた。折れていたはずの刀身が復活している。しかし、鉄で出来てはいない。――光で出来ている。大量の光の粒子が一か所に集まり、刀身をかたどっている。

「なんだこれ」
重さは折れたままのそれだ。なのに、刃だけが復活している。
先ほどの女が与えた力なのだろうか。玄玉の枝が与えた力。仇が与えた力。それを使うべきかどうか界は答えを得られない。刀身の重さが無いことで、右手でもまともに扱えるようになった。戦いやすくなったのは確かだ。だが、界の心情は使うことを拒否している。
「あの女、やってくれましたね」
きくはそんな迷いを許容してくれそうになかった。間合いを詰め、喉を狙って突きを放つ。
界はこれ以上退くことができない。脇差を抜く時間もない。手立ては、刀で振り払うことのみ。
「姉さん、ごめん……」
下から振り上げて突きを防ぐ。するときくの刀の切っ先が、一瞬にして消滅した。
「!?」
否、きくの刀は真っ二つに折れていた。先ほどの界のように。
「そんな、私の東季の薔薇が一瞬で……」
刃の断面が融解している。どうやら、光の刃は常識外れの切れ味を備えているようだった。
界が反撃とばかりに踏み込んで素早く刀を振る。それよりも早くくきは反対の壁際まで下がる。追い込まんとした界を、横から野太刀の一撃が襲った。
「!」
危ういところで跳び退る。
「姐さんをやらせはしねえぞ」
大柄の男が起き上がっていた。言葉づかいまで山賊に馴染んでいる。その背後で呻き声が一つ。最初に気絶させた武士も起きるところらしい。
「やばい、かな」
ちらりと見ると、既に銀髪の女は消えていた。玄玉の枝そのもの

も、女が現れたときから見当たらなくなっている。玄玉の枝は妖力の貯蔵庫だという話だ。恐らく妖術でこの場から消えたのだろう。
三人の敵に気を配りつつ、界は壁際まで退いた。踏み込む素振りを見せ――
「っりゃあ！」
それを騙しとして背後の壁に体から当たると、派手な音をたてて壁は崩壊した。
「あ、あいつ！」
大柄の男のだみ声が聞こえてくる。
敏捷な身のこなしで部屋を飛び出し、後ろを振り向かず、界は一心不乱に駆け出した。廃屋を出て、縄のない井戸を横切り、崩れかけの塀を跳びこし、身を隠すため森に逃げ込む。脇腹の痛みなど構っていられない。
月が妖しく照らす丑三つ刻。夜は底知れず沈んでいた。

幕間、ある少年の回想その二

壁越しに呪文を唱えるねっとりとした声が聞こえてくる。それがいくつも重なって、延々と続いている。時折火の爆ぜる音が混じって、不協和音を奏でた。

「界、絶対にここから出ちゃダメだよ。儀式が終わるまでずっとここにいるの」

行燈が弱々しく灯る薄暗い座敷。姉の愛がそっと耳打ちしてくる。座敷には界と愛以外誰もいない。廊下で控えている女中に聞かれたくないようだ。

「姉さん……これから何が起こるの？　なんで出ちゃダメなの？」

少女のような仕草でキョロキョロと辺りを見回す界。仕草だけでなく、格好も少女のようだった。かぶろに切り揃えた髪、丹色（にいろ）地に桜紋様の着物。着物は、汗衫（かざみ）――狭霧家の童女が身につける正装だ。仕上げに軽く白粉をかけた姿は、愛そのままと言っていい。

その愛は、逆に男装していた。

衣冠装束に身を包み、男らしく胡坐をかいている。界より雄々しい。

「これから私と界は入れ替わる。だから、他の人の前では私のことを界と呼ぶのよ。あなたは愛。だから自分のことは私って呼んでね」

「なんでそんなこと……」

「……それは――」

一拍。何か考えるように、姉の目線は宙を泳ぐ。

「儀式の――しきたりなの。私たちが入れ替わったように振舞わなきゃ、爺様たちに叱られちゃうわ」

そう言って、愛は自分の首に手を伸ばした。襟のなかでごそごそと探るように指を動かし、手に取った何かを界に差しだす。界が首飾りにして渡した蒼い石だった。

「見えないとは思うけど、これもかけないと入れ替わったのがばれちゃうから、一応かけておいて」
「入れ替わったのが、ばれる……？」
まるで大人たちには秘密で入れ替わるかのような口ぶりだ。しきたりだというのなら、大人たちも入れ替わるのが分かっているはずなのに。
廊下に控えていた女中が部屋に入ってきて、姉に声をかけた。
「界様、時間でございます。祭儀場へ」
ほんの一瞬、愛は沈んだ表情を見せた。瞳から輝きが消え、唇を強く引き結ぶ。姉が界にそのような顔を見せるのは、これが初めてだった。
しかし、その表情も一瞬で笑顔に取って代わられる。
「あなたは生きるのよ」
「え――」
界が何かを言い返す前に立ち上がり、女中にひかれて部屋を出て行く。
――行っちゃだめだ。
第六感が界に告げている。止めなければ、姉に何か良くないことが起きる。
口を開ける。言いたいことは分かっているのに、声が出てこない。
――一人にしないで。
腰を浮かして追いかけようとする。足は進まない。
このままでは姉が消えてしまう。でも止めてしまえば、姉の思いを無駄にしてしまう気がする。
「……愛様？」
中腰のまま固まる界に、残った女中の一人が声をかけた。
「界様のことが心配なのですね？」
「は――はい」
女中に促されて座り直す。
「大丈夫ですよ。界様は蒼の子として選ばれ、蓬莱様の元へ旅立つ

のです」
「旅立つ……？」
「そうです。当主様からお話をお聞きにならなかったのですか？」
聞いてない。
いや、愛は聞いていたのだろうか。
蒼黒の儀式。二人の九歳の誕生日――つまり今日、それは執り行われる。界と愛は蒼の子と黒の子とに分かれ、それぞれ別の使命を果たさなければならない。
界が知っているのはここまでだ。実際に何をしなければならないのかは分からないし、知ろうともしなかった。何をせずともいつものように姉が自分を先導してくれると、勝手に思い込んでいたのだ。
「界様は、界様にしかできないとても素晴らしいことをいたします。あなた様も黒の子として、あなた様にしかできないことをしなければならない」
「……？」
「当主様を始めとする妖術師の方々が見守る中、その妖術を披露するのです」
「えっ」
身を震わせた。
界は妖術を使えない。体内から妖力を放出するための”夕の狐（きつね）”と呼ばれるものがないのだ。
妖術師の大家である狭霧家の中で、妖術を使えない界の肩身は非常に狭かった。逆に、姉は驚くほど巧みに妖術を扱う。いつも姉の後ろにいたのは、その負い目を感じていたからかもしれない。
――でも、それじゃあ。
本来、蒼の子に選ばれたはずの界は何をする予定だったのか。入れ替わった姉は何をしているのだろうか。
「ね、ねえ。蒼の子の使命ってなに？　旅立つってどういうこと？」
「……本当に知らないのですか？」
「教えてよ！」

女中の目が怪訝な色が浮かぶ。
「界様は、蓬莱様に祝福されるのですよ」
「しゅ、祝福って？」
ますます分からない。
女中は恍惚として微笑む。
「そう――祝福です。ああ、なんと素晴らしい。その命と引き換えに、蓬莱様の祝福を受けるなんて――」
九歳の界がその意味を汲み取るのには、数秒の時間がかかった。
しかし、難しいわけでもなかった。心のどこかで薄々予測はついていたのだろう。
「ね、姉さ――」
言ってから、しまったと思う。
「ま、まさか」
女中の目に怪訝な色が戻り、確信へと染まる。
界は慌てて駆け出した。捕えようとした女中の腕をすんでのところですり抜ける。
部屋を出た。左右に廊下が伸びている。右は地上への出口。左は祭儀場。奥に祭壇が据えられ、十字形の柱に界の姿をした姉が磔にされていた。
「姉さん！」
後ろから女中たちが制止にやってくる。振り切るようにして祭儀場に入り、祭壇の前でもう一度叫ぶ。
「僕を置いて行かないでよ！　姉さん！」
円形になった祭儀場の壁際で、妖術師たちが何人も呪文を唱えていた。界の声を聞きつけると、彼らが一斉に異質のざわめきをあげ始める。
「あ、愛様！？」
「いや違う。今姉さんと言ったぞ」
「弟か？　顔を確認しろ！」
祭壇に上がろうとして、肩を女中に掴まれる。

「やめてよ！」
はずそうとした手を、今度は妖術師にとられた。
「なにすんだよ！　やめろって――」
もみくちゃになりかけた界たちの頬を、熱気が撫でた。
疑問に思って一斉に祭壇を見上げる。
おかしな光景だった。先ほどまでは火の手があがる気配もなかったのに、いつの間にか姉の全身を炎が覆ってしまっている。
それだけではない。
炎は、見たことのない紫色をしていた。
「ね――姉さん」
燃やされてしまう。
姉が、界の全てが、見知らぬ炎によって燃やされてしまう。連れていかれてしまう。手の届かない遠くへ。
「ねえさあああああん！」
灰へと朽ちゆく中、姉は静かに界を見つめ――小さく笑った。

二、黒真珠は微笑む

「お疲れみたいね」
「わあああ！」
夢から覚めると、女がいた。深い漆黒をたたえた瞳でこちらをじっと見つめている。銀色の髪が頬を撫でてくすぐったい。
鼻と鼻が当たりそうなほど接近していたために、思わず界は悲鳴のような何かをあげていた。
「な、ななななに！？」
腕と足で仰向けのまま蜘蛛歩きのようなことをして退散する。その先に壁があった。頭から激突して悶絶する。
「面白いのね、あなた」
「お陰さまでね！」
頭を抱えながら辺りに目をやる。
出口に向かって上り坂を形成している、小さな横穴の中だった。女の銀髪が反射する澄んだ明かりは朝陽だろう。
昨夜自分の足でここまでやってきたのを覚えている。追手を警戒して起きているつもりだったのだが、気付かぬうちに寝てしまったらしい。
なんだか奇妙に思えた。知らぬうちに寝てしまうことなど、界はほとんど経験したことがない。
――それに。
肩や脇腹に意識をやる。
――痛くない。
寝ている間に、どういうわけか怪我が全快したようだった。
界は女に目を向ける。
髪一面に銀箔を貼ったような、本当に見事な銀髪だった。座っているので正確には分からないが、恐らく腰のあたりまで伸びている。

纏う空気は大人びているが、恐らく二十歳前後だろう。そんな歳の女性の銀髪など見たことがない。特異だ。同じように目をひくのが服装である。異国の服だ。一面が濃紺に染まっている。染料も布も、普段界たちがきているものとは全く異なっていると一目で分かる。何より異様なのが、袖のないことだ。胸元や背中も大きく開いて、風が吹けば飛ばされてしまいそうである。胸の谷間に目がいって、思わず界は顔を背けた。

「あら、じろじろ見ちゃって。そんなにここが気になる？」

と言って女は自分の胸元を指さす。見る見るうちに、界の頬は紅潮した。

「ち、違うよ！」

「つまらないわねえ。じゃあなにを見てたのかしら」

「服が珍しかっただけだって」

「うーん……三十二点かな」

「なにがさ」

「言い訳としての説得力」

「低っ！　……じゃなくて、本当だよ！　本当に服装が気になっただけ。なんなのさ、大陸の服？」

「これはドレスよ」

「どれす？」

「そう。イブニングドレス。あなたの言うとおり、大陸のものよ。向こうでは夜の酒宴の際に着るらしいわ」

「大陸から来たの？」

鎖国という名のもとに他国との接触を断っている現幕府だが、これは表向きの話である。実際には少ないながらもいくつかの国と通商を行い、物資や人材が流入してきている。ドレスというらしい女の服もその内の一つだろう。とはいえ、女自身はどうだろうか。大陸の人間は男女ともに大柄だと聞いたことがある。それに対して、目の前のこの女はひどく骨格が細い。顔立ちも、鼻は高いが目元の彫りは浅い。口元のほくろと猫目が色っぽさを演出している。

「どうかしら」
「何者なのさ」
「それはすでに分かっているんじゃない？」
界は息を呑む。
「じゃあ――やっぱり」
脇差の柄を握る。
女の瞳――黒真珠が微笑む。唇の紅が艶やかに光る。
蓬莱の玄玉の枝。ただの物でしかないと思っていた。実際は目の前にいる女が変身した姿だとか、そういうものだったらしい。何にしろ、界にとって女は姉の仇だった。
「お姉さんの仇を取ろうと思っているの？」
「そうさ。人を殺すことになるとは思わなかったけどね」
答えて、界はおかしなことに気づく。
「それを知ってて僕の前に出てきたの？」
「ええ」
言って、女の笑みに嘲りの色が浮かぶ。
「どうせあなたに私は殺せないから」
金属の擦れる音。
界の腰から抜かれた切っ先が、女の首の直前で止まる。だが、それだけだった。
「やらないの？　刺しても死なないけれど」
全身に昨夜の感覚が残っている。武士の頸動脈を断ったときのあまりにもあっけない感覚。人を殺したのはあれが初めてだった。
「これで刺しても死なないなら、君を殺す他の方法を見つけるまでだ」
「そう――人を斬るのが怖いんだ」
「っ！」
押し隠した本音を当てられ、大きくたじろぐ。
「おかしな話ね。自分の家族を見殺しにしたあなたが」
「そ、それは――」

幕府から突然の襲撃を受け、家ごと燃やされた狭霧家。界は彼らを見殺しにしたも同然だった。
狭霧家は玄玉の枝を地下に封印し、それとともに集団自決を図ろうとした。界は抜け出し、あまつさえ玄玉の枝を盗んだ。あのときは姉の言葉に突き動かされて行動していた。「生きて」という最後の願いは、界にとって至上の命令なのだ。
生きてなすべきことは、姉の復讐。界は玄玉の枝を封印するのではなく、破壊する道を模索するために盗み出した。
狭霧家は姉を殺し、それ以降界を冷たい境遇に晒してきた。恨みはいくらでもある。死んでしまえと何回思ったことだろう。だが、実際に炎の中へ消えていく狭霧家の人々を想像すると、心臓をぎゅっと締めつけられたような気分になってしまう。姉の仇だ。同情する必要などないと分かっているのに。
「あなた、そんな心持ちではいずれ殺されてしまうわ」
いつの間にか女の顔が目の前に迫っていた。じっと界の双眸の奥を見つめる。
「うわあ！」
慌てて一歩下がった。
女は一歩踏み出す。
寝起きの際が鼻と鼻の触れそうな距離だったなら、今回は唇が重なりそうな距離だ。それなのに女は気にする素振りも見せない。むしろ妖しく口元を歪めている。
対する界は対応するすべを見つけられず、逃れようと試みることしかできない。
「私を殺す方法を探すの、協力してあげる」
一歩下がる。
一歩踏み出す。
「その代わり、あなたは生きること。お姉さんと同じように、私もあなたに死んでほしくない」
一歩下がる。

一歩踏み出す。
「大丈夫、あなたには力を与えた。それを上手に使えば生きられる」
もう下がることは出来ない。後ろは壁だ。
「あ、あの力……やっぱり君が」
女はまた微笑んだ。
界は相手に呑まれてしまっていた。仇がいる。なのに、斬ろうとしても人間を殺すことへの躊躇が先行する。斬っても死なないというのに。
――そもそもこの女は人間なのだろうか。
界にとって、女は既に得体の知れない何かに変わっていた。
「そう、私が与えたの。妖術の使えないあなたでも光を操れる。ちゃんと――使ってね」
女の手が界の肩を掴み、その場から動けなくなる。
それをいいことに、女はその薄桃色の唇の合間から、赤く湿った舌を突き出した。
「――！」
驚きに界が身を捩るより早く、恍惚とした表情の悪魔は、界の頬を淫靡に舐め上げたのだった。

※　※　※

分島（わけしま）城。分島と呼ばれる地域を強羅幕府の直轄地として領有する小さな山城である。戦乱の時代後期には強羅軍の要所として活躍していたが、現在その面影は残っていない。どんどんと平和になっていく世の中で、勝者となるために必要なものは刀から米へ、鉄砲から金銭へと変わった。山城は戦のための城だ。守るのに有利な分、大きな城下町を持つことは出来ない。それでも豊かな穀倉地帯を持つことが出来れば、分島城も栄えただろう。しかし、分島という地域はそれと程遠い、ひと際奇異な土地だった。
『妖力の心臓』。それが分島地域の別名だ。分島城がその居を構

える霊峰神楽山をはじめとして、妖力の非常に濃い地域なのである。しかし太平の世ではそれも不気味がられる原因にしかならず、民衆は遠のいていった。更にその妖力までもが地表から消え始め、妖術師も姿を消した。残った者と言えば、狭霧家の輩出する妖術師たちくらいであるが――彼らの屋敷は昨夜山賊らしき軍勢の襲撃を受けて全焼している。

そして、頭の痛くなる問題がもう一つ。

「まったく、なにが自治都市だ。ヒドイ話だよ。悲しくなるね」

分島城の天守閣で、城主の桜新星流（さくらしんせいる）は悲嘆にくれた。大仰な動作を振りながら座敷内を周っている。その顔はよく窺えない。派手な赤い布で頭を覆っているからだ。全身を包む法衣も、周りを威圧するような赤。社会の常識も城主としての決めごとも何もかも無視して、星流は昔存在した妖術師集団の正装を纏っていた。

穏やかな秋の昼下がり。片側の壁は板戸になっていて、それが今は開いている。戸の向こうは屋外だ。突き抜けるような青空から太陽が見下ろし、星流の赤装束を明るく染め上げている。青空のもとでは、山腹から麓までの壮大な景観が広がっていた。ただ、そのほとんどを霧が埋め尽くしている。

「大体な、この幕府万歳の世の中にな、ここらへん俺らが治めるね！　とか言っても通じねーし！　あれだぞ、突然人の家に上がりこんでここ俺の部屋ね！　とか言っちゃうのと同じだぞ！　そんなこと言われたって厠くらいしか渡してやんねーよ！　はっはっは、お前は便所に住む害虫だ！　あ、でも厠とられたら困るな……」

早口言葉かと思える勢いでまくしたてている。部屋にいるのは彼一人なので、誰も聞いてはくれない。

「あー疲れた。城主やめたいなー」

どさっと大の字に寝転んで早口を結ぶ。見計らったようなタイミングで襖が開いた。奥から冷たいまなざしの女が正座のまましずしずと進み出る。童女のように髪を肩口で切り揃え、細身に女郎花（おみなえし）の小袿（こうちき）を纏っている。目つき以外はユリの花弁のように愛らしい。

「おう、きくちゃん。ひさしぶり！」
「まだ天守閣にお住まいだったのですか」
冷たいまなざしの女――美花きくが呆れたように目を眇める。
天守閣に住む者などいない。戦時には本丸として機能するが、平時からこの場にいては火事などが起きた場合逃げられずに死んでしまう。もっとも、妖術を使える星流にはそんなことなど一切関係ないとも言えるのだが。
「いやいや、昼間こっちに来てるだけだから。寝るのは城下の屋敷だぞだぞ」
「おかしな語尾をつけないでいただけますか。耳が腐ります」
「天守閣って眺め最高だろ？　しかもこの天守閣っていう響きがエスタブリッシュな感じで我輩に合っているというかなんというか」
「またどこかから入ってきた大陸の言葉ですか？　意味、履き違えていますよ」
「え、どんな意味か知ってんだ？」
「知りませんが、星流様なら絶対に間違えるという確信があります」
「さっすがきくちゃん！」
寝転んだまま、星流は何がおかしいのか大笑いする。きくは眉をひそめて目の前の奇怪な男を眺めた。
きくと星流は、幼馴染とも言うべき間柄である。星流の桜新家は名門中の名門。彼の伯父は現老中首座、つまり幕府の上から数えて二番目の権力者だ。そんな桜新家に当初奉公人として勤めていたのがきくである。
しかしきくはその後通っていた剣術道場で頭角を見せ始め、ついには女でありながら幕府直属の武士である御家人に登用された。逆に星流はこのような辺境の城主に左遷されている。武家の子息でありながら妖術を学ぶなどの奇矯な振る舞いのせいだろう。若くして城主となったのだから大出世と取られてもおかしくはないのだが、実際のところ分島城主ほど不名誉な肩書は存在しない。分島城に不気味な噂が絶えないのである。もっとも、本人は分島城主という役

を苦とも思っていないようだし、身分でいえばきくと星流には未だかなりの格差があるのだが。
「ところで――」
ふと笑いを止めて、頭だけきくへ向ける。
「狭霧家を焼いたのはきくちゃんたちなんだよな」
今まさに報告しようとしていたことを先取りされ、きくはいささか面食らう。洞察力の高さだけは侮りきれぬ男だ。
「その通りです。その件についてですが」
「困るなあ」
「――は？」
秋風が星流のとぼけた声を運ぶ。
「我輩、狭霧家の人たちにはお世話になったんだぜ。それをよくもまあ簡単に焼いてくれちゃって。どうやってあの強力な妖術師どもを蹴散らしたんだい？」
「……？　どうやって、とはどういうことでしょうか。特に抵抗らしい抵抗もなかったので、任務の遂行は容易でした。予定外の事態がいくつも発生したために求めていた代物は獲得できませんでしたが」
「……ふうん。なんだ、そういうことか。”彼女”、やっぱりそういう目的なのか」
彼女――きくは今回の任務最大の予想外を思い浮かべる。突然現れた、銀髪の女。恐らく、星流の言う『彼女』が指しているのも――
「彼女とは蓬莱の玄玉の枝のことですか」
「きくちゃんにしては察しがいいなぐふぉあ」
寝転がっていた星流の脇腹を、素早く立ちあがったきくのローキックが襲撃する。無駄のない洗練された動きだった。
「相変わらずきくちゃんが丁寧なのは言葉遣いだけであったの巻……」
お腹を抱えてうずくまる。身分から外れた行為だが、星流は気にも止めない。

「いやそんなことよりさ、きくちゃんって幕府の本隊所属なんだろ？」
「ええ」
「黒子奉行――老中の懐刀とか呼ばれてる場所だろ？」
「……ええ」
　きくが配置されたのは、黒子奉行という役所だ。俸給は高く、様々な特権が与えられる代わりに後ろ暗い仕事を務め、公にはその存在が認められていない。きくのような武士ではなく、忍とよばれる者たちも多い。
「きくちゃん、玄玉の枝の奪取が任務だったはずだよな。命じたのは老中以外に考えられない。ってことは、単純に言えばその命じた老中か、もしくは将軍様がそれを欲しがってたってことだよな」
「……私には答えられません」
「答えろなんて言ってないけど。でも、きくちゃんがこの城に来た理由は何となく分かるぜ。ここにはあるからね、あれが」
　きくは黙ってうつむく。
　この城主は考えるのが得意ではない。妖術師になれたのが不思議なくらいだ。その代わり、並み外れた直感で人の胸の内を透かしてくる。その能力を誰かれ構わず振り回すものだから政治の場から疎まれる。
「あ、そうそう、きくちゃん以外にも玄玉の枝が欲しいとか言ってうちに来た奴がいたなあ」
「え？」
「知らないのか？　そいつも幕府本部から来たらしいぜ」
　きくは首を傾げるばかりだ。
「ま、知らないならいいけどさ。どうせ今はいないし」
「どちらへ行かれたのです？」
「きくちゃんが取り逃がした玄玉の枝を追いに行った。先を越されないように気をつけろよ～。なんだか危なっかしい奴だったから」
　そう言って、星流は何がおかしいのかまた大笑いを始めた。

※　※　※

狭霧家直系の人間は、必ず双子で生まれる。
原因は分からない。いつの時代からか、それは狭霧家の因果となり、常識となった。
双子は、ある悲劇的な宿命を背負っていた。一方は絶大な妖力を有して生まれる。だが、もう一方はいくら努力しようと妖術を使えない。
妖術を使える子と使えない子。狭霧家にとって、両者を見極めるのは非常に重要な案件だった。
蒼黒の儀式で、子供の要不要は決められる。
狭霧家の双子は九歳の誕生日に地下へ潜る。それまでお互いに同様の扱いを受けていた双子たちは、ここで初めて別々の扱いを受ける。妖術を使える子供は黒の子、妖術の使えない子供は蒼の子と呼ばれ、それぞれ別の使命を果たす。黒の子は自らの妖術を周囲に披露する。九歳となった黒の子は、その時点で分家の妖術師たちを圧倒する者がほとんどだ。
それに対し蒼の子は――生贄となる。狭霧家の神に。狭霧家の神は、彼らが代々秘匿のうちに守ってきた祭具――蓬莱の玄玉の枝そのものだ。
これが狭霧家が培ってきた因習であり、呪いであり、界と愛はその因習を破った最初で最後の双子だった。
「私を殺すあてはあるの？」
七雲（ななくも）と自称した女は、界の先をぶらぶらと歩く。
姉を喰らったのは、彼女。蓬莱の玄玉の枝が人に変化した目の前の女こそが、姉の仇である。しかし今、界は恐怖とも言い難い何らかの異質感を感じていた。
彼女から突然与えられた力。そんなことをして自分に何をさせようと言うのか。

舐められた頬の感触が今も強く残っている。
本当に、一体何を考えているのだろう――。
「……あると言ったら、殺されてくれるの？」
「喜んで殺されてあげる」
「嘘だ」
界は立ち止まる。
七雲も立ち止まって界を振り向いた。
「そんな風にして死ねるのは、姉さんくらいだ」
「十八にもなって、重度のお姉さん依存症なのね。お母さんの愛情が足りなかったのかしら」
界は七雲の背中を睥睨するだけで何も言い返さない。
自分の身代わりとなって死んだ姉。彼女がなぜそこまでのことをしたのかは分からない。恐らく、永遠に分かることはないだろう。ただ――残された界は、姉のために自分の一生を使おうと決めていた。それがせめてもの償いだろうと、そう考えていた。
「私を殺したあとはどうするの？」
「殺した、あと？　……生きる、それだけさ」
「退屈な人生ねえ。あくびがでちゃう」
本当にあくびをする七雲。秋の昼下がり。眠くなるのも当然と言えば当然だった。
頃は十月の半ば。森は紅葉で夕焼けと黄金に色づいている。
朝に横穴の近くで兎を狩って軽い食事を済ませたあと、二人はこの森をずっと川に沿って北上していた。川の先には湖がある。その湖では護円という自治都市が発展している。二人が目指しているのはそこだ。自治都市であれば幕府の人間は容易に進入を許されない。追手から逃れるには絶好の場所である。七雲を殺す手立てを見つける前に、七雲を奪われる危険性を無くすのが先決だった。
「ねえ、七雲。君は狭霧家の神だったんだよね？」
「そうよ」
界と七雲は再び歩き出す。七雲が前を、界が一歩後ろを歩く。

「狭霧家に生まれる双子は大抵最初のうちは私を神と見ないようだけれど、段々と神聖視するようになってくる。それがなぜか分かる？」
「君の中には恐ろしいほどの妖力が備わっているから」
「そうよ」
妖術師にとって、妖力は絶対の存在だ。狭霧家も例外ではない。
妖力は二種類に分けられる。空気中に含まれる外側の妖力――通称”昼の鮫”と、人間や動物の体内に備わる内側の妖力――通称”夜の霊鳥”。
しかし、最近は地表の昼の鮫が薄くなり、人体の夜の霊鳥も減ってきているという。そのためか、ここ数年ますます玄玉の枝の存在があがめられるようになっていた。もっとも、今となってはあがめる人間自体が消えてしまっているのだが。
「妖力をそんなに蓄えているなら、今この場で妖術を使うことはできないの？　自治都市までひとっ飛びでいけるんじゃない？」
「あら、殺そうとする相手の力に頼るの？」
「……そうだね」
七雲はくすくすと笑う。
「別にかまわないけれど。でも残念。私、妖術を使うのは巧みじゃないの」
「……もしかして、君にも”夕の狐”がない？」
夕の狐。
肉眼で見ることは出来ないが、どの人間にも夕の狐と呼ばれる、妖力を通すための穴があいている。妖術師はそこから体内の妖力――夜の霊鳥を放出し、外気に含まれる様々な妖力――昼の鮫を動かして妖術を発動するのだ。
界にはその夕の狐があいていないがために、妖術を使うことができない。
「あら、落ちこぼれの同属意識？」
「ち、違う」

再びくすくすと笑う。
楽しそうだ。
「これまた残念。そういうわけではないの。ただ、上手くないだけ」
「でもあの廃屋から消えたり、洞窟に突然現れたのは」
「ええ、霧転(むてん)の術を使ったわ。自分しか転移させられないけれど」
体を霧にして移動させる術。ただ、この術には自分の体しか変えられないという制限がある。簡単な術――ではないはずだ。むしろ、慣れていなければ体のどこかが霧になったまま戻らなくなってしまうかもしれない危険な術である。
「肩や脇腹の傷は？」
「ええ。寝ている間に色々いじらせてもらったわ」
「い、いじるって……」
どういう意味だ。
――傷。脇腹をさすると、廃屋での戦いが思いだされた。
「ねえ、君が渡した光の力は――」
「そんなことより」
話題を打ち切るように、七雲は高い声をあげた。まわれ右をして界を向く。何故だか突然子供染みたような、悪戯を自慢するような自信溢れる表情になっている。
界は戸惑う。
別人になったようだ。全く掴みようのない――まさに雲のような女である。
同時に、一抹の不安が頭をよぎった。
横穴のときもいきなり雰囲気が変わったと思った後にあの仕打ちである。何を言い出すか知れたものではない。
大きく息を吸い込むと、七雲は高らかに宣言した。
「イカダを作りましょう」
「……は？」
意味が呑みこめない。
「あら、不満なの？」

柔らかく微笑む。底知れない笑顔だ。
否、表面だけの笑顔だ。
「……そんなこと、ない」
「それならよかった」
もう一度笑う。嗤っているように見える。
「川はこの辺から流れが急になるわ。土地が急勾配に下がっていくせいで、下流でも流れの強い珍しい土地なのね。同時に森も途中で無くなる。この辺ももう木がまばらでしょう？」
見渡すと、確かに視界を彩っていた紅や山吹の色が薄くなっている。言われるまで気づかなかった。
「自治都市は水上都市。河口付近まで流れは強いから、イカダを使えばかなりの速度でつける。素敵な提案でしょう？」
「でも、作るの？」
「作るのよ。木はあなたの力で簡単に切れる」
「でも、木を切って大きな音なんて出したら自分たちの居所を晒してるようなものだよね……」
「大丈夫、私は近くに人が来れば察知できるわ」
「そんなことが……？」
「妖術よ」
「……？」
疑問だった。他人の居所を探る、しかもこんな広い中でそれを行う術など、手錬れの妖術師でないと出来そうにない。
「それじゃあ始めましょう」
七雲は前に向き直って歩を進めた。界の話す余地を許さないとばかりに。

光の刃。その切れ味は改めて驚嘆すべきものだった。斬ったそばからあっさりと巨木が地に伏す。斬るという感触すら手に届かない。切り口は全て、焦げたようなあとが残っていた。恐らく相当の高熱

を発しているのだろう。恐ろしくて切っ先に触ることすら出来ない。
次々と倒れる木々を見て、界は物悲しい気分に陥った。自分たちの逃亡のために、この美しい景観が損なわれる。それだけで何か大罪を犯した気分になる。それでも手を休めることはない。我ながら無責任な話だ。
「大分使いなれているようね」
後ろで木に寄りかかりながら、七雲が声をかける。光の力のことだろう。
「なんだかこれ、使い方が分かるんだよ。自分の手足みたいに」
「そう。――いい調子だわ」
含みありげなつぶやき。界は悟られないように顔をしかめる。七雲が何を考えているかは分からない。しかし今はそれに乗っておくのが最適のようだ。姉の仇を討つのはそれから行うのが確実だ――というより、今のままでは殺すこともできない。
「光を操るこれは、なにか名前があるの？」
「名前？　そうねえ……」
思案するように目線を宙に向ける。
「集極、とでも名付けておきましょうか」
「集極……」
意味のよく分からない名前だった。集める、収束させる、光を――ということだろうか。
考えながら、その集極なるものでひと際大きなナナカマドを根元から一閃する。最後の一本だ。
「ふう」
ほっと一息をついて、集極を閉じて刀を鞘に戻す――刀身はなくてもハバキは折れていないので鞘にしっかり収まる――その背中に衝撃が襲いかかった。
「！？」
体当たりだろうか。体全体を使った打撃攻撃によって右斜め前に吹き飛ぶ界。幸いその先は開けた場所で、木々の幹に当たることも

なく地面で受け身をとる。
「誰だ！」
振り返って襲撃者の姿を捜す。しかしそこに人の姿はない。ただ、先ほどまで界の立っていたところに一本の木が倒れていた。それで舞いあがったのか、周囲には砂埃が陽炎のように立ちこめている。
「……」
一つの予感に囚われて木の近くまで近寄る。
七雲が、腰をナナカマドに踏まれてうつぶせのまま倒れていた。
「おい！」
七雲が体当たりで界を吹き飛ばし、倒れてきたナナカマドから自分を庇ったのだ。
咄嗟に事態を把握し、七雲の肩を揺する。気絶しているのか、全く反応が無い。
こんなことをしている場合ではないと気づき、ナナカマドを七雲の体からのけようと幹を持ちあげてみる。動く気配がない。重い。
「集極を使わないの？」
「わあああ！」
突然声が降りかかってきた――というより下からせり上がってきた。七雲の目が開き、うつぶせのままこちらを向いている。
「そ、そうだね。なんで思いつかなかったんだろう……」
抜刀し、七雲の腰の両端に位置を合わせ幹を切った。短い丸太となったところを七雲の腰の上からどかす。
「あー、重かったあ」
七雲はすぐに立ち上がり――そしてくずおれた。
「ちょ、ちょっと」
倒れてしまう前に、慌てて界が腰を抱きかかえる。
「腰の骨絶対折れてるって！　そんなんじゃすぐに立てるわけないじゃないか」
「あ――そうだったわね。しばらくなってなかったから忘れちゃってたわあ。動けるのはいいけど、人間の体も不便なものよね」

「不便って……」
七雲の体をゆっくりと地面に下ろし、仰向けに寝かせる。
あのような状態で立ち上がれば、耐えがたいほどの痛みがくるはずだ。それを何とも思わなかったのだろうか。ちらりと見ても、七雲は不機嫌そうに口をとがらせているだけだ。
「その怪我じゃ、全治何カ月かかるか」
「大丈夫よ。すぐ治るから」
「……そうだったね」
七雲を人間扱いした自分に恥ずかしい思いがする。いや、怒りというべきだろう。だが、たった今起こった出来事が、七雲に対する界の考えをほんの少し変えていた。
「僕を、庇ったの？」
「そうかもしれないわねえ」
「そうかもしれないって、なんでそんなこと……！」
「前にも言ったけれど、私はあなたに生きてほしいと思ってるのよ。だから庇った」
「そんな単純な……。大体、この木は一体誰が」
「あなたが倒したのよ？」
「……僕？」
「そう。最後の一本を切ったとき、刀が伸びたのに気付かなかった？」
――気付かなかった。
「刃が伸びて、別の木まで切ってしまった。それだけのことよ」
「なんでそんなことが……？」
「成長よ」
「……成長？」
また上手く飲み込めない言葉が現れた。
「能力が育つのよ。使うたびに色んなことができるようになる。ただ、集極は使うと疲労してしまうし、一度に使いすぎれば気絶することもあるわ。それに……成長が時に危険を生むこともある。気を

つけてね」
「……そういうことは先に言ってほしいな」
さて、と言って七雲はスカートをまくしあげた。
まずい。
そう思った時にはもう遅かった。突然の行動に、界は目を逸らすのが一瞬遅れる。
だが、スカートの下から雪の素肌があらわになり、太陽の洗礼を受けて眩しく輝く――などということはなかった。
両脚に、縄がぐるぐると巻き付いていた。七雲は両手で解き、首だけを起こして界の前に掲げる。
界はどう反応してよいか分からず、とりあえず苦笑いを浮かべた。
「なにがおかしいの？」
「いや、おかしいわけじゃないけど……」
「あの廃屋で手に入れたのよ。井戸とか、あなたが死にかけた座敷とかで」
ぼんやりと記憶をたどる。意識はしていなかったが、視野にそんなものが入っていたような気もする。
「なんのためにこんなもの持ってるか分かる？」
「想像もつかない」
「あなたを縛るため」
「……え！？　えええ！？　どういうこと！？」
――やはり首を絞めて僕を殺すつもりだったのか。それとも手足を封じて監禁するつもりだったのか。いや――悪くすれば幕府につきだされるということもあるかもしれない。
「冗談よ」
「……」
黙って縄をふんだくる。単純な冗談に騙されて動揺した自分と、騙した七雲に何とも言えず腹が立った。
「で、本当は何のためにこんなものを？」
「丸太を括りつけてイカダを作るためよ」

沈黙。
「……ああ、そういえばそうだったね」
考えれば分かりそうなものであった。

川の流れは思ったよりも急だった。川幅はおよそ二十メートル。対岸は川から五メートルほどの高さの崖になっていて、崖の上の足場は見た限り相当悪い。あちらから矢で狙われることはないだろう。問題は此岸だ。森に潜まれて狙い撃ちにされたり、森が消えても平野で視界の利くなか川岸から撃たれるのには不安がある。だが、それも川の中央まで行ってしまえば気にならないだろう。此岸から離れる上、岸辺よりも流れが速い。矢を放たれても当たる確率は低い。
「まあ、一番の問題と言えば――」
界は七雲とやっとの思いで運んできたイカダに目をやった。何本かの丸太を縄でしっかりと括りつけている。全長五メートルはあろうかという大きさだ。見た目は頑丈そうだが、果たして上手く浮かぶのかどうか。
「それに」
隣の七雲は、櫂を両手に一本ずつ持って川を興味深げに眺めていた。「界の作った櫂ね！」とつまらないギャグを面白そうに言っているが、よくよく見るとそれは櫂と呼んでいいのかすらも疑問に思えるような代物だ。先端が扁平状になっているわけでもない、枝を取り除いただけの単なる平たい棒である。持ち手になりそうな一部分だけ丸く削いであるが、それでも操作性は最悪だ。
「さあ、浮かべましょう」
「はい……」
「やる気が感じられないわねえ」
「実際ないからね」
流れにとられないように気をつけつつ、川面にイカダを下ろす。意外にも沈む気配はない。何度か強く押しこんでみても微動だにし

ない。
「よさそうね。あなたは後ろに乗って左舷の担当。私は前で右舷を担当するわ」
七雲は櫂を片方手渡すと、イカダに勢いよく乗り込んだ。半分ほど沈んで、水の反発を受けて浮かび直す。
界は乗り込む前に腰に差した二本の鞘を見た。そのうちの短い一本――脇差を手にとって、まじまじと眺める。
九歳。姉が死んだ直後から、界は剣術を習い始めた。儀式でしきたりを破った界は、狭霧家から徹底的に冷遇された。一人だけ――他家からやってきた一人の妖術師見習いだけは自分に親しく接してくれたが、それは例外的な話だ。
界の帰るべき場所は、家ではなかった。知り合いの鍛冶屋や剣術の道場。彼らは界を温かく迎え入れ、界のずば抜けた剣の腕を認め、評価した。この脇差は、その証として鍛冶屋から二番目に受け取った代物である。
イカダを見てみる。七雲と目が合った。
「大丈夫よ、別にその刀くらいあったって沈みはしないわ」
「そう――だよね」
脇差を元に戻し、赤面しつつ乗り込む。つくづく心を読んでくる。しかし、このときばかりは安堵感が大きく界を包んだ。
イカダは滑らかな加速を見せた。七雲の操船は巧みだった。界も七雲の指示を受けながら櫂を操り、数分と経たぬうちに川の中央へイカダを乗せる。それからはほとんど櫂をつかわず、川に流されていくだけでよかった。
森はあっという間にその姿を消した。その代わりに広がったのは、見渡す限りの草原地帯。薄暮を迎えた蒼穹と淡緑の大地が地平線を奪い合っている。女郎花が黄色の絨毯を敷き、うなだれ始めたクズの花に取って代わろうとする。そこにキリギリスやウズラが集まり、それぞれの生を謳歌し合っていた。
その景色に、幕府の印をつけた武士が侵入している。数は多くな

い。ぽつぽつと立っているだけだ。いずれも突然登場したイカダに茫然と視線を送り、攻撃を仕掛けようという者はいない。時々弓矢を放ってくるが、川岸から離れていることが多いので、届かずに終わるか、かすりもしないで過ぎ去っていく。

「これなら安心だね」

そう言って七雲を見ると、その後ろ姿が心なしこわばっている。

「七雲……？」

ふと、視界の隅に白いものが映った。目を転じて――界は息を呑む。

白装束の男だった。白い羽織、白い肩衣、白い袴、そして――白い仮面。

仮面は見慣れない形だ。鼻から額までを覆っていて、目の縁だけを黒く染めている。鼻が異様に高い。恐らく西洋のものだろう。大体の仮面がそうであるように、その仮面も笑みを浮かべていて――それがひどく気持ち悪い。

男は中肉中背で、服装以外にこれといった特徴は見当たらなかった。川辺に立って、矢をこちらに構えている。錯覚だろうか。矢じりが妖しく紫に光る。

七雲は、今や確実に震えていた。間違いない。あの男のせいだ。界を直感的な戦慄が襲う。あの男は、おかしい。危険だ。

矢が放たれた。必然か偶然か、矢は寸分違わず界を狙っている。

「くっ」

頭をくいっと動かして避ける。しかし、出来なかった。まるで界の動きに合わせるかのように、矢は正確に向かってくる。

避けられないらしいことを悟って、界は刀を抜いた。同時に銀の光が刃をかたどる。これで矢を斬りおとすのが得策だろうか。しかし、恐らく矢の胴体や矢羽を斬っても無意味だろう。矢じりの光は、それが妖術の類であることを示しているように思える。簡単にいくはずがない。矢じりを正確に狙わなければ。

ふと思いついて刀身に神経を伸ばした。

刀身が手の一部になったような感覚が襲う。
――すごい。
界の意思に合わせて、刀身の形が変化した。刃が無くなる。四方に光が分散し、長方形から半円形へ。さらに広がって扇状へ。出来上がったのは、柄のついた扇子だ。
それを顔の前にかざすと、直後、握った両手が衝撃に見舞われる。イカダが大きく揺れ、川に落とされそうになった。全身の筋肉を操作して均衡を保つ。尋常でない質量を持った矢だ。扇子に跳ね返されたそれは、妖力の光を失いながら、水中へと消えていく。
息をついて扇子をおろし――界は目を見張った。
もう一発来ていた。最初の矢の真後ろにあったせいで気付かなかったのか。それとも妖術で消えていたのか。
既に間近まで迫っている。扇子を上げても間に合わないのが感覚で分かる。
無意識のうちに片手で首元を探っていた。蒼い石をぎゅっと握る。
当たる。
そう思った瞬間――
「ダメ！」
界と矢の間に、七雲が割り込んだ。
鈍い音。
異物が肉体を抉る音。
銀の妖精が宙を舞った。銀の凶器をその身に生やして。
「！」
落ちてきた七雲の体を、界はイカダの上で精いっぱい踏ん張って受け止めた。七雲の手に櫂はない。きっとどこかに落ちてしまったのだろう。
矢は七雲の右肩に刺さっていた。矢が止血となって、失血はひどくない。ただ、傷口から七雲の肌に放射線状に伸びた紫斑が不気味だった。単なる内出血だろうか。だが、この広がり方は異常だ。数秒の間に左肩まで達している。次々に白い肌を侵食して、クモの巣

が心臓を捕らえようとしているかのようだ。
「抜いて……」
死人が声をあげているようだった。七雲の顔には苦悶の表情が浮かび、玉の汗が頬を、額を蹂躙している。過呼吸を起こしかけているのか、妙に息が荒い。
界は頷いて、矢を思いっきり引っ張る。それでも中々抜けず、二三度目の挑戦でやっと引き抜く。
鮮血が外気に飛びだして産声を上げる。それとともに、紫斑が、広がるときと同様ものすごい勢いで消えていった。
――まるで、姉さんじゃないか。
気を失ったのだろうか。安らかな息をたてて動かなくなった七雲に、界は複雑な目を向ける。
いつも自分の前を歩く。自分に道を示す。自分を庇う。全て、姉の愛が自分にやってくれたことだった。
――姉さんを殺したこいつが、姉さんに似ている。
皮肉なことだった。
――結局、僕は依存することしかできないのか。
考えてみると、昨夜から立て続けに三度も命を救われている。仇と言っている相手に借りをこんなに作るとは、なんと間抜けなのだろう。
「姉さんがこいつに乗り移ってたりしてね。ははっ」
界の笑いにともなって、イカダが大きく揺れた。
「……え？」
後ろに体重の偏ったイカダ。それでもどうにかこうにか二人を支えていたが、既に限界が来ていた。上に八十度ほど傾いている。
「――！」
数瞬の膠着状態。遠くでカラスが鳴いている。
「わ、わあああ！」
夕陽が川面を火の色に染め上げるなか、イカダは見事な水の花を起こして転覆した。

幕間、ある少女の回想その一

「術は？」
「成功したよ」
「そうか。本当に問題ないんだな？」
「ああ。この前の妖刀は失敗だったが、今回は特別な人体を使ってるんだ。妖力との適合度からして違う」
「そうか」
「ただ、術時の衝撃がひどかったらしくてよ……」
「どうした？」
「いや、今はただ寝てるだけだ。だがな――」
少女は何も感じられなかった。
瞼を通り抜けてくる光は淡い。男たちのざわめきは騒がしい。呑みこんだ唾は気持ち悪い。焚かれたお香は息苦しい。
それだけだ。
部屋を通り抜ける風はどこにいったのだろう。籠もった人の熱気はどこにいったのだろう。そして――
――ああ、何も痛くない。
「そりゃ好都合じゃないか！」
男の甲高い笑い声が耳をつんざく。だが痛くはない。
少女は瞼を上げた。
八畳ほどの座敷。少女はその中央の敷布に寝かされ、棺桶に入れられた遺体のように胸の前で指を組んでいた。曼荼羅のような宗教画が壁一面にひしめく。それを照らす灯篭の黄色蛍光。灯篭にもまた、宗教的な印がいくつも結んである。
――いや、あれは。
印に目を凝らすと、それが宗教上の物ではなく、妖術のためのものであると分かった。普段妖術は印を結ぶことはないのだが、大き

な術を使う時にはああいった紋様に頼る。少女の下の敷布にも大きな紋様が描かれている。
「おお、目覚めたか」
耳元で声がした。
少女を中心として、白装束の男たちが座している。六人はいるだろうか。皆一様に真っ白の法衣と頭巾に身を包み、口元しか外気に晒していない。
――こいつらがさっきの術をかけたのか。
少女にかけられた術は激痛を伴った。体全体を電流が駆け巡り、その後に襲った千本の槍で貫かれたような感覚。気絶する直前で痛みが止むのだから質が悪い。拷問にかけられたのと同じだった。
自分を残酷な目に合わせた人物たちを、少女は特に何の感慨もなく眺める。
「ひどいことをして済まなかったなあ。だが、安心していい。君は素晴らしい力を獲得したよ」
「……？」
「君は無限に妖力を貯められるようになった」
白装束のうちの一人が、顔を近づけて囁いてきている。声色で笑っていることが分かる。
「それだけじゃない。君の望みも、すべて叶ったよ」
「本当……？」
「本当だ。永遠の命も、痛みのない人生も、もう全て君の手にある」
いくらか体質は変わってしまったようだがね――そう結んで、男は顔を離す。笑みが堪え切れず、口から漏れ出している。他の男たちも同じだ。やがて笑みを隠そうともしなくなった。次々に声を上げ、哄笑となり、少女を取り囲んで、歪んだ室内に渦が巻いた。

三、護円に集う

夜の帳がおりていた。
界は、漠然と広がる星空を見上げる。月は雲がかかって見えない。
辺りには森が復活していた。
少し歩けば湖に当たる。
イカダが転覆したあと、界は気絶したままの七雲を上手いこと木片に乗せ、自分もそれに掴まりながら川を流れた。河口付近で岸に上がったのは、もう夜も大分更けた頃。流されながら足元を通る魚たちを脇差で獲った。意外と釣りの才があるのかもしれない。
集極を扇状に出して地面に置く。串刺しにした鮎を数匹、厚めの石を扇との間に入れて乗せる。数秒で香ばしい匂いが立ちこめ始めた。手際よく裏返して再び数秒。いい焼き加減になった鮎の姿を、集極の淡い光が照らす。
石が融ける気配はない。もし扇の表面が刀形態時と同じ温度を保っているならば、融けていてもおかしくないだろう。刀身の形をとっているときの切っ先と今の扇では、光の密度に大きな差がある。それが温度に影響を与えているのかもしれない。
一匹目の鮎を頬張っていると、隣で呻き声があがった。
「ああ、起きたんだね」
七雲の目が覚めていた。寝ぼけているのか、目の焦点があっていない。
「はい、これ」
竹筒を差しだす。水が満杯になっていた。細い清流を見つけて汲んできたのだ。どこかからの山水だろう。
「あら、優しいのね」
「三回も助けてもらったら、どうにかして借りは返さないといけないから」

「借りなんかじゃないわ。どうせ死なないのだから、助けても私の損になるというわけではないし」
「そんな簡単には割り切れないよ」
七雲は起き上がって水をすする。
――本当に死なないのだろうか。
白装束の男が放った、得体の知れない矢。あれがそのまま刺さっていたら、七雲といえどただではすまなかったように思える。その矢を抜いたのが良いことか悪いことか、界にはいまいち判断がつかない。自分が仇を討つ、ということにこだわれば抜くのは当然のことだろう。しかしあの時、本当にそれだけの理由で助けたのかと問われれば、どうにも答え難いというのが実際のところだ。
――僕は、七雲をどう思ってるんだ……？
仇か。それとも恩人か。
やはり界には判断がつかない。

山の夜は深い。
鈴虫とコオロギの混声合唱や、麓よりも大きく見えるような星や、逆に何の明かりも見当たらない下界や、そういった諸々を星流は愛していた。
「天守閣にいるというだけで、我輩は幸せだあああ！」
「そんなに人を見下ろすのが好きなのですか？」
星流が板戸を開け放し、外に向けて叫び声を上げる。そこから蚊が大量に進入した。ほとんど肌を晒していない星流をよけ、部屋の奥で退屈そうに座っていたきくに襲いかかる。
軽快な音とともに、先頭の一匹が命を散らした。間髪いれず、きくは次々と蚊を潰し始める。一度たりとて外さない。時には手刀で殺す。
「それは違う。違うぜ。大外れなんだぜ。いいか？　天守閣はな、誰も人の来ないところなんだよ。人のざわめきが遠いほど、自然を

アンレフトに感じることができる！」
「ダイレクトですね」
「自然はな、直感を与えてくれるんだ。そうだろ？　なあ？」
　きくは蚊を潰すのに夢中だ。段々と悦楽が伴ってくる。
「だが我輩は今夜、この天守閣、それどころかこの城からも離れなくてはならない」
「この城から、ですか？」
「そう。――我輩はね、きくちゃん、自治都市に乗りこんでみるつもりだよ」
　きくの動きが止まった。
「自治都市護円、ですか？」
「そうだ」
　自治都市護円。幕府が建つ以前に成立し、民衆が民衆を治める風変わりな街。現在の実態は明らかになっていないが、以前は独自の軍隊を抱え、湖の上にあるという地形的利点から、幕府の支配からことごとく逃れていた。ただ、幕府が護円の支配に躍起にならなかったということにも原因がある。このような辺境の土地は、幕府にとって大きな価値を持たないのだ。興味を示す者と言えば、それこそ星流くらいのものである。
「あそこは素晴らしいよ。湖の上にある街なんて素敵じゃないか。だけど、幕府の人間は入れないんだ。我輩の城のある土地なのに、全く持っておかしな話だよ」
「じゃあ、遂に護円乗っ取りを実行するつもりなのですか？」
「え、いや、そんなことをするつもりはないけどな。ちょっと覗いてくるだけ」
「……はあ」
　先ほどの大仰な物言いは何だったのか。
「だが……今日ここを出発したら、二度とこの天守閣には戻ってこられないだろう」
「……どういうことでしょう」

「護円に永住するから」
鈍い音が鳴った。星流の頭を局所的な痛みが襲う。手刀だった。
「き、今日は手加減がなさすぎるの巻……」
頭を抱えて蹲る。懲りた様子は全く見当たらない。
案の定、すぐに回復したのか、すっくと立ち上がり高らかに何か宣言を始めた。
きくは渋い顔を隠さない。
「ところで、我輩がここを去ってしまう前に、きくちゃんに会わせたい人間がいる」
「会わせたい人間？」
星流の言葉とともに、襖が勢いよく開いた。きくは驚いて振り返る。
星流とは真反対の静かな男が立っていた。そこだけ白い絵の具を塗ったかのような、一面が真っ白の男だ。白い羽織、白い肩衣、白い袴。家紋はついていない。幕府の印もないところを見ると、御家人や旗本の類ではないのだろう。実家に絶縁された浪人、といったところか。本来ならこの社会で生きるあてもないような種類の人間だが、この男は社会そのものからいささか逸脱しているように思えた。お面をつけている。目元と鼻が隠れる型だ。目に黒い縁取りがしてあり、鼻が異様に高く作られている。少なくともこの国の文化で形成されたお面ではないだろう。お面というよりも仮面と言った方が正しい。
「東西南北（ひがた）だ。今帰った」
気だるげな声。
「待ちかねたぜ、東西南北くん！」
高揚とした声。
――本当に、こんな変な人名があったのね。
仮面越しに東西南北の目がきくを向く。きくは警戒して相手との間合いを計った。
「こっちはきくちゃん。東西南北くんと同じように蓬莱の玄玉の枝

を狙ってる人だ」
「ああ、あんたが」
東西南北は立ったまま きくを見下ろしている。腰を下ろしてきくと同じ目線になるつもりはないらしい。
「黒子奉行の与力、美花きくです」
「東西南北だ。痛みを忘れた化物に制裁を与えるため来ている」
「化物を？」
蓬莱の玄玉の枝が目的ではないのだろうか。
「あなたは、幕府の家紋をつけていないようですが」
「俺は剣客だ。金で雇われてる。幕府の権威を借りるつもりはない」
「そう――ですか」
「東西南北くんはさあ、面白いもの持ってるんだよなあ」
星流の顔が東西南北の腰にずずいっと近寄っていた。きくの目も自然にあとを追う。腰には、当然ながら、刀が差されていた。
きくは首をかしげた。
「……」
じっと見つめる。
再び首をかしげる。
これのどこが面白いのだろうか。きくの目には何の変哲もないただの打刀と脇差にしか見えない。
「これは……？」
「妖刀だ」
「妖――刀？」
東西南北の口の端が、ニヤリとつり上がった。覇気のない口調が一転する。
「あんまり見ない方がいいぜェ。――危険だからなァ」
なにか恍惚としたその声と表情に、きくは全身の毛が逆立つような感覚を覚えた。刀を首筋に押し当てられたような鳥肌が体を侵食している。
「あ、東西南北くん、もう下がれ」

星流が言う。突然、人を平気で傷つけるような高圧的な物言いになっていた。自分で呼んでおきながら全く無責任な言動だ。
「失礼」
気にするそぶりもなく東西南北は一礼して部屋を下がる。きくがなにか言う前に襖は閉じられた。
「――分かっただろ？」
しばらく経って、星流がきくに微笑みかけた。珍しく、安心させるような柔らかい笑みをしている。
「……なにが、でしょうか」
「彼がどれだけ危ないか、ってことさ」
「……？」
何を言いたいのか、きくには全く掴めない。
「間違っても彼と張り合って蓬莱の玄玉の枝を得ようなんて考えちゃいけない。出来るだけ距離を取った方がいい。……つまり、だ」
そう言って、今度は真顔になる。ここまで真剣な表情も中々見られない。
「――きくちゃんは、この件から手を引いた方がいい」
「えっ」
予想外の言葉に、きくは絶句する。
「どうせ彼も同じ所から命令されてる。どっちが玄玉の枝を手に入れても行きつく先は同じさ」
「ちょっと待って下さい！」
今度はきくが平生を崩す番だった。声を荒げて星流に抗議する。
星流は聞く耳を持たない。
「一番いけないのはだな、きくちゃん」
重くのしかかるような声色に、思わずきくはたじろぐ。
「彼に、ついていっちゃうことだ」
そう言うと、星流はいつも通りのふざけた大笑いをあげ始めた。

環湖(わこ)。この狭い島国の中では随一の面積を誇る湖だ。
湖面はお世辞にも綺麗とは言い難いが、一切波を立てることなく穏やかに眠っている。そこから顔を突き出すものがある。泥炭やミズゴケで出来た巨大な浮島と、その上に築かれた四メートルほどの漆喰塀だ。いくつか物見矢倉が設置され、漆喰塀にあいた穴からは大砲の砲身が伸びて朝日を浴びている。浮島からは木製の橋が二つ伸びているが、夜間や戦時は橋が上がって入れない。この時代には不相応なほどものものしく威圧する要塞。それが一見したところの護円の姿である。
「お侍さん、ちょっといいかしら」
南に架かった橋の湖岸側の袂。農民が湖畔の田畑へ出て行くにはまだ早い時間。早番で寝ぼけ眼をこすっていた番人の男は、奇怪な格好の男女に話しかけられた。
一人は黒い羽織に灰色の袴を着た少年だ。それだけならば何もおかしなところはないのだが、なぜか家紋を黒く塗りつぶした跡があった。浪人なのだろうか。だが、そうだとしても、わざわざ家紋を打ち消す人間はほとほと珍しい。
女の方は、少年に比べてはるかに異様な風体だった。若いのに髪が銀の色をしている。服も見慣れないものだ。何の柄もない一面の濃紺。胸元が大胆に露出され、肩から腰までは体の線がはっきり見えるよう布が密着している。逆に太ももから足元までは袴と同じように ふわりと広がっていた。最近この国でも見かけるようになった西洋人が着る類のものだ。どういう名前かは知らない。男に分かるのは――ただ、その女が比肩する人間のいないほど美しいということだけだ。
「なんだ」
「お願いしたいことがあるの」
ずずい、と女が顔を寄せてくる。
戸惑いながらも、男の視線は女の猫目と胸元を往復する。口元のほくろが魅力的だ。

「い――言ってみろ」
「私に言わせるのかしら？　分かってるくせに、無粋ねえ」
「は、はあ？　そ、そういうことじゃなくてだな」
よく見ると、女の服と髪は湿っているようだった。少年は離れているのでよくは分からないが、妙に体にひっついているように見える。二人とも鞄の類を全く持っていない。川にでも落ちて流されたのだろうか。
橋の反対側の欄干で番人をしている上司に目をやる。上司とは言っても、いつ歩けなくなるかというほどの年寄りだ。口うるさく頑固だが、視力が悪ければ耳も遠い。案の定、こちらの動向には一切気づいている様子がない。
「手形を持っていないのか？　二人くらいなら、まあ、通してやらんこともないが」
「あら、嬉しいわ！　気が利く男は素敵よ」
「だがタダというわけにはもちろんいかない」
「前言撤回。最低な男ね」
「おおい！」
女の顔が遠ざかり、誘うような目つきが軽蔑の眼差しに一変した。
「い、いいのか？　俺が許可しないと街には入れないんだぞ」
「あいにくお金もないのよ。ああ、神よ我らを憐れみたまえ」
「安心しろ、金じゃなくていい」
「――本当？　どんなものかしら」
再び女の顔が接近してきた。
男は生唾を飲み込む。こんな美女と接する機会は二度とない。
「それはだな――」
口を開いて、男はまた生唾を飲み込むはめになった。
うなじがじりじりと熱い。何か高熱のもので首を狙われているらしい。刀だろうか。いや、刀だったら冷たいはずだ。何なのかは分からないが、全身の毛が逆立って、現在の状況が非常に危険であることを知らせていた。

「姉さんに手を出すと、死ぬよ」
背中から声が掛けられる。先ほどの少年だろうか。後ろに回られたことに全く気付かなかった。
男は数年ほどここで番人をやっているが、死を身近に感じるのは今日が初めてだった。強いて言えば都市内の剣術道場で立ち合いをやったときくらいだろう。
「す、すまなかった。お前の姉さんだとは知らず、つい、な。許してくれよ」
男の心はすっかり縮こまってしまっていた。冷や汗が顔を洗う。熱いものが、警戒の色を見せながらも段々と遠ざかっていくのが分かった。すこし経って、少年が女の隣に戻ってくる。
「素直な子はかわいいわ。ありがとう、お侍さん。また会いましょう」
最後に満面の笑みを見せて、女は橋を進んでいった。少年がそれに続く。
「おいおい、お侍さんとか、嫌味で言ってるのかあ？」
二人の背中が小さくなっていくのを見ながら、男はため息交じりにつぶやいた。彼らの後ろ姿はあまりに似ていない。本当の姉弟なのか疑問だ。やはり都市の警備本隊に怪しい二人組が街に入ったと連絡でもしたほうがいいだろうか。しかし、連絡を入れれば同時に自分の失態も発覚してしまう。そもそも、それをあの少年に見つけられたら今度こそ殺されそうな気がする。
空を眺めるともなく眺める。雲がどんよりと立ち込めている。朝陽は薄く差しこむばかりだ。
「おい、ひよっこ」
上司が男に声をかけた。
「え？」
見ると、上司は振り返って橋を渡り終えたばかりの二人を睨んでいた。
――やば！

上司は先ほどの一部始終を目撃していないはずだ。いや、していたのか。見て見ぬふりをして後から自分を摘発する考えだったのだろうか。
「あの二人を通したのはお前か？」
「そ、そうです」
「なにぃ？　聞こえんぞ」
「そうです！」
橋の幅は人四人分ある。上司の耳は遠い。怒鳴らざるを得ない。
次の言葉を恐れて、男は耳を閉じた。それをかいくぐって上司の声が届く。
「よもやあの少年、狭霧の人間ではあるまいな？」
「……狭霧？」
耳を解放して、男は呆けた顔をした。
予想が外れたことには安堵だ。しかし、狭霧とは何だろう。どこかで聞いた記憶はあるのだが。
「どうなんだ、狭霧なのか？」
「さ、さあ」
「さあ？」
「分からないといいますか」
「分からない？　通行手形に名前が書いてあっただろう」
「あ」
――しまった。
どうしようもない過ちだった。必死に言い訳を捜す。
すると、今度は男の耳に奇怪な笑い声が入ってきた。
「あーっはっはっはっは！」
大音量だ。
森から青年が現れて、大口を開けて笑いながらこちらにまっすぐ向かってきていた。この人間も見た目がおかしい。赤い僧衣だ。こんな攻撃的な色彩の僧侶はどんな宗派であろうと見たことがない。髪も赤い。揉み上げを長く伸ばしていて、首の辺りで一本に結んで

いる。つまり、剃髪を済ましていない。僧衣であること以外、僧侶の要素は皆無だ。
「やあ、スケベ太郎くん。久しぶりだな」
青年が自分をスケベ呼ばわりしたと認識するのに数秒かかる。
「……こんなに衝撃的な人間を見て忘れるはずがないから、間違いなく俺とお前は初対面だ」
「おお、スケベは認めるんだな」
「突っ込みが間に合わなかったんだよ！」
青年の肌は浅黒い。攻撃的なだけでなく健康的だ。ますます僧侶のイメージ像から離れる。
顔立ちは憎たらしいくらい整っていた。鼻筋がはっきりとしていて、目元の彫りが深い。視線は射るように鋭く光る。奇矯な発言さえなければ話しかけるのが躊躇われるだろう。いや、奇矯な発言のせいでますます話しかけるのが躊躇われる。
「で、通行手形は？」
「もちろん」
青年は僧衣の懐をごそごそとまさぐる。
持ってるのか、と男は意外に思った。変な人間だが、先ほどの二人組よりは疲れないで済みそうだ。
しばらくして掌が差し出される。空だった。
「もちろん、ない！」
「やっぱお前が一番疲れるわ！」
恐ろしく体力を消耗する早朝だ。
「とにかく、それではお前を通すことはできない」
槍を橋の前に傾ける。ここで上司も槍を傾けて交差する手はずだ。しかし、上司はまたも白い眉の下で青年をぎろりと睨みつけていた。そうするだけで手を動かそうとしない。
「お、こちらに話の分かりそうなお爺様がいらっしゃる」
「……貴様、妖術師か」
てんで脈絡のない上司の質問。男は訝しむ。青年もとぼけた顔を

した。
「妖術師？　はて、なぜでしょう？」
「臭いがするんだよ、妖術の」
「はてさて、お爺様の嗅覚がどれほど素晴らしいかは、我輩寡聞にして存じませんが、残念なことにそれは外れと言い申すしかありませんです。そ・ん・なことより！　ここの自然はすぅばらすぃぃ！」
　青年は上司にも増して脈絡をぶち壊しに来るようだ。今や、史上最大の名言を述べたかのような大仰さでもって両腕を広げている。
　男にはもはや手の出しようがない。
「……自然？」
　上司の眉毛がひょこっと動く。
「そう！　護円とは人の産み出した唯一の奇跡のことを指すのです。浮島で営まれる人の暮らし。囲むは水面、飛ぶは魚。あの塀の中で人々は、自然をアン……じゃない、ディロ……いや、言葉を忘れてしまった……。とにかく！　自然をフィー……否、スィーツすることができる！」
「貴様……」
　上司の顔中の皺がめいっぱい引き延ばされ、両目が大きく見開く。
「この奇跡を起こすために、お爺様方がどれほどの苦労をしたのか測りかねます。粉骨砕身、粒粒辛苦、刻苦精進！　我輩ども若い人間にはとても真似できぬ偉業と言えましょう」
「き、貴様……分かってくれるのか。わしらがこの街を作り上げ、守るためにどれほどの苦難を味わってきたか……」
　上司の声が震えている。男からは遠目でよく見えないが、どうも目尻には涙の粒が溜まっているようだ。
「我輩は是非ともお爺様方の努力の結果を拝見したい。自然と人工の折衷を体感し、己の卑小さを思い知りたい。――ここを通ってもよろしいでしょうか」
「好きにせい」
　そう言って上司は嗚咽を始めた。

「え、ちょ！？」
男は慌てる。こんな怪しさを体で表したような青年を通していいはずがない。そもそもこの街が作られたのは上司の生まれる何百年も前の話だ。青年の話で上司が泣きだす意味が分からない。
「なんなら、わしが案内してやろうか」
「お爺様にはこの街の警備をお任せしたい。お爺様がこの橋から消える日は、護円が崩壊する日。お爺様の警備無しに護円は成り立たないのです」
「もっともだ……。お主は街の奴らよりもなお深くこの街を理解しているよ」
青年は満足げな顔をして、橋を堂々と渡って行く。ぽつぽつと街の中から現れ始めた農民たちが、不審そうに眺めながら通り過ぎる。
「おい、じいさん！　なに口車にのってんだよ。あんな奴通していいわけがないだろう」
ようやく状況に思考が追いついた男が、上司に詰め寄る。
「き、貴様！　このわしに向かってなんだその態度は！」
「は――！？」
男の顎に衝撃が走った。上司が振り上げた槍の柄にアッパーを決められていた。
「ぐぇ！？」
――なんで俺がこんな目に。
徐々に落下する体。自分もまたおかしな二人組を通したことを失念したまま、男は不条理感に打ちひしがれて昏倒した。

界と七雲の通された部屋は、汚らしい六畳ほどの座敷だった。
護円に宿の類は一つしかなかった。通りかかった町人の億劫そうな道案内を聞いてたどり着いたのが、その唯一の宿場「延々荘（えんえんそう）」だ。昔は旅籠（はたご）をメインに営業していたらしいが、現在は飲み屋を営んで生計を立てている。宿泊施設はおまけだ。よほど旅人が少ないのだ

ろう。実際、この平和な世の中でわざわざ辺境の自治都市にやってこようという物好きはいないという話である。界と七雲が帳場に一泊を申し立てたときも、女将は珍しがるような訝しがるような様子だった。もっともこれは、旅人が少ないということだけでなく、朝早くにおかしな格好の二人組が訪ねてきたことに対する自然の反応かもしれないが。

「この街、物々しいのは見た目だけね」

畳の上に寝そべりながら、七雲が言う。濃紺だったドレスが、今は淡いピンクに変わっている。延々荘に来る前に行った銭湯で着替えたようだ。どこに隠していたのだろうか。

「大きな戦なんてここ数十年起きていないからね。平和に慣れちゃうのが普通さ」

首筋に刃物をつきつけただけで界たちを通した番人の男。界が見たところでは、刀を抜く素振りすら見せなかった。とてもではないが剣術を習った人間には思えない。平和ボケというやつだろうか。街に入っても、農具を持った農民や工具を担いだ職人ばかりが目についてて、そもそも帯刀している人間すらほとんどいないようだった。

界は七雲の隣で座布団に腰かけ、茶をすする。服は街の店で買ったばかりの新しいものだ。色合いはほとんど変わらない。黒の羽織に黒の肩衣、灰色の袴。

「あら、それは姉の仇を斬ることに躊躇いを覚えてしまう自分への言い訳かしら？」

「うるさいな」

七雲の尖った物言いにも、界はもうキレることがない。決して恨みを忘れたわけではない。ただ、七雲がそうした言葉をあえて放っていることに薄々ながら感づいていた。時に挑発的な態度をとることで、七雲は何かを隠そうとしている。あるいは、界の感情を焚きつけて何かを果たそうとしている。七雲には界のもつ何かが必要なのだ。だからこそ身を挺して界の命を守ろうとするのだろう。

「これからどうやって私を殺すあてを見つけるの？」

「そうだなあ。君は、それに協力してくれるんでしょ？」
「そのつもりよ」
界は茶を飲み干す。
「なら、あてを見つけるためにも聞いておきたい。教えてくれ。君は一体なんなんだ？」
「質問の意味がよく分からないわ」
そう言って七雲は寝たまま肩を竦める。
「君は人間じゃない。人間以外の動物か？　違う。生物であるかも分からない。刺したり斬ったりしても死なないから。妖怪なのか？
それも通じない。僕の家は妖怪を敵視していた。妖怪を神として崇めるなんてありえない。じゃあ、君の正体はなんだ？」
湯飲みを置いて七雲を見る。
七雲は右腕で両目を覆う。
「分からないわ。何百年もあの黒真珠として生きてきて、自分が生まれた頃の記憶なんて忘れてしまった」
「……それは本当？」
「もちろん。自分のことも何もかも分からないまま何百年と生きるのは本当につまらないものよ。死んでしまいたくなるくらいにね」
障子越しに入ってきた午後の日差しが、七雲の右腕をはすに照らしている。
界の耳には、最後の一言だけが七雲の本音を語っているように聞こえた。
「あの仮面の男はなんなの？」
「知らないわ」
間髪を入れない否定の言葉。
「……嘘でしょ？　あの男を見たとき、震えてた」
「知らない。見たこともない」
七雲の口元は震えていた。
ぬめった沈黙が訪れる。
「……私を殺すことについて、一つだけヒントになるようなことを

知っているわ」
　しばらく経って、七雲が口を開いた。
「なに？」
「私の体は二つの異常を抱えている。一つは、死なない。もう一つは、常識では計りきれない量の妖力を備え、妖術師とは違った形で妖力を運用できること」
「妖術師とは違った形で妖力を……？」
「あなたに与えた集極の力のことよ。どういう構造かは分からないけれど、変な妖力の使い方が出来るの」
　集極も妖力の一種だということか。
　推測済みのことではあったが、界は信じられない気持ちだった。十八年間、妖術の使えないことで苦悩してきた。姉を死なせたのも、元はと言えば妖術が使えない自分のせいだとも言える。それなのに、思いがけないことであっけなく妖術を使えるようになってしまった。
　もっとも――。
　所詮は借り物の力なのだが。
「えーと……つまり、どういうこと？」
「死なないということについて何も手掛かりがつかめないなら、もう片方について調べればいいのよ。妖力そのものに関連する場所や事柄に当たってみれば、何か進展があるかもしれないわ」
「妖力そのもの……」
　この分島地域は妖力に縁のある場所が多いことで有名だ。狭霧家もそういう理由でこの辺りに屋敷を構えていたのだろう。
「妖力で一番有名なのと言えば、神楽山」
　霊峰神楽山。妖術師が神聖と崇める聖地。昔から妖怪の伝承には事欠かず、豊富な妖力の源泉地として名をはせる。だが――
「でも、ダメだ。あそこには分島城がある」
　この一帯を支配する幕府の本丸、分島城。戦乱の時代に現幕府軍が占領した頑強な山城が、神楽山の中腹で塀を敷いている。狭霧家は当時幕府の傘下に入り、分島城に入城後は妖術師として絶大な力

を誇った。山が与えた大量の妖力のおかげだとも言われるし、それ以外にも神楽山には何かがあるのだとも言われる。
ただ、今となってはその幕府が狭霧家を滅ぼし、唯一の生き残りは逃げ回る身だ。過去の話などあてにならない。
「いいじゃない、行ってみましょうよ」
「……え！？」
七雲は上半身を起き上がらせ、しっかりとした目つきで界を見ていた。いつもの彼女に戻っている。
「ここからそう遠くないんでしょう？」
「馬があれば、半日で行けるけど……」
「ものは試しよ。追手が来ても、私が盾になってあなたが剣になれば怖いものはないわ」
「そんな乱暴な……」
「そうそう、乱暴はよくないぜ！」
――ん？
突然、第三者の声が割り込んだ。同時に襖が音を立てて開かれる。
「誰？」
不意の侵入者に詰問の声を上げながら、界は刀に手をかける。
現れたのは見慣れない格好の青年だった。全身が赤い。法衣も、髪も、見ようによっては肌も。
「……あれ？」
界はその青年に見覚えがあった。整った眉、自信ありげに結ばれた唇、精悍な顔つき。以前、毎日のように接していた人物だ。おぼろげな記憶とともに懐かしさがこみ上げてくる。
六年ほど前、狭霧家に妖術師の見習いとして他家から住み込みで修業に来ていた人間だ。普段から奇異な言動で周囲を戸惑わせ、家の隅で縮こまっていた界にもやたらと絡んできた。狭霧家内で徹底的に放置されていた当時の界にとって、彼は唯一友人と呼べるようなものだった。歳が六つほど離れていたので、友人というよりは兄といったところか。確かに変人ではあったが、いつも愉快気に過ご

す彼を、界も憎からず思っていた気がする。
「――星流さん？」
「久しぶりだな落ちこぼれ君！」
両腕を広げて再会の喜びを表そうとした星流に対し、しかし界は警戒の色を薄めない。
「あなたは幕府の人間……いや、それだけじゃない。分島城の城主のはずだ」
「お、良く知っているな落ちこぼれ君！」
「……ここは幕府の人間が入れない場所のはずなんですけどね」
「番人の男を恐喝して不法侵入した君には言われたくないぜ」
眉根を寄せて不審を強く表す界。
「盗み見してたんですか？」
「あ、彼女が例のあれかい？」
質問を真正面から無視して、星流は七雲に目を転じた。そのまま部屋に足を踏み入れようとする。
「待って下さい」
界は素早く刀を抜いた。集極を発動して星流に向ける。
星流は動きを止めた。震えている。怖がっているのではない。涙腺を湿らせて、生き別れの母に会ったかのような顔をしている。
「わ――我輩、かかか感動だ！　ああ――世の中とはかくも不思議にダンサブル！　妖術を使えないがゆえに双子の姉を失った少年が――」
「黙ってください！」
荒々しい声に、星流は口をつぐんだ。だが、動じる様子も反省する様子も見えない。
「これは、かりそめの力です。僕の力じゃない」
「なるほど、未だに君は妖術を使えないことに負い目を感じて――」
「あなたは！」
再び、界が星流の声を遮る。
「分島城の城主だ。狭霧家を襲撃させたのも、あなたなんでしょう

？」
今まさに界たちを追っている人間。彼らの親玉と言えば、どう考えても目の前のおかしな青年に違いない。だとしたら、七雲を奪いに来たのだろうか。
「あれ、おかしいな。狭霧の人間が死ぬのは嫌だったかい？　君なら喜ぶと思ったんだけど」
「……ッ」
何も言い返せない。狭霧家は仇だったのだ。星流の言うとおり喜ぶのが当たり前の反応だと、界自身もそう思っている。
だが、実際に屋敷の燃える様を見て、界は何の感情もこもらない仮初の笑いを浮かべることしかできなかった。高笑いでもすべきだったのだろうか。
姉の復讐を果たす。その命を下した人間を見て感じるこの憤りは何だろう。逆に、星流に対して感謝すべきなのか。そんなことはどうあってもできそうにない。
自分の感情が読めない。どう感じるべきか分からない。
「あなた、狭霧家に見習いとして来てた人かしら？」
返答に詰まって顔を俯けた界。その代わりに口を開いたのは七雲だった。
「我輩を覚えていたか、蓬莱の玄玉の枝！」
「七雲よ」
「失礼。七雲殿」
自分の内面を見つめながら、界は二人の会話を疑問に思う。
蓬莱の玄玉の枝は地下に安置され、特別な時以外は見ることすらかなわない。他家の見習いに見せるなどもってのほかだ。なのに星流と七雲に面識があるとは、一体どういうことだろうか。
「何の用でここへ来たのかしら」
「よくぞ聞いてくれた！」
界の疑問を置き去りにして二人の会話は進んでいく。
星流が断わりもなく部屋に入ってくる。界は星流の進入を再度阻

止しようと右手に力を込めて――諦めた。納刀し、両腕をだらりと下げて座布団に座り直す。七雲が平気そうにしているということは、とりあえずの危険性はないのだろう。
「我輩はな、自然を感じに来たのだ！」
星流は界と七雲の間にあぐらをかいた。どこまでも態度が大きい。
「……へえ」
幾分トーンダウンして七雲が返答する。
界はその台詞を耳にたこができるほど聞いた覚えがある。口癖なのだ。護円に来たいと何度か叫んでいたことも憶えている。
「君たちは、ここがどんな場所か知っているか？」
「どんな、場所……？」
民衆が民衆を治める自治都市、軍隊を抱えた都市、水上に浮かぶ都市。
そのままを界が告げると、星流は馬鹿にしたように鼻で笑って返した。
「ふふふ、全然分かってないなあ、落ちこぼれ君。ここはな、昼の鮫が大量に溜まっている場所なんだよ」
「昼の鮫が……？」
「そう！　妖力には、あらゆる生物の体内に宿る夜の霊鳥と、外気に含有される昼の鮫と、この二種類がある。我輩たち妖術師は、基本的に夜の霊鳥で昼の鮫の流れを動かして妖術を扱うわけだ。昼の鮫の溜まる場所で何が起こるか、君も知っているだろう？」
「……おかしなことが、起きる」
「その通り！　例えば、超巨大な湖が出来あがったり、その中に超巨大な浮島が出来あがったりね！　だから私はここに来た！　溢るる昼の鮫、つまり自然を全身で浴びようと思ってね！　妖術師らしい純粋な望みだろう？」
そうなのだろうか。
狭霧の人間達は、昼の鮫を浴びるなどという素朴な考えは抱いていなかったように思う。むしろ、それをいかに利用するかで苦心し

ていたはずだ。
「それで、私たちのところへ来た理由は？　偶然だとか、懐かしい落ちこぼれ君に会いにわざわざ来たわけじゃないんでしょう？　狭霧家の生き残りの始末でもするためかしら」
「いやいや、あの門のところでこの落ちこぼれ君の姿をたまたま見かけてね。せっかくだから懐旧の情を温めようと思ってついてきたまでだよ。落ちこぼれ君にはその気がないようだけど」
星流は両側のこめかみを拳で挟み、ぐりぐりと回した。いててて、と自分でやっておきながら悶絶している。しかも止める様子がない。
全くもって理解不能だ。
七雲は何も返さず、無表情でそんな星流の目を見ている。
それに気付いたのか、星流はぴしっと座りなおした。
「おお、我輩に惚れてしまったかい？　まあ我輩ほど欠点に縁のない人間もそうそういまい。というかいない。岡惚れも仕方ないといえば仕方な――」
「本当のことを言ってくれないと界にあなたの首を掻き切ってもらうわよ」
「い、いやあ、最近のお嬢さんは攻撃的だなあ、はは」
七雲は界のことを従僕か何かだと思っているのだろうか。
――星流さんの返り血、浴びたくないなあ……。
「まあ実を言うと、いくつか君たち――というか、落ちこぼれ君に教えておきたいことがあってやってきたのだよ。……まず一つは、その豊富な昼の鮫がまさに今、現在進行形で減り続けているということ。ものすごい勢いでね」
星流は七雲を見つめ返す。
七雲はそっぽを向く。
「どういうことです……？」
「どういうことだろうねえ。どうなるかは我輩も分からないんだな。妖力が急激に失われることで自然に何が起こるかは未知数なんだ。普通は起こらないことだからね。ま、そんなわけでこの街に長居す

ることはお勧めしないよ。今すぐ旅立つべきだ」
何が原因だというのか。
無茶苦茶な要求を出しておきながら、質問を許さないとばかりに、星流は次々と言葉を紡いでいく。
「もう一つは、この街の歴史に関することだ。この街は昼の鮫の豊かな場所だ。なのに住んでいる人々は不思議なことに妖術を憎んでいる。その訳は分かるかい？」
「……いえ」
「戦乱の時代、狭霧家と、ある大きな妖術師集団がこの近くで大きな争いを行った。妖術師同士の戦いは、往々にして周辺に大きな損害を与えるものだ。当然、この辺りもその余波を喰らった。彼らが一生懸命築きあげたこの街は半壊してしまったんだ」
狭霧家からそうしたことを教えてもらったことは一切なかった。この辺りで戦いを繰り広げたのは知っている。ただ、その場合も狭霧家の勝利が誇張されて終わるだけだ。
「落ちこぼれ君、覚えておくといい。人間が得ることのできる様々な感覚の中で、最も記憶に残るものは――痛みだ。だから、数百年経った今でも、ここの人々は妖術師を毛嫌いしている」
「ああ……だからそんな変な格好をしているんですか。自分が妖術師だとばれないように」
「ばっ……」
星流は顔を赤くした。ますます全身が赤く燃えているように見える。
「バカもん！　これは我輩の私服だ！」
「し、私服……？」
私服に法衣を着る人間など聞いたことがない。
「超絶にダサいわね。二度と見たくないわ」
「なっ……」
着こなしに自信があったのか、星流は七雲の酷評に言葉を失った。赤くなった顔が、今度は青くなる。服や髪の赤と相まって、見事な

コントラストを描きだした。

厚い雲が空をなめらかに流れて行く。青空はほとんど顔を出さない。雨雲にはまだ至っていないらしく、草鞋の下の地面は乾いたままだ。

界と七雲は灰色に染まった街を並んで歩いていた。

「昨日の彼が言ったこと、従わなくてよかったのかしら？」

星流が部屋に来訪し、嵐のように去ったのは既に前日のことである。すぐに旅立てとは言われたものの、二人はまだ護円に留まったままだ。

「何の準備もせずに神楽山に行くなんて早計すぎる。それに、星流さんの狙いも知れない。言われたとおりに護円をあのあとすぐ出てたら、待ち構えてた幕府軍に捕えられる可能性だってある。まあ、それでも今日中には出発するつもりだけどね」

「あんな変な人がそんな計算をしていたように思えないわ」

「あんな変な人でも、一族を滅ぼす命令を下したりするんだ。そして、僕は滅ぼされた一族の生き残り」

「信用していないのね」

「当たり前だろう？　僕も君も、幕府に狙われてる。奴らの上にはあいつ――星流さんがいるんだ」

恐らく、星流の真の狙いは七雲だ。狭霧家が焼かれたのは七雲を手に入れるためだった。昨日部屋に来たときも、終始七雲に興味を示していたように思う。

町屋が囲む規則正しい十字路を、地図を参考に左へ曲がる。ぞんざいな扱いをしてくる延々荘の女将に頼み込んで拝借した地図だ。女将はかなり苦い顔をしていた。

入った通りは少々狭くなっていた。両脇を生け垣に挟まれている。通りがかった茶色い羽織の男が、二人を見て顔をしかめた。

護円は計画都市だ。街全体がマス目のように区分され、決められ

た位置に決められた形の建物が建っている。民衆同士の結束力を促すために街の草創期から成立したもので、その精神は今の住人にも生きていた。住人の多くが、街の住人であることを自覚し、自分たちの街を盛りたてようという気概に満ちているのだ。だが――強固な結束を裏返せば、徹底した排他性と変わる。住人は、余所者を毛嫌いする。道案内をした住人が億劫そうだったのも、延々荘の女将の態度がぶしつけなのもこのためだろう。

界たちの場合は、七雲の珍妙な格好が悪い意味で注目をひいているということもあるだろうが。

「次は何を買うのかしら？」

「ああ、えっとね」

二人は神楽山へ行くための準備を進めていた。食料、防具、治療薬、その他いくらでも買うべきものは残っている。小判は、界が狭霧家から脱出する際に懐へ忍ばせたものが何枚も残っている。

行く手に再び人が現れた。十ほどの少女と、少し年下に見える少年。顔つきが違うので、姉弟ではないだろう。

「あ――」

界の目が吸い寄せられる。

少女は少年の手を引いて走っている。少年は何事かつぶやきながらも、嫌そうな様子は見せない。通りに二人の子供の無邪気な声が響く。

通り過ぎる直前で、少女が界と七雲に気づいた。立ち止まり、大きなくりくりした目で七雲を見上げる。

「お姉さん、キレイな服着てるね！」

屈託のない笑み。

七雲も立ち止まると、しゃがんで少女の髪の毛を撫でる。

「ありがとう。優しいのね」

七雲の笑みもまた、邪気がない。これが自分の頬を舐めてきた悪魔だと、界には到底信じられない。

少年は少女の陰に隠れておずおずとこちらを見上げていた。どう

したらいいか分からないといった体で少女の着物の裾を遠慮がちに掴んでいる。
――これは……。
その少年の姿は、界にある深い感慨を呼び起こした。強い既視感。むしろ、同調感というべきだろうか。界はあの少年を傍から見たことがあるわけではない。ただ、自分はあの少年と同じ目で世界を見つめたことがある。
少女は七雲と二言三言交わすと、再び少年を引き連れて通りを走って行った。跳ねるように明るい後ろ姿。対して、少年の背中は静止し、縮こまっている。
「……似てるなあ」
「なんのこと？」

幼い二人が角を曲がって見えなくなると、界と七雲も再び前を向いて歩を進めた。
「いや、なんだかあの二人さ、昔を思い出すようだったんだよ」
通りが開けて十字路になる。渡った先が商家の集う地区だった。右の手前に唐傘や被り笠などを並べる小さな店がある。他の商売と兼業しているが、どうやらそこでなら旅装が揃いそうだった。
「そろそろ過去に囚われるのは止した方がいいわよ」
十字路を渡り始めてから七雲が言った。
商家の地区と民家の地区の間は大通りになっていて、世間話に興じる婦人の集まりや、あちこちを走り回る若い男などが溢れていた。先ほどまでの静けさが嘘のように騒々しい。
「僕は……姉さんがいなかったら生きていない。過去を捨てることは出来ないよ」
「そうねえ……じゃあ、過去を忘れるくらいの思い出を私が作って

あげるわ」
「……え？」
七雲の声色が妖しさを帯びている。界を見つめる流し目。
「そ、それって……どういう……」
答える界は苦笑を交じらせるしかない。突然真剣味を滲ませたかと思えば、今度は誘惑してくる。全く行動が読めない。
――と。
七雲の様子が更に一変したのは、その時だった。
「……七雲？」
道の真ん中で、七雲が止まった。そのまま立ちつくし、茫然と宙を見る。
「……どうしたの？」
七雲の脚が震えている。そのまま震えは広がって、全身にまで達した。顔が蒼白になって、髪の色と識別できない。
「――来たわ」
「なにがさ」
界の間抜けな返答は、街全体を覆う轟音によって掻き消された。
「！？」
鼓膜を震わせ、ともすれば破壊してしまうような巨大な音。どうにか認識できたのは、それは何かが崩れる時の断末魔に似たものだということだけだ。
――崩れる音？
出所に思い当って、界は南門の方を見上げる。高く築きあげられたはずのそれが視野に入ることはなかった。それどころか、周りの漆喰塀や物見矢倉も見当たらない。
「界！」
七雲が両手で界の顔を挟み、強制的に自分の方へと向かせた。
「な、なに？」
「――逃げるわよ」
そう言うと、界は七雲に手を握られた。彼女はそのまま街の反対

側の門へと足を向ける。
界にはなにがなんだか分からない。ぼやけた思考のまま七雲に連れられて駆けだす。その脳裏に、先ほどの少年少女が浮かんだ。過去の自分と同じに見えたあの少年。しかし実際のところ、今の自分も大差ないらしい。
――いや。
ダメだ。今の自分も同じであっていいはずがない。
生け垣に入った。来た道を戻っている。
勝手に動いていた足を、そこに来て界は全力で押しとどめた。地面に草鞋で引きずった跡がつく。気付かないのか、七雲は構わず界の手を引いて前に進もうとする。
「ちょっと待って！」
七雲の手を振り払う。
ようやく七雲は界を見た。払われたまま二、三歩前に出て、振り返る。
「どうしたの？　早く逃げないと」
「ちょっと待ってよ！　このまま逃げていいの！？　さっきの女の子と男の子はどうなるのさ」
「そんなの知らないわ。とにかく今は逃げるのが先決なのよ。じゃないと――じゃないと奴が来る」
「奴って誰だよ」
界の目には、あの幼い二人が過去の自分と姉に重なって見えていた。二人の姿が界の描く幸せの形だ。それを壊したくない。壊されたくない。この何が何だかよく分からない状態で逃げ出せば、きっと彼らは傷つき――下手をすれば死んでしまうだろう。得体の知れない何かは、この街を破壊しつくしてしまうかもしれないのだ。
「あいつを、今のあなたが倒すことは出来ない。無理なの。あなたが言ったとおり、確かに何の準備もしないまま神楽山に行くのは早計だわ。もう少し力をつけてからにすべきね」
「どういう意味さ。何を言いたいんだか全然分からない」

何か言い返そうとして、しかし七雲は口を止めた。体が強張っている。それから何かを諦めたようにため息をつき、ゆっくりとした速度で左上空を見上げる。向かい合っていた界は、自然と七雲の視線を追った。

民家の屋根の上。男が一人、板葺きを地面にして堂々と立っていた。

「よう。人前で喧嘩か？　痛々しいなあ」

仮面で隠された目元、中肉中背の肢体を隠す白装束。

界はあの男を知っている。

「喧嘩がどうして起きるか知ってるか？」

唯一白くない場所があった。腰の鞘が、毒々しい紫に染まっている。

間違いない。

あの男だ。紫の矢で界と七雲を狙った白装束の男。あの紫と鞘の紫は、まごうことなく同じ色をしていた。

仮面の男は、二人の答えを待つように数秒間沈黙する。何も返ってこないのを確認すると、口の端を吊り上げて笑う。

「知らないのか？　じゃあ、答えを教えてやろう」

流れるような動作。

いつの間にか男の姿は屋根から消え、界めがけて落下してきていた。

「それはな、どこかが――」

その手に、紫炎を宿す刀を握って、

「――痛むからだよ」

刃を界に向けて。

幕間、ある少女の回想その二

――こんな――こんなはずじゃなかった。

焼け野原と死体の山の真ん中で、少女は立ち尽くしていた。

太陽は光を発することなく、雲だけが天上でうごめいている。先ほどまで、ここ神楽山の中腹は三寸先が見通せないほどの木々で埋まっていた。今やその影も形も、跡すら残っていない。見晴らしは良くなったが、代わりに散在する屍が視界を白く染める。少女を責め立てるように。

――いや、きっと私はこれを望んでいたんだ。分かっていて――やったことだ。

彼らは少女を道具として扱っていた。痛みを感じないからというだけで、少女を人間とは見なしてくれなかった。この体にされるときの壮絶な痛みが蘇ってくる。

――そう、これは報いだ。

彼らにとって少女は戦いの切り札だった。切り札は持ち主の掌中になければ意味がない。彼らは少女を従順にさせ、支配しようと力で管理してきた。そこから逃れるには、相手を殺すしかない。

麓の湖に浮かぶ街からも火の手が上がっていた。戦の余波を受けたのだろう。妖術師同士の戦闘は、周囲に多大の損害を与える。

少女の着物の裾を誰かが引っ張った。何気なく下を向き、白装束の男と目が合う。白い法衣、白い笠、白い肌。自分が裏切った人間の一人だ。だが、何かがおかしい。肌が白すぎる。

「あ――」

少女は気づく。

男の目が空洞であることに。男の顔に皮がなく――頭蓋骨そのものとなっていることに。

「きゃあああ！」

頭を真っ白にして後ずさる。足が絡まり、尻もちをついた。後ろ

は山頂に向かう急な斜面になっていて、それ以上下がることができない。骨ばった――否、骨そのものとなった指が裾を掴む。声帯も肺も無くなっているはずなのに、屍の口からは空気の漏れるような掠れた音が聞こえてくる。

妖術で生気を奪われた人間の末路。少女が裏切った人間の末路。

もしも少女が異なった決断をしていたら、今もこの人間は何か喋っていたし、何か表情を浮かべていたし、何か人間らしい動きをしていた。そこら中に横たわる人間だった白い物は、全て少女が選び、望んだ結末なのだ。しかし少女は喜べない。ただ戦慄だけが支配する。

――報いだ！　報いなんだ！

そう思いこもうとしても、少女はどうしても割り切れない。

裾から屍の手が外せず、パニックに陥った。

その後ろから血の通った人間の腕が伸びて、恐怖の元を丁寧にほどき始めた。

「……？」

首をかしげて背後を見る。

全身を黒一色に染めた青年が、少女に向けて微笑んでいた。黒いフードを被っているが、少女の角度からは眼鏡をかけた凛々しい双眸が覗ける。

「大丈夫ですか？」

「あ……はい」

屍から解放されて、少女は立ちあがった。

本当に全身が黒い。黒い法衣、黒いフード、黒い杖。白装束の一団とは正反対の格好だ。青年の後ろには同じ姿の人間が何人も控えて、斜面の上でバランスをとりながら辺りを警戒している。

白装束と戦い、妖術で殺した人たちだ。少女が白装束を裏切らなければ、今頃荒地に倒れているのは彼らの方だっただろう。

「ありがとうございました。もしあなたが協力してくださらなかったら、今頃は私たちがこのような醜い姿を晒していたことでしょう」

「い――いえ」
青年の声は澄んで柔らかい。
少女には分かる。青年が強力な妖力を宿していることが。
――食べたい。あなたの膨大な妖力を――全て吸い取ってしまいたい。
少女は、いまそれをすべきでないことを知っている。彼らの一族には圧倒的なまでの妖力が備わっている。白装束とは比べ物にならないほどの。彼らに取り入ってしまえば、豊かな妖力をずっと与えられて生きていけるだろう。
そう――これが彼らを裏切ったもう一つの理由。
「いくつかあなたに確認させてほしいんですが、よろしいですか？」
「……どうぞ」
「あなたの不可解な力は、場の昼（さめ）の鮫を吸収することだ。私たちのこの認識に間違いはないですね？」
「……ええ」
「場に昼の鮫が無くなってしまえば私たち妖術師は妖術をまともに扱えない。あなたは大量の妖力をその身に貯め、任意の人間に昼の鮫を提供できる。あなたが協力してくれるだけで、妖術師との戦いで私たちは絶対的有利に立てる」
「その通り――です」
それを聞くと、青年は口を歪ませた。少女の脇を通り過ぎて、うつ伏せに倒れた先ほどの屍に歩み寄る。
「素晴らしい力だ。このくそったれどもが作ったとは思えない！」
言って、青年は屍を頭から蹴飛ばした。強烈な蹴り。屍は肢体の骨をバラバラと散らせながら宙を舞う。グロテスクな花弁が風に吹かれたようだった。
少女は息を呑んでその光景を見つめる。
「ああ、あともう一つだけ確認させてください」
青年が少女を振り返ったのと、いくつもの骨がボトボトと地面に落下したのは同時だった。

青年の声は澄んでいても、決して柔らかくなどない。ひたすらに冷徹で、氷が刺さってくるようだ。
「あなたは私たち人間の体に宿る夜の霊鳥（とり）すらも、吸収することができる」
――この男は、どこまで分かっているのだろう。
「そうです。少し手間はかかりますが……」
「なるほど。――実は、あなたに一つ提案があります。あなたにはこれからおいしい夜の霊鳥を差し上げましょう。数十年に一度ですが、妖力は膨大なのに妖術を使えないおかしな子供が生まれるのです。命そのものが妖力となっているあなたには、悪くない話のはずだ」
少女は悟る。この男は全て分かっているのだと。
「……その代わり、私は何をすれば？」
「この戦だけでなく、これからもずっと私たちに協力していただきたい」
青年は危険な香りをかもしだしていた。表だけ取り繕って、その内実に鋭利な凶器を――狂気を隠し持っている。もし彼と一緒に行動することとなれば、少女は果てしなく危うげな、あるいは人ならざる行いに手を染めねばならなくなるだろう。
白い屍を眺める。
――私は、どうせもう人間じゃない。
「分かりました。あなた方に……ついていきます」
「――素晴らしい！」
青年が杖の持っていない左手を掲げる。軽く指を鳴らすと、全ての白装束の死体から炎が噴き出した。普通の炎ではない。跡に消し炭すら残らない、何もかもを焼却する業火だ。
「私はね、常々思っていたんですよ。この世にはウジ虫と同等ですらない、微生物よりも矮小な妖術師が多すぎる。この――狭霧家を除いてね」
雲間から夕陽が覗く。青年の影は炎のそれと重なって、巨大な鬼

をかたどっている。
「妖術師は、狭霧家だけで十分だ。あなたもそう思いませんか？七雲さん」
炎が一段と燃え上がり、七雲の額を汗がつたう。
どこかから憎悪の叫びがあがったのは――その時だった。

四、亡

光と光が交差し、激突し、火花を散らしている。
界と仮面の男が路地のなかで斬り合っていた。刃の激突する音が異質だ。金属音ではない。より一層激しい、まるで電撃が衝突しているかのような響き。
「あんたは一体、何者なんだ！」
界が踏み込んで薙ぐ。
男はバック宙で避けると、同じように横へ薙いできた。二人の間合いは離れている。男の刀身の長さでは足りない。しかし――
「――ッ」
男の刀は異常だった。刀身が一瞬にして鞭のように伸びた。周りの生垣やその奥の民家を巻き込みつつ、界へと向かう。その切っ先は紫の炎を纏っていた。否――炎そのものが刀身を形成している。
集極を発動した刀で受け止める界。全身に圧倒的なまでの衝撃が走った。ものすごい圧力だ。男の力か、それとも炎自体の持っている力なのか。
そのまましなやかな動きで炎から与えられる斬撃。何歩も後ずさりながらどうにかこうにか防いでいると、界は妙なことに気付いた。
銀の輝きを放つ集極の光。その銀色が、攻撃を受けるたび炎と同じ紫色に侵食されている。刀身に紫のまだら模様が浮かぶのだ。すぐに消えて終わるのだが――これは一体何なのだろう。
しばらく経って攻撃の手が止み、炎が引っ込んだ。
生垣や民家が崩れたために、路地には尋常でない量の砂埃が立ち込めていた。視界が上手く利かない。男の姿も砂埃の向こうだ。
先ほどの門や物見矢倉の破壊もこの炎によってなされたのだろう。集極と同じく相当の高熱を帯びているらしく、炎が近づくたび界は尋常でない熱気に晒された。もし集極という力を持たず普通の刀で受け止めていたならば、開始三秒で刀身が融けてなくなっていたは

ずだ。
「何者？　そうだな……名前は東西南北。化物を制裁にきた」
「化物？」
脱力したような声とともに、足音が聞こえてくる。東西南北と名乗った男のものだ。ゆっくりと着実に大きくなっている。
それに合わせて、界も一歩一歩後ろへ下がる。刀を中段に構えて警戒は怠らない。
両脇の民家から人々の悲鳴があがっていた。このまま場所を変えずに戦っていれば、街を中破させるのも時間の問題だろう。界の頭にこの路地で見かけた幼い二人が浮かび、首元の蒼い石に意識が集まる。彼らを傷つけたくない。どうにかして東西南北を街の外へ連れ出さねば。
七雲は隣にいた。界と同様、ゆっくりと後退している。
「七雲、奴を街の外まで引っ張り出そう。ここで戦うのは避けたい」
小声で話しかける。
「戦おうとか思わないで。街の外まで出たら、どこまでも逃げるのよ」
「あんな奴から逃げ切れると思う？」
七雲は押し黙る。
路地を出て、十字路に出た。相変わらず周りは民家ばかりだが、今出てきたばかりの路地以外はどの道も幅が広く、十字路はちょっとした広場のようになっている。地理を把握し終えていないのでうろ覚えだが、ここからなら壊されていない門の方が近いはずだ。
とはいえ街の中心近くであるこの十字路からすれば、どちらにしろ遠いことに変わりはない。
十字路を過ぎて路地の向かいの道へと入る。まだ東西南北が現れないことを確認して、二人は振り返り、走りだした。
それを狙っていたのだろうか。同時に路地から炎が伸びて界の背中を追う。
「くそ……っ」

再び振り向き、刃で弾く。
その時にはもう、東西南北が路地から飛び出していた。先ほどの妙に間のある足音からは想像できない弾丸並みの速さだ。刀身を元の尺に戻すと、いきおいよく界に斬りかかる。
界は既に一発目の防御で体勢を崩していた。避ける術がない。どうしようもなくなって再び刀を胸の前に掲げる。
「うあ――」
想像を絶する怪力だった。しっかりと防いだにも関わらず、界の体は宙を浮き、支えを失って後ろへ吹き飛ぶ。何メートルも。生垣を突き抜け、民家の板壁をぶち破る。
七雲の視界から、界の姿は消え去ってしまった。
「か、界！」
安否を気遣う声は弱々しい。普段の七雲ならば、絶対に出さないほどに。
「おやァ？」
東西南北の目が七雲を向く。
「痛みを忘れた化物は怖がっているようだ。相変わらずの臆病っぷりだなァ。臆病ゆえに、自分の選んだ少年を妖術で助けてやることすらできない」
東西南北はじりじりと七雲に近寄る。気だるそうな物言いが豹変していた。感情が高ぶり、興奮を抑えきれないでいる。
七雲は再び一歩一歩下がって間合いをとりながらも、自分が逃げられないことを知っていた。あの妖刀が動く。それだけで自分は終わる。
「ガキィ！」
東西南北がひと際大きな声をあげた。
界の返事はない。気絶しているのだろう。
「この世で一番大事なものは何だと思う？」
返事はない。
構わず東西南北はあとを続ける。

「それはな――痛みだよ」
やはり、返事はない。
「なに？　命ィ？」
返事を捏造する。
「ヒャハ、違うなァ！　絶対に違う。命そのものに価値はない。重要なのは、命をどう感じるかにある」
ケラケラと笑い、突然顔を俯ける。
「……例えばだ」
そう言って、東西南北は刀を振り上げた。そのまま一歩も動かず、乱暴な太刀筋で振り下ろす。斬ったのは――自分の左手首。
分断された左手が動きを失ってボトリと地面に落ちる。左手首から流れる大量の血が、その上にイチゴシロップとなって降り注いだ。鮮血は流れ落ちるだけでなく四方八方に飛び散り、東西南北の白装束に赤い紋様を描きだす。
凄絶な自傷行為を果たすなか、東西南北の口元は愉悦に歪んでいた。堪え切れない笑みが歯の間から掠れて漏れる。
「痛い――痛いぞォ！　ヒャハハ！　分かるかァ？　これが感じるということだ。この腕から流れ出る命。ひっきりなしに伝わる痛みの感覚。そう、痛みなんだよ！　痛みだけが俺に生を教えてくれる」
短くなった左腕の切断面からは、赤い中で骨が白くちらついている。東西南北はそれをぶんぶんと振り回して血が出る様を面白そうに眺めた。言葉とは裏腹に痛みを感じる素振りはない。にやけるばかりだ。
「よォ、ガキ。貴様は知っているか？」
炎がひとりでに動いて、七雲へするすると伸びた。鎌の形をとったそれは、七雲の首筋に刃をつきたてる。
七雲は微動だにせず、他人事のようにそれを見守る。いかにして七雲が抵抗しても、この状況では悪あがきにすらならない。
「この化物はよォ、とんでもなく愚かなんだ。痛みを捨てて終わらない命を欲しがった。痛みがなかったら、どうやって自分が生きて

ることを確認すりゃいいんだろうなァ。……こいつはな、確かに喋ったり動いたりして人間みたいに振舞ってるが――生きてはいない。生きていても、人間じゃない。ただの化物さ」
「……私からすれば」
ゆっくりと口を開いた七雲には、反論の色が見えた。
「あなたも十分化物よ。自分で左手を斬り落としながら笑っていられるなんて、私となんら変わりないわ」
「ヒャハ！」
一笑にふさんとばかりに、東西南北は大口を開ける。
「分かっちゃいないなァ。ちゃんと痛がって笑ってるじゃないか」
「人間は痛いときに笑ったりしないわ」
「ふん」
笑いを止め、東西南北はひどく不機嫌そうに鼻息を鳴らした。
同時に、七雲の首に近づいていた炎の鎌が滑るように下降移動すると――その両脚を膝下のところでぶった斬る。
「きゃあああ！」
ドレスのスカートが引きちぎれ、その破片が紅に染まる。支えるべきものを失った七雲の体は、背中から地面に叩きつけられた。東西南北のときよりもなお多い出血が、辺りの地面を固く湿らせていく。
感じたことのないほどの――少なくとも記憶には見当たらないほどの激痛。
痛い。
痛い痛い痛い。
痛い痛い痛い痛い痛い。
喉の奥底から、悲鳴のような何かが迸る。
「ぁ……あ……あああああああ」
「幸せだなァ。何をしても何をされても何も感じることのできない貴様も、俺に斬られるときだけは痛みを得られる。今まさに、貴様は生きているんだ！　俺のおかげでな！」

木に踏みつぶされて骨を折っても眉一つ動かさなかった七雲の顔が、痛々しげに歪んでいる。汗と血で銀髪がしめる。膝の傷口の辺りには薄く紫斑が浮かんでいた。

「私の……妖力……」

その紫斑が点滅する。東西南北の炎もそれに合わせて淡い紫の光を点滅させていた。

「さァて、そろそろオネムの時間かな。終わらない貴様の魂に終わらない終わりをもたらしてやろう」

炎が本来の刀の形に戻る。東西南北が七雲の傍まで近づく。その左腕から垂れる血が、七雲の流した血の中に落ちて混ざった。

刀の切っ先が七雲の喉の部分に触れ、皮を裂き、肉へ食い込む。紫斑が七雲の顔や胸へと広がっていく。

噴き出した鮮血が東西南北の仮面にかかった。

「悲鳴もあげられないまま野垂れ死ぬがいい」

炎の刃が更に深く食い込む。周囲の肌は高熱で既に融けている。

七雲の体が小刻みに震えた。

――もう……ダメね。

吐血する。喉は焼き切られた。意識もすぐに遮断されるだろう。

と――

そこに――割り込んだものがあった。

雪のような白銀の光。

抜き身の形をとったそれがどこかから現れたかと思うと、音もなく固形の炎を七雲の首から弾き飛ばしていた。

「ほう――」

東西南北が道の脇の生垣を見る。

界が立っていた。

光の刀が、異常に大きくなっている。刃渡りは六メートルにも達しようという勢いだ。

それだけではない。

彼の瞳も強い光をたたえている。今まで見せたことのない、明確

な意志を秘めた輝き。
「中々良い夕の狐（きつね）の広がり具合じゃないかァ、ガキ」
生垣を越えて通りに入る界。東西南北を睨み据えるばかりで、その言葉に反応する様子はない。
十字路の入口に立って、東西南北との間合いを詰める。その距離五メートル。
「さっきの質問だけど」
ようやく発せられた声が、低く重く響く。
「君は僕の答えを読み違えているよ」
「ほゥ？」
東西南北は愉快そうに首を傾げる。
「一番大事なのは――姉さんだ」
左手で首元の蒼い石を握る。
「だから」
七雲の虚ろな目が界を向く。
「姉さんの仇を、あんたなんかに殺させはしない！」
言葉とともに、踏み込んで集極を横に振った。既に東西南北は六メートルの範囲に入っている。
それを予想していたのだろうか。東西南北は体を前に倒して避けると、地面を蹴って界にひた走った。
「バカだなァ」
東西南北が斬りかかる。
界は集極の長さを戻して受け止める。
「貴様のやっていることはただあの化物の命を永らえさせているだけにすぎないんだぜェ？」
鍔迫り合いになる。
「自分で殺すなんざ、そんなの詭弁だろォ？　本心じゃ、あの化物を助けたがっているんじゃねェかァ？」
「……ッ」
手元が緩み、界は押される。

東西南北の言葉は、まっすぐ界の弱味に突き刺さっていた。
――そう。東西南北の言うとおりかもしれない。
界は、七雲を憎み切れなくなっている。ずっと憎悪していたはずの狭霧家に対してさえ罪悪感があるのだ。姉と重ね合わせつつある今、もはやある部分で七雲を慕ってさえいる。
憎む心と慕う心。この二つの感情は界の中で矛盾し、未だ折り合いをつけられない。
「――ただ」
七雲に対する感情に、今は答えを出さなくてもいい。ただ、今すべきなのは――
「ただ僕は――借りを返したい！」
何度も命を救われて――そのままにしておけるはずがなかった。
押し切られそうになって、どうにか踏みとどまる。
「ヒャハ！　それこそバカってもんだァ。奴は痛みを感じないだけじゃない。何も感じないんだ。借り貸しの概念すらないんだよォ！」

「そんなはず――」
刀身同士が触れても、集極に紫斑が広がることはない。銀の光が以前よりも強く発光している。
「ないだろ！」
界の全力が、東西南北を後ろへ弾いた。そのまま何度も斬る。
「何も感じないなら、何であんたの攻撃であんなに痛がってたんだ！」
斬る。斬る。斬る。
猛攻だった。
次々と様々な方向から斬撃を入れる。
「俺の攻撃は、特別だからな」
東西南北は防ぐことしかできない。段々と後退していく。
「だったら――」
倒れた七雲を通り過ぎ、界は十字路の隅まで追い詰める。

「少しでも痛みの味を知ってるなら――」
ひと際大きく振りかぶる。
「七雲は化物なんかじゃない！」
界の渾身の一撃は受け止められる。
だが、東西南北はよろめいた。
それを見逃さず、界は更に押しこめる。
その時――
「ふん」
東西南北の鼻笑いとともに、紫炎の形状が変化した。うねうねと動いたかと思うと、刀身がどんどんと伸びていく。
界は慌てて距離を取ろうとするが、狙いは界自身ではなかった。
紫炎はくるくると回り――界の刀に巻き付いた。蛇がとぐろを巻いているようだ。
炎が強く燃え上がる。刀身に紫斑が浮き上がる。
――これは……力を吸い取っているのか？
紫斑の広がりに合わせて、集極の光は弱まっていた。
東西南北がニヤニヤと笑っている。
「そんなの……効くものか！」
界の動きは迅速だった。
刀から左手を離す。同時に右手の力を更に強めて東西南北の体に接近し――
「っりゃあああ」
空いた左手に脇差を持って、東西南北の右肩を下から狙う。
「な――」
東西南北は、完全に虚を突かれる形となった。
界の脇差もまた銀の光を発し、打刀と同じくらいの尺にまで伸びている。集極でコーティングしているのだ。
慢心が招いた結果なのだろうか。東西南北は何ら対応できず、右腕は斬り裂かれ、体から完全に分離した。
「ぎゃ――」

奇妙な声ともとれぬ声を出しながら、東西南北の背中が地面に激突する。刀と右腕もボトリと落ちる。
界は間髪を入れない。仰向けになった東西南北の左胸を、打刀で刺し貫く。
数回跳ねたかと思うと、断末魔もなくその生命は動きを停止した。
「……ふう」
界は東西南北の刀に目をやる。紫炎は消えていた。今まで炎に隠されて見えていなかったが、しっかりと金属製の刃もついている。
東西南北に背を向けて、納刀しつつ七雲へと歩いた。
あっけないものだった。
――何者だったんだろう。
七雲に唯一痛みを与えられる存在、東西南北。そもそも七雲が痛みを感じないというのが驚きだった。だから骨が折れたときも平気な顔をしていたのだろう。
東西南北は口ぶりからして七雲のことを何か知っているようだったが、今となっては確認のしようがない。
何気なく周囲を見て、界はぎょっとした。
建物の隙間などから、いくつも顔が覗いている。街の住人たちだ。いつの間にか集まって戦闘を見ていたらしい。
星流の言葉が思い出される。今の戦闘で、彼らは界を憎むべき妖術師だと思いこんでいることだろう。非難されるかもしれない。罵声を浴びせられるかもしれない。
――まあ、出ていけばいい話かな。
いずれにしてもすぐに出立する気だったのだ。姿を消せば何にも文句は言われまい。
とにかく、目下気にすべき問題は別にある。
「七雲、大丈夫？」
七雲は脚をなくしたまま死人のように横たわっていた。喉の傷も回復していないようで、何も喋らない。顔色も悪く、表情はない。茫然としている。

ただ、紫斑は全て消え去っていた。恐らく、死ぬ心配はないだろう。
安堵して、界は複雑な気分に陥った。何度頭に浮かんだか知れない思いに囚われる。
――やっぱり、七雲を憎めなくなってる。……これじゃ、殺すことなんか……。
七雲の目が見開いた。口をぱくぱくさせて、何か言おうと必死になる。
「……え？」
界が耳を寄せても、やはり何も聞こえてこない。
七雲は身ぶり手ぶりを加えた。界の背後を指さす。
「……？」
首を傾げながら振り返る界。その腹部に、鈍い衝撃が走った。
「――ッ！」
妙な熱さが広がる。景色が急速に流れる。体が後ろへ吹き飛んでいるのだと分かった。
「ごはッ」
数メートル飛んで、十字路の端に背中から落下する。反動で喀血した。
「ほの……お？」
界の腹を紫炎が貫いていた。今更のように痛みが訪れる。
「ヒャハハ」
十字路の反対の隅から笑い声が聞こえる。
東西南北が、心臓を貫かれたはずの東西南北が立ち上がっていた。ゆらりゆらりと幽霊のような足取りで界に向かう。
白かった衣装が一面の赤に染まっている。だが、体から自分の血を出してはいない。自分で斬った左手や、界に切断された右腕、壊れたはずの心臓、それら全てが元通りになっている。
「よォ――中々良い痛みだったぜ。貴様の今感じてる痛みは、そのお礼だ。感謝するよ」

右手に炎を纏った刀。今は鞭のような形を成している。
七雲のときと同様、界の体にも紫斑が浮かび始めた。何かが吸い取られていくような、形容しがたい感覚がある。
「ちなみに俺は単なる炎じゃない」
「お……れ……？」
腹に力が入らず、呼吸や発声が困難になる。
「俺にはちゃんと名前がある。妖刀『東西南北』って名がなァ」
「……？」
「俺が何を言っているかわかるか？　言っとくが、こうしてふらふら歩いてるのは俺じゃねェ。俺はな、ここで貴様を刺している炎そのものなんだよ」
血を吐きながら、界は愕然とした。
――どういうことだ。
刀そのものに命が、意志が宿るというのだろうか。それとも、七雲のように人間が刀に姿を変えているのだろうか。だとしても、七雲の場合は姿を変えたまま何か行動を起こすことは出来なかったはずだ。妖術だとしても、こんな芸当をするには相当の妖力がかかる。
「俺はこの人形を介してしか痛みを感じられない。全く、不便なものだ」
そう言うと、東西南北はおもむろに界の首元へ空いた左手を伸ばした。
「――！」
わざわざ首を絞めて殺そうというのだろうか。手を逃れようとして界は体に力を込める。しかし、傷から来る痺れで思うようにいかない。
しかし、東西南北が取ったのは別の物だった。界の首の下――蒼い石を握ると、紐を乱雑に切って自分の目線まで掲げる。
「貴様には別の痛みも与えてやろう。これが何なのか、俺はちゃんと知ってる。ヒャハ、貴様ら狭霧家には詳しいんだ。あの化物と一緒になって俺の親を殺しやがったクズどもだからなァァァ」

「な……に」
言っている意味が、界にはよく分からない。
しかしそんなことを気にしている余裕はなかった。
蒼い石。界が唯一姉に渡し、そして唯一の形見となった石。不器用だけど透明に輝く石。界と姉を繋ぐのは、もはやこれ以外にない。これを失うことは、姉の第二の命を失うことと同じ。
「やめ……がぁ」
腹の炎がぐりぐりと身を回転させる。傷口が広がり、大きな穴と化した。
「ヒャハハ！　あの化物よりずっといい！　貴様の痛みは人間そのものだ」
石が界の目の前にかざされる。東西南北が左手に力を込める。ひびが一筋入る。
――やめろ。
青空と青い海、水平線、白い砂。そんな背景に姉の笑顔はこの上なく似合っていた。
ひびが増える。
剣術の鍛錬、全滅する狭霧家からの逃亡、蓬莱の玄玉の枝の奪取。全て姉の生きてほしいという最後の言葉に従い、姉の仇を取るためにやったことだ。
ひびはもう石の半分ほどを埋めている。
石が壊れ、繋がりが失われてしまったら、今まで自分がやってきたことの意味はなくなる。
ひびが石のほぼ全身に入る。少しでも力を加えれば壊れてしまう。
――やめろやめろやめろやめろやめろ！
全身の筋肉に鞭を打つ。腹の痛みはもはや気にならない。だが、体は言うことを聞かない。
「ふん」
そこで、東西南北は界の眼前から石を退けた。
「やっぱ、こんなこたァ俺の趣味じゃねェな」

東西南北はくるりと背を向ける。もう左手に力を入れようという素振りはない。
やめたのだろうか。やめて――くれたのだろうか。
そのとき、音が鳴った。
「――」
――音。
界の顔に何か塊が飛んできて激突し、バラバラと砕けた。蒼い欠片が降りかかる。
「ヒャハハ！　俺がやめると思ったか、ガキィ」
東西南北は愉快に笑う。
「ぁ……」
一瞬遅れて、界は事態を把握する。
「ぁ……ぁ……」
最後の欠片が、界の眉間に軽く刺さった。――痛い。
蒼い石が砕かれたのだ。東西南北が界に石を投げつけて砕いた。
最後にちょっとした希望をちらつかせながら、彼は結局、界を絶望の淵に陥れた。
「ぁ……あああ……あああああああ！」
絶叫か、嗚咽か、雄叫びか。声にならない声があがる。
同時に、界の全身が――強烈な光を放った。
「なんだ！？」
異常を感知し、本体である紫炎が、人形である男を巨大な盾の形になって守る。と、その時にはもう吹き飛ばされていた。
後光が差すなどという穏やかな表現では済まない。発しているのは、界そのものが太陽になったような強い光だ。ただ陽光のような金色ではなく、月光のような銀色。体中から抜き身のナイフを出しているようにも見えて、実際、光の当たったところは家だろうと地面だろうと塀だろうと粉々に崩壊した。――蒼い石が砕かれたのと同じようにして。
「きゃあぁあ」

物陰から見ていた住人たちが、悲鳴をあげて方々に散っていく。逃げ遅れた人間が、倒れた家の壁に脚を潰され、飛んできた梁に背中を打たれ、塀の破片に顔をぶたれる。

「ヒャハハハ！　ほとんどの夕の狐を自分で開けちまったのかァ！　生の感情ってのは何を起こすかわからねェな、やっぱり」

十字路の逆の端――先ほどまで自分が倒れていた場所まで戻って東西南北が言う。

よろよろと立ちあがる界。足場にだけは光が当たらなかったのか、それとも当てなかったのかちゃんと残っている。全身の光が収まり、その代わり両手から直接光の刃が生えた。

「夕の狐を、開けた……？　何を言っているんだか、分からないね！」

右手の刃を横に振るう。全長何メートルかも分からない巨大なそれは、距離の離れた東西南北までも容易に届いた。

跳んで避けられる。左手の刃で追撃する。

東西南北は跳びながら炎を刃に巻き付けると、それを軸に更に上へ、後方へ跳んだ。巻き付けたものを解除する遠心力を利用し、かなりの距離を宙に浮いて移動する。

「貴様は面白いなァ。あとでそこの化物とともに分島城へ来い。もっと面白いものを見せてやる」

近くの屋根に着地し、界に背を向ける。

「お前を……粉々に砕く！」

界は両手の刃を東西南北に向けて投げる。

紫炎が再び盾のように展開し、その両方を弾いた。

二本の刃はどちらも落下地点の家を破壊し、姿を消した。住人の悲鳴がその周囲であがる。

東西南北もすぐに見えなくなった。

「くそ……ッ」

追いかけようとした界を強い眩暈が襲う。腹の傷が疼いた。足元に血溜まりが出来ている。

それでも右足を前に出したところで、体がぐらっと前に倒れた。
「界！」
七雲が走り寄って受け止める。血は拭えていないが、両脚が復活し、首の傷もほとんど埋まっている。
「姉……さん？」
自分の肩を掴む両手の感触が、界には愛とよく似て感じられる。ひどく安堵して、うずめようとしたその頭に、石が投げつけられた。
「……？」
不思議に思って頭をあげる。地面をコロコロと転がっているのは、あの蒼い石ではなく、なんの変哲もないつぶてだ。
更に石が当たってくる。二発、三発。
見回すと――十字路の周りをぐるりと囲む住人の姿が目に入った。老若男女揃っている。その全員がこちらを向いて険しい目つきを浮かべ、手に手につぶてを握っている。
界は思い出した。何故先ほど物陰からこちらを見る人々に気づいてあれほど驚いたのか。瞳に、はっきりとした憎悪が宿っていたからだ。
「妖術師め！　二百年前と同様、我らの街を荒らしてくれおって！」
矍鑠
かくしゃく
とした小柄の老人が進み出てきた。右手に槍、左手につぶてを持っている。
界は見覚えがあった。橋のところで番人をしていた人物だ。
「早く出ていけ！　さもなくばこの槍で刺す！」
そう言って、投げた老人のつぶてが界の頬を殴る。
結束を促すために作られた計画都市。民衆が治める自治都市。住人同士の固い絆は、時に残酷な排他性を産み出す。余所者に自分たちの生活を荒されたとあっては、石を投げつけるのも当然なのだろう。槍で刺す、というのも単なる脅しではあるまい。
界と七雲を囲む円の中で、先ほどから子供の泣き声があがってい

る。
「ほのかぁ！　起きてよ！　起きてよおお」
目をやって、界は遠ざかっていた意識がにわかに覚醒するのを感じた。それほどに衝撃的な光景だった。
倒れた家に脚が潰され、そこから血の川を流してぐったりと伏せる少女。それを揺すっているのは――路地で見た少年だった。倒れている少女は、少年の手を引いていた彼女だろう。周りに大人たちが集まり、家の瓦礫をどかそうとしたり、少年を慰めたりしている。
――なんで。
当惑が駆け巡る。
――僕は、あの子を助けようとして。
ダメだったのか。意味はなかったのか。あの東西南北とかいう野郎は既にあの子を傷つけてしまっていたのか。この街を――否、あの二人を守ろうとした界の手は、あと一歩遅かったのだろうか。
「見ろ、あの子の姿を！」
既に目をやっている場所を指さしながら、老人ががなる。
「あれではもう二度と歩けまい。これも貴様が……貴様がやったことなんだぞ！」
「……僕？」
――どういう意味だろう。
反射的に聞き返し、同時に心の片側で自分の行いを後悔した。聞きたくないことだ。聞いてはならないことだ。
しかし界は、自分の耳をふさぐことも相手の口をふさぐこともしなかった。
だから――
「貴様があの子を傷つけた！　あの家は――貴様のおかしな光で壊されたんだ！」
聞こえてしまった。
「え――」
脚が震える。猛烈な吐き気に見舞われる。

それでも、老人が何を言っているのか瞬時には把握できなかった。
――僕が。僕がやったというのか。僕が、加害者になったというのか。
「そんな……」
違う、と心が叫んだ。
――僕は被害者だ。姉さんを殺されたんだ。誰も殺さない。
そんなはずがなかった。
狭霧家を見殺しにしたのだ。彼らは逃げだす界をどんな顔で見ていただろうか。無表情だったように思う。のっぺらぼうだったように思う。
あの追手の武士を殺した時、彼はどんな顔をしていただろうか。分からない。だが、その時の感触は確実に残っている。それは界を暗闇からじっと見つめている。
そして今、界の傷つけた少女は苦痛の色を浮かべていた。
当然、界も復讐という行いが自分の手を汚すことに繋がると考えていなかったわけではない。ただそれが、無関係な周囲の人間まで傷つけてしまうことになるとは全く予期していなかったのだ。否――界は、当の仇をさえ殺すことに躊躇している。
結局、界は中途半端な憎しみと偽善によってどっちつかずなまま行動しているにすぎない。その結果がこれなのだ。復讐などとは全く関わりのないところで人を傷つけた。生きているだけで、周りに害をなした。
自分に復讐など果たせないのだと、界は悟る。ならば――これから何をしようというのか。生きる意味など――見当たらない。
雨か霰
あられ
か。つぶてが体中に降りかかる。
と――。
そこで、界の足元が振動を始めた。経験にないような激しい横揺れ。最初は、失血がひどくて自分が眩暈を起こしただけなのだと、

界は思った。それが違うと分かったのは、目に映る人間が誰も彼も平衡感覚を失って振り子のようにふらふらとしていたからである。
――地震だろうか。
それとは少々違う気がする。もっと、まるで地面そのものが動いているような――。
「あ」
そこで、気付く。ここに地面などない。あったとしてもそれは、水に浮かぶ仮初の物体だ。
「七雲！」
視界が縦に横にぶれる中、銀髪の女を見る。腕で界を抱き支えながら、彼女が見返す。
「あの変人が言ったとおりよ。昼の鮫の欠乏によって、ここの自然に変化が生じた。浮島が――崩壊するわ」
揺れは、浮島が個々の泥炭や水草へと分かれようとする運動によるものだろう。そこら中の地面に細かいひびが生え、ところによっては隆起している。
これを脱出の好機と見るべきだろうか。民衆は皆自分たちのことに必死のようだが、それは此方も変わらない。いずれにしろ、界の傷では歩くことすらかなわない。
そもそも、今となっては脱出など無意味だ。
ならばこれは――死ぬための好機である。ここでなら、何の苦労もなく死ぬことができる。
間近で呻き声が上がった。七雲だ。
「大丈夫！？」
どこかに当たったのだろうか。対して、七雲の声は綿毛のように優しく界の耳を撫でた。
「界。行きましょう」
彼女は界を両手で抱き締めると、一層辛そうな顔をする。次の瞬間、二人の姿は街から消え去っていた。

沢のせせらぎが聞こえる。そう遠くない場所だ。
背中の感触で原っぱに寝そべっているのだと分かる。首から上は何か柔らかくて温かいものに乗っかっていた。頬にかかる誰かの髪の毛がくすぐったい。
耳元で苦悶の声があがった。それに応じて、腹部の鈍痛が和らいでいく。
全身が重い。瞼を開けることすら気だるく感じられる。だが、不快感はない。全身を繭が覆っているような、奇妙な安心と拘束感がある。
「う……」
界は目を開く。
夕暮れの中、七雲がこちらを向いていた。気のせいだろうか――目元が潤んでいる。
「界！　よかった……治療が間に合って」
自分が七雲に膝枕されていることに気づく。頭の柔らかな感触はこれだったらしい。
「これからは集極をあんな一気に使っちゃだめよ？　気を失ってしまうわ」
衣服は血に塗れたままだが、腹部の風穴は消え去っていた。人間の自然治癒力ではありえない回復の仕方だ。
「妖術を使ったわ」
界の視線に気づいたのか。七雲はそう言うと、目を逸らす。
「護円からここへ移動してきたのも、妖術。複雑な術だったけれど、どうにか成功させたわ。あなたに死んでもらっては困るから」
素っ気ない口調だが、端々に界を気遣う素振りが見られる。
「とにかく、生きていてくれてよかった……」
界は心中で舌打ちをする。なぜだろうか。急速に怒りが込み上げてくる。
――どの口で妖術が巧みじゃないなどと言ったのだろう。こいつ

は……嘘ばっかりだ。
その怒りは、本来向ける対象もないようなものだったのかもしれない。しかし今、界の前には七雲がいた。
「よくなんて、ない」
界の声は、冷たく響く。
小首を傾げる七雲。
「全然――ぜんっぜんよくないよ！」
絶叫に嗚咽が交じっていた。涙を押し殺すように、強く歯を噛みしめる。
「もう……もう生きている意味なんてない。全部七雲が正しかったよ。結局僕は間違ったことばかりして、全部傷つけた。何一つ達成できやせずに、姉さんの形見まで……」
「界……」
七雲の表情がかげる。
「あれは、仕方のないことよ。あなたの言ったとおり、あいつから逃げることなんて出来やしない。でもあなたは殺されもしなかったし、街の損壊もあの程度で済んだ」
「あの程度？」
意味が分からない、と界は不審の目つきをあらわにする。
「なにがあの程度なの？　浮島は壊れてしまった。僕が最後見た時は完全に崩れていなかったけど、あの調子なら今頃」
「崩壊はあれで止まったわ。大丈夫よ」
不審の目つきが、更に広がる。
「なんでそんなこと分かるのさ。その場しのぎの慰め？　それとも何か隠してるの？」
「……界」
吐息が顔にかかり、頭がそっと撫でられる。気づかいの伝わる柔らかな手触り。そのままじっとしていたら寝てしまいそうだ。ひどく心地がいい。まるで――そう、姉がしたときのように。
界はぱっと跳ね起きて七雲から距離を取った。

「なんで――なんでそんなに優しくしようとするんだよ！」
今度は界が目元を涙で滲ませていた。
七雲は何も言わない。
「僕は――僕はこれまで姉さんのためだけに生きてきた。一生を、身代わりとなって死んだ姉さんにささげようって決めたんだ。それが今じゃ……姉さんを感じさせるものを全部失くして……あと出来ることと言ったら、君に復讐するくらいで……なのに……それが出来ない。僕は単なる腑抜けだ。そのうえ君にそんな優しくされたら――」
高ぶった感情を原石のまま吐き出すようだった。嗚咽が大きくなり、呼吸が荒ぶる。
界は何に怒っているのかを知った。自分に怒っているのだ。
「本当のことを言ってよ！　心の中じゃ死にたくないって思ってるんでしょ？　だから僕に優しくして、殺されないようにって」
「違うわ」
「じゃあなんで！？」
「それはね――」
七雲の声は静かに響く。
「そうしなければ、あなたが壊れてしまうからよ」
界が固まる。
「あなたは全てをお姉さんに依存して生きてきた。でも、あなたの言うとおり、今となってはお姉さんのためにしてあげられることなんてない。あの子供たちすら守れずに終わったのだから。いや……更に悪いことに、あなたは彼らを傷つけてしまった。自分が悪者になった気分でしょう？　もしここで私を殺せば、それはお姉さんのためになるかもしれないし、少なくとも、あなたはそうなったと思って気が紛れる。目的を成就すればそれまでに自分が味わった苦悩も忘れられるわ。でも、達成したあとはどうするの？　何をして生きていくの？」
「それは……」

何も言えない。何も考えつかない。
「あなたは優しすぎるわ。私を殺せば、目的を果たしたと素直に喜べるかしら？　むしろ、罪悪感に苛まされるでしょう？　復讐という生きる糧もなくなって、今よりももっと自分を保てなくなる」
「そんなことは――」
七雲はゆっくりと歩み寄る。
「自分のせいで子供が脚をなくしたと知って、あなたはどう思ったの？」
「……自分が、姉さんを殺した人間と同じみたいだった。悪者のようだった」
「そんなことで自己嫌悪するくらいなら、私に復讐なんてできっこないわ」
界はぎゅっと拳を握り、俯く。何も、言い返せない。
「人は、誰でも加害者になりうる。本人が望んでいなくともなってしまうことがある。あれだけじゃなく、既にあなたは人を一人斬っているわ。復讐復讐って口だけ達者にしてれば、自分だけずっと被害者でいれると思った？」
「……」
七雲が界の顔を覗き込む。棘のある言葉とは裏腹に、その目は慈愛に満ちている。
「一人の人間に依存して、その代わりに自分の人生を全てその人にささげるなんて、そんな生き方は出来ないわ。あなたは自分自身の人生しか生きれない」
「……そんなこと、できない。僕は――」
ついていくだけの人生。生まれたときから姉は自分を引っ張ってきた。
「僕はからっぽだ。僕の人生なんて……」
「あなたが私を殺せなくなったのはなぜ？　お姉さんを想おうとするあなたと、優しいあなたとが衝突したから。依存していても、お姉さんがあなたの中に入ってきたわけじゃない。お姉さんから離れ

てもからっぽじゃないわ。ただ、自分で自分が何者なのかを知らないだけ」
七雲が近づく。界は動かない。
「自分を知るにはどうすればいいか分かる？　他の人を知ればいいのよ」
七雲の腕が界の背中に回った。体が密着し、七雲の体温が服を通して伝わる。
「今日だけは、優しくしてあげる。だから――私のことを知りなさい」
「……！」
唇同士が触れ合い、界は驚愕で目を見開いた。肉の柔らかい質感に、心臓が高く速く鳴りわたる。
七雲は艶な表情で目を閉ざし、界を強く抱きしめる。
自分たち以外の何もかもが静止し、沢のせせらぎさえ聞こえない。永劫とも思える不可思議な時間をたゆたい――そこで、界の意識は遮断された。

「――眠ったわ」
既に辺りは暗い。今夜も雲は厚く、月も星も姿を見せられないでいる。
七雲は木の根元にそっと界を横たえた。唇から言い様のない満足感がこみ上げてくる。やはり、界の妖力は美味だ。
「眠らせた、だろォ？」
男が馬から降りて七雲の隣に佇む。
人は、致死量に程遠くとも一度に大量の夜の霊鳥（とり）を失うとショックで気を失う。七雲は唇から界の妖力を吸いあげて気絶させたのだった。
「いいのかァ？　こいつ、本気になったかもしれねェぜ？」
男は仮面の位置を直す。

「どうでもいいわ。この子はもう用済みなの。さっきのは――最後のご褒美をあげただけ」
七雲の声には感情がこもらない。
男――東西南北は脱力した笑い声をあげた。ため息なのか笑いなのか判別できない。
「その性格の悪さだけは称賛に値するなァ」
「私は化物なんでしょ？　だったら、人間のこの子に何をしたっていいはずよ」
東西南北は答えずに背を向け、馬に跨った。七雲もあとを追って横向きに飛び乗る。
いななきをあげて、馬は走りだした。
「……」
木々の間に消える寸前、七雲は振り返って界を見る。その一瞬だけ雲間に現れた月が、界を淡く照らしだしていた。

幕間、ある少女の回想その三

燃えゆく屋敷を見るのは、これで何度目になるだろう。夕焼けのなか、死に際のおぞましい叫び声がそこら中からあがり、阿鼻叫喚の渦が広がる。初めは耐えられないと思ったこの光景にも、少女はどうにか慣れることが出来ている。そのことに軽く驚きつつも、それ以上感情を動かさないように注意した。場の昼(さめ)の鮫が自分に集まってくる、その充足感だけに身をゆだねる。

崩壊する屋敷を丘の斜面から見下ろす少女のもとに、黒い法衣を纏った狭霧家の妖術師が三人歩いてきた。後ろに五人ほど敵方の妖術師を引き連れている。赤いローブ姿だ。全員仰向けのまま空中に浮かされている。抵抗する様子がないのは気絶しているからか、それとも動きを封じられているからか。

「何人か捕まえてきましたよ」

先頭の青年が少女に告げる。被ったフードの端から眼鏡の縁が覗く。狭霧家の跡取り、狭霧(らい)来だ。まだ三十にも満たない若者でありながら、恐ろしいほど巧みに妖術を操り、実質的に狭霧家の頂点に立っている。

来が合図をすると、赤い妖術師が一人、少女の前に置かれた。まだ成人を果たしていないような少年だ。あどけない顔つきが恐怖に歪んでいる。意識はあるが、妖術で体を動けなくされているらしい。

少女は仰向けに寝かされた少年の上に跨ると、フードを取り去った。くるくるとカールを描く栗毛が露わになる。少女は彼の首筋に狙いをつけ――勢いよくかみついた。

「ひ……ひぃ……が……はっ」

少年の顔が、今度は苦痛で歪み始めた。呼吸が荒くなり、顔色がどんどんと悪くなっていく。ほとんど自由にならない四肢をもぞもぞと動かしても、抵抗らしい抵抗にすらなりえない。

少女は首筋にかみついて舌を這わせながら、大きな満足感の中を

漂っていた。少年の豊富な夜の霊鳥が流れてくる。痛みだけでなく皮膚感覚そのものを失った少女にとって、こうした刺激ある瞬間は非常に貴重なものだった。

首筋を起点として、少年の体に紫斑が広がっていく。数分経って足にまで達すると同時に、少女は恍惚として立ち上がった。

法衣の下で全身を紫に染めた少年は、ひと際大きな悲鳴をあげ――それは次の瞬間断末魔へと変わった。体から紫色の炎があがり、少年の顔を、頭を、手を、脚を包んでいく。一分と経たぬうちに少年の肉体は灰すら残さず消えてしまった。

「いっ、いや、いやだあああああ」

次の一人が差しだされ、同じように消滅していく。

続けて二人を食す。最後の一人は相手方の当主らしき老人だった。首筋に歯をかけて、少女は怪訝な面持になった。

夜の霊鳥が少なすぎる。先ほどの若者よりもなお少ない。装飾のついた服装などを見るに、この老人が当主であることに間違いはないはずだ。夜の霊鳥は妖術を使うと消費される。補充するには昼の鮫の満ちた場にいなければならない。ならば――この老人は妖術を使ったばかりということか。昼の鮫のないこの場所で。

横目で老人の顔を見る。他の生贄と違い、目を閉じたまま何ら取り乱す様子がない。当主としての威厳だろうか。

――違う。

意識がないのだ。他の生贄は意識を残されていた。気絶させられたわけではないだろう。

「――美味でしたか？」

疑問を持ちながら食事を終え、少女は立ち上がった。来が微笑とともに尋ねてくる。狭霧家の他の二人は既にいない。

「ええ。……あなたの妹さんに比べれば、随分と質は落ちますけど」

「それは光栄です。兄として誇りに思います」

白装束の集団を裏切ったところで出会って以降、来は慇懃な態度を崩さない。だが、決して下手に出るようなことはなく、むしろ軽

薄な態度が見え隠れしていた。
「あの……最後の人間が、なにかおかしかったのですが」
「ああ、分かりましたか」
眼鏡が煌めく。
「今の老人は依知川家当主の依知川宗助です。夜の霊鳥のみで妖術を発動していたようですね」
そんなことができるのですか、と少女は驚嘆を示す。
「本当に一部の手錬れた人間だけですがね。しかし、全くゴキブリのような輩です。下等な存在でありながら生命力だけは異常に高い」
来は宗助の消えた下生えの辺りを一瞥する。
「一体何をしたんですか？」
「……まあ、これは私の推測でしかないのですが」
眼鏡を手に取ってたたみ、人差し指の上で器用に回し始める。
「彼が使ったのは自分の意識を飛ばす術です。でも、意識の全てを飛ばすことは出来なかったはずだ。さすがにそれには昼の鮫の手助けが必要なはずです。彼が飛ばせたのは、恐らく――記憶だけ」
眼鏡が人差し指の上で静止する。
「飛ばすって、一体どこに？」
「血、ですよ」
「血？」
「血縁。一族です。誰かの遺伝情報に自分の記憶を埋め込んでしょう。何百年かしたら、彼の記憶を持った子供がどこかの家に生まれる」
まあ一部の記憶だけですがね、と言って眼鏡を掛け直した。危機感は見当たらない。些事だと思っているのだろう。事実、特に注意する必要もない話に思えた。ただ、疑問が解消された爽快感だけをかすかながら感じる。
そのまま特に会話をすることなく、並んで眼下を眺めた。屋敷はもう燃え尽きて、苦しげな人々の呻き声も聞こえない。戦闘は終わりに近づいている。

「あなたは私を恐れないのですね」
不意に少女が口を開く。
「あなたたちの命は私が握っているも同然。他の方たちは私を怖れているのか、あまり近くに寄ろうとしませんが」
少女は場の昼の鮫を全て吸い取ってしまう。昼の鮫がなければ妖術を運用できない。少女が昼の鮫を狭霧家に提供することで、相手の妖術師は全く妖術を使えず、狭霧家だけが妖術をふんだんに使えるという圧倒的有利な状況が生み出される。だが、それは同時に少女の気分次第で戦局が一変することを意味していた。
「裏切られたとしても、私だけは生き残る自信がありますからね」
「そう、ですか」
根拠のない自信――ではないのだろう。そんな小人物ではないはずだ。伊知川宗助と同じような芸当ができるとか、そういったところだろうか。
夕陽が山の端に隠れ、月が煌々と辺りを照らす。戦闘はもう完全に終息している。
「ああ、そうでした。あなたに少々残念なお知らせがあります」
少女の隣で眼下の戦跡を見ながら、来が言った。
「こうして他の妖術師たちを滅ぼし続けてきましたが、遂に終わりが見えてきてしまいました。もう残りの妖術師も少ないのです。私たちにとってはこの上なく喜ばしいことですが、あなたにとってみれば悲しいことでしょう。しばらく妖力を吸う機会がなくなるわけですから」
「いえ、これだけ貯めてしまえばあと数百年は生きれますので」
「いやいや、そういうことではなく。きっと退屈になってしまうのではないですか？　刺激もなく永い時を生きることになるのだから」
「それは……そうかもしれません」
「私に、良い提案があります」
眼鏡が月光を反射して白く光る。
「あなたに、ある姿を提供しましょう」

「姿？」
「そうです」
皮相的な笑み。
「あなたに伝説上の宝石の姿を差し上げます。といっても、私が妖術をかけるだけですが。――この体ならば、退屈なときずっと眠っていることができる。あっという間に時間が過ぎていきます。何かあればすぐに起きることもできる。あなたは妖術の使用に制限がありますが、まあ変身の解除であれば特に苦もなく行えるでしょう。この姿でいてくだされば、狭霧家の代々の家宝として安置します。そして――数十年に一度、我ら狭霧一族直系の素晴らしい一子を献上致しましょう」
少女は無言で来の見えない瞳を凝視した。
少女には来の腹のうちが読めた。昼の鮫の供給は眠っている間も続けられる。また、睡眠状態にあれば裏切りの心配もなくなる。狭霧家にとって好都合なことばかりなのだ。
「……良いでしょう」
利用されているのだとしても構わない。少女にとっても好都合なのだ。眠っているだけの幸福な日々。何の怖れも抱かず、刺激も向こうからやってくる。それは、少女の望んだ生活そのものだった。

五、女は（再び）裏切る

目が覚めて、界は何が起こったのか分からなかった。
七雲がいない。
初めは水でも汲みに行ったのだろうかとか、食料でも獲りに行ったのだろうかとか、手近で自分に優しい推測ばかりを立てていた。
だが――いつになっても帰ってこない。東に伏せていた太陽が天高く上がっても、一向に姿を見せない。
身に何かあったのだろうか。しかし、だとしても隣で寝ていたはずの自分が無事なのはおかしい。そうでなければ、自分を庇って何者かに連れ去られてしまったのだろうか。そう考えると、界の心はきゅっと苦しいほどに引き締まった。
動転しきっている。七雲が消えたという事実が、界の心をこれでもかというほどに打ちのめしている。
沢に向かい、顔を洗った。とにかく思考を整理しなければならない。
水面に映った自分の顔を見て、界ははっとした。やつれている。
――七雲がいなくなっただけで、何をこんなに慌ててるんだ……。
昨日の七雲の言葉が鮮烈な記憶となって脳内に残っている。今や界は、七雲に対し好感を抱きつつある自分を否定できなくなっていた。愛が今の自分を見たらどう思うだろうか。落胆するだろうか。
首元に手をやる。あの蒼い石は、もうない。
代わりに、唇に残る感覚が蘇ってきた。顔がほてってくる。もう一度水を浴びた。
横合いから声をかけられたのはその時だった。
「おうおう、青春だねえ」
――何者だ。
界は全身の筋肉を緊張させた。柄に手をかけながら振り返る。
星流だった。

木の幹に体重を預け、右手で杖をくるくると回している。護円で会った時にはなかったものだ。樫の棒の頭に金属製の華美な装飾を施し、その先に服装と同じ赤色の宝石を取り付けてある。どこまでも赤が好きらしい。
「……なんで、ここにいるんですか？」
不審をあらわにする。
この辺り一帯を取り仕切る星流。狙っていたのは七雲のはずだ。七雲失踪の原因をこの男に求めるのが妥当な考えといっていい。
「残念ながら、落ちこぼれ君――答えは君の考えているようなものじゃない。七雲が消えたのも我輩のせいではない」
「……相変わらず、見透かしたようなことを言うんですね」
「わははは！　まあ実際に見透かしているからな。おっと」
星流が首を傾げる。背後の幹を界の拳が殴った。
「あなたじゃないなら、誰のせいだと言うんです……！」
「誰だと思う？」
お茶らける星流に、界はいら立ちの色を濃くした。
何故だろうか。護円のときもそうだったが、界は星流に対してどうにも腹を立てていた。狭霧家の死という事実が、思いのほか界の心に影を落としているのかもしれない。
「黙るなよー。沈黙ほど退屈な答えはないんだぞ」
「もったいぶらないでさっさと言ってください」
「七雲」
「え？」
七雲、と反復して界は怯んだ。握った拳がほどけ、腕をだらんと下げる。
「七雲のせいで七雲は消えたのさ」
「意味が……分かりません」
「彼女は、君を見限ったんだ。落ちこぼれ君に愛想を尽かしたんだよ。君では望みが叶えられないと知り、姿を消した」
やはり意味を呑みこめず、界はただ腑抜けた顔を返す。

星流は呆れたようにため息をこぼした。
「あーあ、やつはお姉さんの仇なんだろ？　好きになっちゃってどうすんだ」
「す、す――」
「好きなんだろうが。七雲のこと」
「……ッ」
姉の仇。憎むべき相手。そのはずなのに、何度も命を助けられるうち、姉と彼女の姿を重ね合わせていた。なにか特別な感情は抱いていたと思う。特に昨日のことがあってからは。しかし、これが好き――恋と名づけるべきものなのだろうか。
「あーっはっは！　一応言っておくが、やつは人間じゃないんだぜ？　化物だ」
「ば、化物とか、呼ばないでください！」
東西南北もそう呼んでいた。あの時も今も、七雲がその名で呼ばれるたびに、界は言い様のない憤りに囚われる。
「いや」
星流は杖を地面に突き刺す。
「化物だよ」
声が低く響いた。
「君はやつのことを知らないからそんなふうに言える」
いつになく真剣味を帯びた口調だった。真剣というよりもむしろ――感情が消えている。
界は再び怯んだ。二三歩後ろに下がる。
――これは、いつもの星流ではない。
「やつが一体何なのか、知りたくはないかい？」
「何なのか……」
七雲の正体。人間でないことは分かる。では一体何なのか。その答えは、七雲本人から聞くべきのように思える。だが、語ってはくれないだろう。自分のことを話さないからこそ、界に何も告げずに姿を消してしまった。

加えて、界は不安だった。自分が裏切られたのかもしれない。嫌われたのかもしれない。それを思うと、界は頷かざるを得なかった。
「君の姉が七雲に殺されたとき、どんな状態だったか覚えているかね？」
部屋から飛び出して祭儀場に入ったとき、姉は――
「姉さんは……紫色の炎に包まれて……」
「そう。紫色の炎。それはある力の象徴をしている」
「ある、力……？」
「妖力を吸い取る力。その力によって夜の霊鳥を全て吸い取られると、紫の炎で焼かれる。ところで、君はつい最近にも同じような炎を見なかったかい？」
紫の炎。その言葉は、星流に言われる前から頭の隅をちくちくとひっかいていた。
「……あ」
そう、界はつい前日に、同じものを操る人間と一戦を交えている。
「東西南北も、紫色の炎を……いや、あの炎自体が東西南北で……。あいつは一体何なんだ」
「東西南北は幕府の人間だ」
「えっ」
「と言っても、もちろん御家人やなんかじゃない。幕府に召し入れられた凄腕の剣客、というのが表向きのところだ。実際のところあの仮面を被った男は操られてるだけの哀れな人形で、本体は刀の方。あの妖刀『東西南北』と七雲は、同じ場所で生まれた」
刀が本体、というのは既知の事実だ。だが、そのあとの言葉は聞き捨てならない。
「戦乱の時代、武将だけでなく、妖術師同士の勢力争いも熾烈なものだった。勢力を広げるため、妖術師たちはそれぞれ特定の武将の配下となり、その庇護と支援を得た。強羅幕府の創始者である光永京氏に取り入ったのが――」
「狭霧家」

そのことは界も知っている。物覚えのつかない頃から言い聞かされてきた。
「そう。当時から狭霧家は強力な妖術師の家系で、それを潰そうという敵は多かった。一番の有名所が白の妖術師集団、『卍巴(まんじどもえ)』だ」
初めて聞いた名だ。
いや――。
界は思い直す。どこかで聞いたことがある気もする。狭霧家の人間が語る先祖の武勇伝で、そんな名が登場していた。
「彼らはとある武将の下につき、その協力を得て怪しげな大妖術を行った。何をどうやったかは知れないが、その結果出来上がったのが、妖刀『東西南北』と――妖魔『七雲』だ」
「よ、妖魔!?」
「化物じゃなきゃ妖魔だ」
「……」
化物の次は妖魔、らしい。
「この二つには、ある共通点がある。妖力を吸い取ってしまうことだ」
「……吸い取る、ですか」
納得できないこともない。東西南北に集極の刃が巻きつかれたとき、確かに何か力を吸い取られるようにその光が弱まった。集極が誰かの妖力を借りているのなら、あのとき吸われていたのはその人間の妖力なのだろう。
加えて思いだすのが、以前会ったとき星流が言っていたことだ。昼の鮫(さめ)が急速に減っているというあの言葉。原因は七雲と東西南北だったのだろう。実際、昼の鮫がなくなって形を保てなくなった護円の浮島は――崩壊してしまった。
「東西南北の方は失敗品だがね」
「あれで、ですか?」
「ああ。だが、まあそんなのは別の話だ。今は七雲についてのことだからな。あいつは、場の昼の鮫を吸ってしまう。昼の鮫がなくな

ってしまえば、妖術師は単なる人間だ。分かるな？」
「ええ」
妖術は昼の鮫と体内の夜の霊鳥を利用して放つ。昼の鮫がなくなれば使えない。
――じゃあ。
界は思う。それならば、集極は一体何なのだろう。妖術ならば、昼の鮫のなくなったあの護円で発動することなど出来なかったはずだ。もしくは、集極の使用が昼の鮫の減少に拍車をかけたのか。そうだとするならば、界はますます加害者になってしまう。
「七雲は吸い取った昼の鮫を特定の人間に供給できる。原理は分からんが、そういう能力を持っている。卍巴はそこを利用した。妖術師同士の戦いで自分たちだけが昼の鮫を持っている状況なら、相手がどんなに強力な妖術師でも勝てる」
「随分と姑息なやり方ですね」
「戦なんてそんなものだ。勝つためなら何でもする。元々卍巴はそんなに力を持っている妖術師集団ではなかった。そいつらにとっては唯一生き残る道だったんだろう。だが、卍巴と狭霧家が戦っている最中、七雲は生みの親を裏切った」
「裏切った……？」
「昼の鮫を卍巴ではなく狭霧家の妖術師連中に与えたのさ。当然、卍巴は数分と経たずにおじゃん。七雲は狭霧家に迎え入れられた」
「それで――」
それで、狭霧家にまつられていたのか。
「狭霧家は、七雲を殺すか――そうでなくとも封印するべきだった」
星流は忌々しそうに顔を歪めた。
「だが……奴らは七雲を利用し、あろうことか他の妖術師たちを滅ぼし始めた！」
語気が荒い。消えていた感情が、再び灯っている。
「単なる征服じゃない。ジェノサイド――殺戮だよ。狭霧家は、自分たち以外の妖術師を根絶やしにしようとしたんだ！」

「そんな……ことが？」
界は知らなかった。護円の歴史といい、狭霧家の人間は様々なことを隠して、あるいは歪曲して界に教えていたらしい。もしくは、ただ単に彼らも知らなかっただけなのか。
「なんで、殺戮なんて……」
「知らないな。その時の当主にでも聞いてくれ。……いや、七雲でもいいな。当主の脇で殺戮の様を見ていたはずだ」
見ていた――のか。そう考えるのが妥当なのだろう。しかし界には、平気で殺戮現場を眺めている七雲の姿を思い浮かべることができない。
――七雲が、そんなことを……？
そんなことをするはずがないと信頼しているのだろうか。七雲は現に姉を殺し、分かっていながら護円を崩壊させている。だが――それは彼女が喜んでやったことだろうか。あんなにも痛そうな悲鳴をあげる彼女が。
「結局、狭霧家の試みは成功した。してしまった！　戦乱の世に出た妖術師たちは、狭霧家以外の全てが絶滅し、今残っているのは幕府が開かれてから現れた新興の妖術師家系ばかりだ。落ちこぼれ君、狭霧家がどれほどの罪を背負っているか分かるかね！？」
先ほどとは逆に、星流の感情はどんどんと高揚していた。怒鳴りださんというばかりに、両腕を広げて口を大きく開ける。
「星流さんは、だから狭霧家を襲撃させたんですか？」
「質問を質問で返すか。まあ構わんがね。言っておくが、実際に狭霧家襲撃の命を下したのは我輩ではない。だが、見過ごした。あの程度の人員なら狭霧家が返り討ちして終わりだろうと踏んでいたしな。しかし、彼らはあっけなく滅ぼされた。なぜだか分かるか？」
「……」
確かに、狭霧家の滅び方はあっけなさすぎた。彼らは戦闘用の妖術も多く習得している。一人で百人の武士を殺すことだって容易なはずだ。

――そもそも。
界は思い出す。
そもそも、襲撃当日、狭霧家の人間は誰一人として妖術を使っていなかった。
――自殺でもする気だったのか？
違う。
「……そういう、ことなんですか？」
界は別の可能性に行きあたった。答えは恐らくこちらで合っている。
「その通り！」
星流が杖を叩く。更に深々と突きたった。
「またも裏切ったのさ。七雲が狭霧家への昼の鮫の供給を止めたんだ。妖術以外の護身術など学んでいない狭霧家は、それだけで瓦解し、なすすべもなく殺された」
髪を指で無造作にすく。
「しかし、まあ狭霧家には当然の報いだろう。それだけのことをしたのだから」
「なッ……」
界は思わず絶句する。
「当然って、でも、今の狭霧家に罪なんて――」
「あるさ！」
今までになく感情――火を見るよりも明らかな怒気――をむき出しにして、星流は言いきった。
「代々引き継がれるほどの十字架を背負ってるんだよ！　いいか？　妖術師がほとんど消えたことで、その世間における地位、名誉は急落した。妖術は衰退したとか、妖術を使える人間がいなくなってるとか、そんなことが言われているが、そんなのは人々の勘違いだ。なんでそんな勘違いが起きたか。決まっている。狭霧家が妖術師を滅ぼしたからだ！」
迫力に気圧されて、界は更にたじろいだ。

星流は今や憤怒の形相を浮かべていた。赤い装束がこの上なく似合う。一段と大きく息を吸い込むと、一段と巨大な怒鳴り声をまき散らす。
「狭霧家が妖術師を貶めたんだ！　貴様はそのことが分かっているのか！」
びくり、と界は体を震わせる。
数秒の間があって――星流は眉間に出来た皺を広げた。激情を宿した瞳が元の色に戻り、ふっと我に返る。
「ま、落ちこぼれ君はむしろ狭霧家の被害者、といったところだがな。君に八つ当たりしても仕方がない」
「い――いえ」
界は心臓を落ち着かせつつ自問する。
――この人は、一体なんなんだ……？
元から何を考えているのかよくわからない人物だったが、今日はいつにもまして意味不明だ。七雲を化物呼ばわりするが、むしろこの人に人間なのかと聞きたくなる。
「星流さんは……一体何をしたいんですか？　そんな知識をどこで手に入れたかは知りませんけど……何に利用するつもりなんです？」
「知識は文献と、狭霧家へ見習いで行ったときに仕入れた。七雲の安置されている部屋にも忍びこんだよ」
「ああ、それで――」
それで七雲と星流は知人のような会話をしていたのか。部屋に忍び込んだときに、七雲は星流の姿を玄玉の枝の姿のまま目撃したか、もしくは人間体になって会話を交わしたのだろう。
「何をしたいかなど決まっている。自然を感じることさ！」
星流が狭霧家にいた頃から聞かされてきたセリフだ。
「一体どういう意味なんです？」
「そのままの意味さ！　まあ、もっと言えば、皆が自然を感じられるようにすることだ。自然は良き道を指し示してくれるからな！」
「狭霧家の罪が……そのことに関係あるんですか？」

「大アリだよ」
星流はにんまりと笑うと、界に反応の余地を与えず言葉をつなげる。
「七雲は何を望んでいたと思う？」
「……」
界には答えの出ない問題だった。
自分が殺されることに協力する人間の気持ちなど、到底推し量れそうにない。
「我輩が考えたところ、あいつの目的は――自殺だ」
「じ――自殺！？」
「何を驚く」
「そりゃ驚きますよ！」
「驚く必要などない。大体、なんで狭霧家を裏切ったあと君に協力する？」
「それは……」
分からない。
何も分からない。
「君と目的が一致していたからに決まっているだろう」
協力するというのは、裏も表もない、本心からの言葉だったというのか。界に殺されたいがために、ともに行動していたのだろうか。
「……でも、なんで自殺なんか」
「あいつは、痛みを感じない」
「東西南北も――そんなことを言っていました」
実際、腰の骨を折った状態で立ち上がろうともしていた。常人なら耐えられない痛みだろう。
「でも、東西南北に斬られたときは、痛そうな様子で――」
「あいつの攻撃は特別だからな」
「……ことごとく東西南北と同じことを言うんですね」
「なにッ」
星流は苦虫をかみつぶしたような表情をする。

「まことに遺憾だ！」
頭を抱えて蹲る。嫌いなのだろうか。
間を開けずにすっくと立ち上がって晴れやかな笑顔を浮かべる。
「まあ、真実を告げる口は同じ形をしていると言うしな」
「誰の言葉です？」
「むろん、我輩の言葉だが」
界に冷たい視線を投げかけられても、星流は全く動じない。
「七雲を覆うのは痛みのない世界だ。それがどんなものか分かるか？」
「それは――」
きっと、楽ではあるだろう。ただ、不死身でなければ死期は早まりそうだが。
「楽なんてものじゃないさ。退屈なのだよ。痛みがなければね。しかも、やつには皮膚感覚そのものがない。肌で何も感じることができない！　自然を肌で感じられない！　どれほど冗長で刺激のない日々であろうか！　――そう、七雲は間違いなく退屈したんだ。世界にな。だから死のうと決めた」
そんなものだろうか。
「七雲が、今どこにいるか分かるかね？」
「知ってるんですか？」
「分島城だよ」
「なッ……」
もう何度絶句しただろうか。
分島城と言えば、この辺りを取り仕切る幕府の城だ。今まで散々逃げ回ってきた相手の総本山。城主は――何を隠そう、目の前の星流その人である。
「あそこにはな、七雲と東西南北の生まれ故郷がある」
「故郷……？」
「滝夜叉の門――開けば妖力を吸い取られてしまう、魔の門だ」

自分の何倍もの背丈を誇る鉄扉を見上げて、七雲は筆舌しがたい思いにとらわれた。
滝夜叉の門。誰が何の目的で作り上げたのかは分からない。気づいたとき、この門は存在していた。
位置取りで言えば、門は霊峰神楽山の内部に繋がっている。だが、謎に包まれた霊峰の内部に何があるのかは未だ分かっていないようだ。
門を開けて見えるのは――闇。黒い空間だけが見渡す限り広がっている。実際に門の奥深くまで立ち入った者はいない。どんな生物も門の中に長居するだけで紫の炎に焼かれ、死んでしまうからだ。何らかの力が夜の霊鳥を吸い取っているのである。
「生まれた場所で死にたいなんてなァ。ロマンチストを気取っても滑稽なだけだぜェ？」
背後で東西南北が言った。
そう。七雲はここで生まれた。名もない少女から一人の化物へと生まれかわった。
分島城地下。滝夜叉の門に合わせて作られたのか、部屋は広く高い。そこここに千切れた木材や細かな石が積み上げられているのを見ると、普段は倉庫として使われているようだ。だが、お粗末なことに、天井も壁も冷たい地面のまま。床だけが石畳に包まれている。部屋の崩落を阻止するためか、石柱が等間隔に林立していた。光源は所々の灯篭だけで、部屋全体が薄い闇の膜に覆われている。息苦しい。
七雲は――そして東西南北も――滝夜叉の門の力を利用して作られた。当時の記憶はあまり鮮明ではない。ただ、とてつもなく大きな術が自分にかけられたことを覚えている。
もう二度とあのような術が使われることはないだろう。誰も門を開けなくなっているからだ。――ただ、一人を除いて。
「ロマンチストではないわ。ただ、自分のしたことやされたことを

もう一度確認してから死のうと思っただけよ」
　両の掌を眺める。暗さで手相はほとんど判別できない。
「……まだあの日のことを恨んでいるの？」
「ヒャハ！」
　心底侮蔑したような笑い。
「恨むだァ？　そんなんじゃない。貴様は死ななきゃいけない存在なんだよ。だから殺す。それだけだ」
「……あなたは、私を殺すに相応しいわ」
「ぁあ？　偉そうなことをいいやがるなァ。自分で自分の死に方を決めようなんざ……思いあがりもいいとこだ」
　東西南北は足音を響かせ始めた。段々と小さくなる。
「どこに行く気？」
「言っとくが……すぐに死ねるとか思うんじゃねェぞ？」
「どういうこと？」
　背を向けたまま尋ねる。今この場で殺される心持ちでいたのだが、東西南北にそのつもりはないらしい。
「あの狭霧のガキは必ずここに来る。貴様を殺すのは奴をぶった斬ってからだ」
　七雲の動きがぴたりと止まる。
「おォ、どうしたァ？　やっぱ心配かァ？」
「……なんのことかしら」
　零度の声。
「あの子がどうなろうと私の知ったところじゃない。もう関係ない人間なのだから」
　ヒャハハ、と東西南北は高揚して笑う。
「言っとくが、どうせガキはここに来ない、なんて期待してるんじゃねェぞ？　我が城主様が奴をここに導いてくれるからなァ」
　仮面の位置を直す。
「ここに来てガキが死ぬのを止めようとしたら、それは貴様のせいだぜェ？　貴様が変に誘惑なんざしやがったから、ガキも勘違いし

てその気になっちまったんだ」
七雲が振り返り、東西南北を目で射抜く。
「あなたはどっちなの？　私を感情のない化物と罵ったかと思えば、今度は精神的な攻撃を仕掛けてくる。私を化物と認識してるの？　それとも人間？　はっきり決めてほしいわね」
東西南北の手から紫炎の鞭が伸びた。天井を抉り、七雲に向けて岩石が落下する。転ぶようにして後ろへ跳び退り、すれすれのところでかわす。
「黙れ、化物」
東西南北は不機嫌そうに鼻を鳴らした。納刀すると、すぐに機嫌を取り戻す。
「ヒャハ！　あのガキは面白いよなァ。狭霧の人間だからってだけじゃない。ひどく痛そうな顔をしやがる。人間だよ。あいつァこの上なく人間なんだ！」
それを捨て台詞に、東西南北は奥の階段を上りきって姿を消した。
静謐が辺りを満たした。

見上げた空をトンビが横切っていった。相変わらずの曇天が気分を茫洋とさせる。
「あーあ……」
界は下生えに寝そべって全身を伸ばした。気分がすっきりするかと言えば、そういうわけでもない。
七雲が過去に何をしたのか、どういう存在なのかは大体分かったような気がする。滝夜叉の門という未知の存在を利用して七雲と東西南北が作られたこと。そこで死ぬ気でいること。体内の妖力が尽きれば七雲は死んでしまうこと。妖力を吸い取れる東西南北だけが、七雲を殺せるということ。
星流の言葉を信用すればという条件はあるものの、七雲についてこれだけの知識を得ることができた。だが、肝心のところは分かっ

ていない。界が本当に知りたいのは、七雲がどのように考え、どのように世界を見、どのように――

「どんなふうに、僕を思っていたか……」

あの日暮れ、七雲は何を思って接吻してきたのか。

利用した人間に対する、別れの意味を込めていただけなのだろうか。

「そうかもしれない――いや、きっとそうなんだろうな……」

自嘲気味に笑う。

一方で、そう信じたくはない自分がいることを界は察していた。

利用されていただけと思いたくない。見限られただけと思いたくない。

首元に手をやる。あの蒼い石は――もうない。

「……姉さん」

右腕を目の上にあてがった。視界を闇が遮る。

思えば、姉も勝手に死んでしまった。界に黙って、界を置き去りにして。

「やっぱり姉さんと七雲は――いや」

違う。

「姉さんと七雲は……違う人間だ」

二人を重ね合わせてもむなしいだけなのだ。

星流の言葉を思い出す。彼が語る七雲像は、血も涙もない無情の妖魔だ。人を騙し、裏切りを重ねる。

本当にそうなのだろうか。

東西南北と初めて会ったとき、七雲は震えていた。東西南北に斬られたとき、悲鳴をあげた。

悲鳴。

何かが引っかかる。七雲が辛そうにしたのは、何も東西南北から攻撃を受けたときだけではないはずだ。なにか、それ以外にも――。

「あ」

護円で出会った幼い二人。加害者となった界。

親を裏切り、愛を殺した七雲。
――そうだ、きっと七雲は。
憶測でしかない。
――でも、憶測だとしても。
それでも、もしかしたらこれが七雲の本心なのかもしれない。
寝転んだ頭上から、草花を踏みしだく下駄の音。
「どうだ、決まったか？」
右腕をどかすと、星流の顔が逆様になって見えた。
「……そうですね」
七雲の話を一旦終えたところで、星流は一つの提案を界に投げかけた。
星流が妖術を使って界を七雲のもとまで送り届ける。その代わり――界が七雲と東西南北を殺す。
殺し方は既に教わった。今となっては、界以外に七雲と東西南北をどちらも殺せる者はいない。
分島城の城主であるところの男が、何を目的としてそんな提案をしてきたのかは分からない。自然を感じるとか、他の人にも自然を感じてもらうといった謎めいた目的を達成するには、二人の存在が邪魔なのかもしれない。
立ち上がり、星流と向き合う。逡巡するように目を閉じ――強い意志をたぎらせて開く。
「……行きます」
きっぱりとした声。
「僕を七雲と東西南北のもとへ連れて行って下さい」
「それは、あいつらを確実に殺すという意味だぞ？　七雲を躊躇いなく殺せるのか？」
「――ええ。殺してみせます」
迷いはなかった。
「この短期間で吹っ切れたか。素晴らしい決意だ」
そう言うと、星流は杖を振りかざした。杖の動きに合わせて木片

が集まり、木製の丸い絨毯を形成する。人が二人座れるほどの大きさになったところで星流は杖を止めた。木屑の絨毯はふわふわと浮かんでいる。
「んじゃ、行こうか」
「……はい」
星流のあとに続いて飛び乗る。木の絨毯はバランスを崩す気配もなく、力強く界の体重を受け止めた。
浮島のような乗り物を作ったのは意図してのことだろうか。星流の横顔を窺っても表情は読みとれない。
赤い妖術師が立ったまま杖で絨毯を叩くと、途端にごうごうと風が鳴り始めた。上昇気流が巻き起こり、二人を空高くまで押し上げる。眼下に森と山と湖が広がった。上から眺める限り、護円に目立った損壊の跡はない。七雲の言ったことは真実だったらしい。ただ、湖岸にはたくさんの住人がたむろしていた。住める状態にないのもまた事実なのだろう。
自分が陥れた者たちの末路を見て、界は暗く目を伏せる。
木の絨毯は一定の高さまで上がると、送り風に吹かれて西へ進み始めた。その先にあるのは――霊峰神楽山。
「星流さん」
その背を見上げて声をかける。自然現象にしたがえば向かい風が容赦なくやってくるはずなのだが、何かに守られているらしく、そうした抵抗は全く感じられない。
「なんだ？」
聞くべきかどうか一瞬迷う。だが、聞かずにはいられない。
「七雲は……なんで卍巴を裏切ったんでしょうか？」
「それを知ってどうする？　殺す相手の気持ち――しかも以前にやったことの動機など知っても仕方があるまい」
「そう……ですけど」
星流が横目でちらりと界を見た。
「化物の気持ちなどわからんが、考えられるのは一つだ。自分の欲

望に従った。それだけだよ」
「自分の欲望？」
「奴は夜の霊鳥を吸うのが唯一の生きがいだ。卍巴は、七雲と東西南北を作り出しはしたが、妖術師としては二流三流だった。狭霧家に取り入った方が、よりうまい妖力を吸い取れると思ったのだろう」
「……なるほど」
眼下の景色が目にもとまらぬ速さで移り変わっていく。この浮島もどきはとんでもない速度で進んでいるらしい。たった数分で神楽山の上空にたどり着き、その動きを止めた。
ゆっくりと下降していく。段々と大きくなる霊峰は、しかし霧に包まれてその本当の姿を晒すことはない。ただ、霧の広がっている規模で非常に大きな山なのだと分かるのみだ。標高はいくつだろう。なだらかだという話だが、二千メートルはあるように思える。辛うじて見える尾根は、八岐大蛇の尾と首を全てつなげ合わせたかのようにくねくねと長い。
霧の中に入る。湿気はあまり感じられない。昼の鮫が結晶化して出来た霧だ。そうなるだけの昼の鮫がここには溜まっている。
「よっと」
地面が見えてきたところで星流は飛び下りた。続こうとした界を手で止める。
「君はそのまま乗っているんだ。超絶ふわふわ君が滝夜叉の門まで連れて行ってくれる」
「……超絶ふわふわ君？」
「君が今乗っているやつのことだよ」
「……ああ」
予想はしていたが、なんとも奇抜なネーミングセンスである。
「星流さんは来ないんですか？」
「七雲の前では妖術を使えんから、我輩がついていっても邪魔なだけだろう。城までゆっくり散歩でもするよ」
「散歩……？」

滝夜叉の門は分島城内にあるはずだ。せめて城内まで星流がいた方が色々と便利なのではないかと界は思う。
だがそんな疑問を口にする暇もなく超絶ふわふわ君は発進する。ぐんぐんと速くなり、あっという間に星流の姿が霧の向こうへと消える。
「頑張りたまえよー！」
声だけが霧を突き抜けて聞こえた。

「――さて」
界が完全に見えなくなったのを確認して、星流は歩き始めた。
歩を進めるたびに落ち葉が砕けた。おぼろに見える木々の影はどれも異様に大きく、あるいは枝が円を描いたり、幹がくねくねと曲がったりしている。濃密な妖気の影響で自然に変化が生じているのだ。夜というにはまだ早いにも関わらず、鈴虫が鳴き声をあげている。
しばらく歩くと、上空に分島城の荘厳なシルエットが浮かんだ。あと少しで正門だろう。
だが――その前に人影が二つ、立ちはだかっていた。
「やあ。一日ぶりなのにやたら久しく思えるなあ」
星流は人影に向かって手を上げる。
更に進むと、二人の姿がしっかりと視認できるようになった。
霧に溶け込む白装束と白い仮面を身につけた男。そして――
「ついて行っちゃダメって言ったのに。聞きわけのない子だなあ――きくちゃん」
笠を被って目元と性別を隠した武士。
東西南北と美花きく。
二人は、それぞれの刀を抜き――星流に切っ先を向けた。

超絶ふわふわ君は城の正門を飛び越えると、開いたままの三階の窓に勢いよく突っ込んだ。
「わわわわわああ！」
窓は小さい。座っていたら頭をぶつけてしまうと気づき、慌てて伏せる。巨大な円形をしていた超絶ふわふわ君はスリムな長方形に姿を変えた。
後頭部すれすれを窓枠が通り過ぎる。
「ふう……」
ほっとして座りなおした。だが、そこでまた息を呑む。
目の前に白い壁があった。
超絶ふわふわ君は廊下を猪突猛進した末、角で曲がり切れずにいた。
「うわああ！」
ぶつかると思った瞬間。
絨毯は凄まじい踏ん張りを見せてカーブし、速度を維持したまま廊下を進む。
その先にお盆を持った女中がいた。
「きゃあああ！」
「わあああああ！」
界と女中の悲鳴が重なる。
絨毯は反転しながら天井まで上がった。
「お、落ち……」
絨毯の下になった界は、重力に従って落下していく。そう思った時には絨毯が再び反転し終え、床まで下りていた。女中の姿は後ろにある。間一髪のところで身を回転させながら避けたらしい。恐ろしい反射神経を持った絨毯だ。
城の内部は入り組んだ廊下になっていて、高速移動には向いていない。それでも木製絨毯は速度を落とさず、ぎりぎり壁に激突するかしないかのところで角を次々と曲がっていく。行きかう武士や下女と何度もぶつかりそうになり、界と相手はそのたび悲鳴をあげた。

いったいこれのどこがふわふわしているというのか。名が体を裏切っている。
階段を墜落するように下りて、廊下を飛び、また階段を下りる。それを何度か繰り返すうち、気温が低くなり始めた。風に湿気が交じる。もう大分地下まで入ったのだろう。
「曲者だ！　追え！　追えー！」
背後からは武士の叫び声があがる。何人かが後を追っているらしい。
「まあ、追いつかれる心配はないんだけど――！？」
呟いた瞬間、超絶ふわふわ君が姿を消えた。
「わ、あああ！」
床に落ちてごろごろと前転する。
「いたぞ！」
角から追手が登場する。数人は振り切れたらしく、二人しかいない。狭い中を刀を抜いてじりじりと迫ってくる。
界は急いで起き上がると、間合いを保ちながら周囲を確認する。
前方は武士。両脇は京塗りの壁。後ろは――
「い、行き止まり……！？」
三方が壁とあっては、逃げ場などあったものではない。
「何者だ！　言え！」
先頭の武士が脅すように踏み込んでくる。
それに合わせて一歩下がると、壁が背中に当たった。もう下がれない。
「――ん？」
足元に違和感を感じた。
体重の移動に伴ってぎしぎしと音を立てる。
「むっ……貴様、もしや狭霧界か……？」
人相書きでも出回っているのだろうか。名乗りをあげる前に、相手方は不審者の正体を見破ったようだった。
どうとも答えず、界は床板に目を凝らす。

黒い仕切りの線が四角形を描いて界を囲んでいた。下へ通じる通路が隠されている。そうとしか思えない。
「貴様は捕獲するようにとの命令が出ている。いざ、覚悟！」
武士は更に踏み込むと、素早く斬りこんできた。右腕の辺りを狙っている。太刀筋は甘い。すり足で左に避けると、後続の一人が接近していた。
チームプレーの見事さに感心している暇はない。この手狭な空間ではもはや二撃目を避けられない。
抜刀する。集極が発動した。
相手は懐に潜り込んでいる。峰打ちをする気だろう。
「くっ……」
鳩尾に受ければあっという間に気絶してしまう。反撃しなければやられる。反撃すれば相手の腕が飛ぶ。
相手の峰が目前まで迫る。
界は刃を胸の前に掲げると、光を思い切り拡散させた。
「まぶし――ッ」
一瞬で広がった光の粒子は強烈な閃光を発生させた。武士が怯む。その隙をついて足元に刃を突きたてる。仕切りの線に沿って斬ると床が抜け、界は勢いよく落下した。
「うわあああ」
幾度目かの悲鳴。一秒とない無重力体験の後、臀部が激しい衝撃に見舞われた。
「い――いってー！」
固い地面に尻もちをついたらしい。横になったまま堪え切れず悶絶する。
「な、なんだこれは！？」
頭上からはざわめきが響いた。城の武士も隠し通路のことを知らなかったらしい。
尻を摩りながら立ち上がる。ひりひりするが、道場で面をもらったときよりはよほどましだ。

通路には灯篭が等間隔にかけられ、その明かりは剥き出しの地面を照らしていた。床だけでなく壁も天井も全て土だ。地下室や隠し通路というより洞窟といった体裁である。上と同じように三方が壁に囲まれ、進む方向は一つしかなかった。

驚きつつも、自分の推測が当たったことに多少安堵する。一時的にしろ危機を防げたことに変わりはない。

「梯子があるぞ！」

見ると、武士の言葉通り背後の壁には梯子が架かっていた。上を見ると、五メートルほど離れたところから光が差し込んでいた。梯子が揺れ始める。武士たちがおりてくるのも時間の問題だ。

早足で進み始める。この通路もまた上と同じく、非常に狭い。幅は人一人分ほどで、緩やかな下り坂になっている。

間もなく鉄扉が姿を見せた。後ろから足音が迫る。

集極で閂を壊し、少し押し開けて体を向こう側へ滑り込ませる。鞘が引っかからないよう縦に向ける。

振り返ると、すぐ手前まで迫る武士の姿が隙間から見えた。駆け足になっている。

――追いつかれる。

だが、細身の界がきわどく通れた隙間を大の男も同じようにして抜けられるわけがなかった。二人で扉を押して隙間を広げようとする。

慌てて押し返す。しかし、力勝負では圧倒的に不利だ。

「う……おおおおお」

火事場の馬鹿力。

全身の筋肉を振り絞ってどうにか押しきる――ことはできなかった。ただ、開きかけた扉が多少戻っていく。片手で素早く脇差を取りだした。取っ手に差しこんで閂代わりとする。無理やりながら扉は閉まりきる。

「開けろ！　開けろー！」

どん、どんと扉が叩かれる。今のところ開く気配はない。脇差の

強度も捨てたものではないようだ。
「……」
イカダに乗る際、川に投げ込もうとして七雲に止められたのを思い出す。
――役に立ったもんだな。
いつまで保つかは分からない。気休め程度のものだが、それでも二人と会う前に追い詰められるということはないだろう。
淀んだ空気の中に微風が感じられるようになった。
尻の痛みもひき、界は走り始める。
しばらく進んだ末に出たのは、石柱が突き立つ大広間だった。
「ここは――」
天井が高く、床が低くなり、下り階段が広間へと伸びる。壁だけでなく石柱にも灯篭が掛けられ、火にあぶり出された室内は、まるで記憶に残る狭霧の祭儀場のようだった。
そこここに積み上げられた木屑や空樽、様々なガラクタ。奥にはひと際巨大な両開きの鉄の門が口を閉ざす。その前に――
「いた」
その前に七雲はいた。
階段を駆け足で下り、まっすぐその元へ向かう。
東西南北の姿はない。石柱の陰に隠れているのだろうか。もしそうだとするのなら慎重に足を運ばなければならないが――今の界にはそんなことを構っている余裕がない。
遠いと思われた距離も、すぐに埋まる。
たどり着いた界に、しかし、七雲は黙ったままでいた。獅子の石像の背に界の方を向いて座り、顔を俯けている。
「七雲」
反応はない。
「七雲！」
もう一度、強い調子で呼びかける。
反応はない。

「……七雲、僕は――君の過去を知ったよ」
反応はない。
「君が何をしようとしていたのかもある程度知ったし、どうすれば君を殺せるかも教わった」
鉄の門を見上げる。あれが滝夜叉の門というやつだろう。
「これを開けられるのは、僕しかいないんだね。昔、狭霧家がここを占領したときに封印をかけた。封印は、狭霧家の人間でないと解けない」
滝夜叉の門は狭霧家によって封印をかけられた。七雲や東西南北の存在がこれ以上現れるのを恐れたのだ。
「君が体に貯めこんだ妖力、それそのものが君の命だ。妖力を無くせば、君も普通の人間と同じように死ぬ。つまり――」
界はそこで一度ため息をつく。
「この門に入れば、君は死ぬ。この門を開けられる僕だけが――君を殺せるんだ」
「……違うわ」
ようやく、七雲の口が開かれる。絞り出されるのは、重く、鉛のこもったような声色。
「あなただけじゃない。東西南北も私を殺せる」
東西南北が斬りつければ、七雲の妖力は吸い取られる。時間はかかっても、七雲はそれで死ねる。
「……七雲は、死にたかったの？」
七雲は顔をあげた。感情のない瞳でうすら笑いを浮かべている。
「そうよ」
「なんでさ」
「飽きたのよ。刺激のない毎日なんてもうたくさん」
それは――別の人間から既に聞いたことだ。
「あなた……何で来たの？」
「え？」
「もう用済みなのよ、あなた。この門を使って死ぬのが一番楽だか

らせっかく集極まで与えてあげたのに、実際はお姉さんの復讐すらできない腰抜けだった。しかも、利用されてることにすら自分で気づけない愚鈍な坊や。ほんと、おめでたいわよねぇ。口では私を殺すとか息巻いておきながら、ちょっと見知った人間が怪我したくらいでめそめそ泣きそうになったりして」

言葉が氷柱となって界の耳に突き刺さる。

七雲は侮蔑の眼差しをより鋭く細めると、界をねめつけた。

「どうせ今のあなたでは門を開けない。役立たずもいいところだわ」

そう――今の界では滝夜叉の門を開くことができない。それもまた、星流に聞いたことだ。星流は「何とかなる」などと無根拠なことをわめいていたが。

どんどんと悪辣な言葉を口にする七雲に、界は苦渋の色を濃くした。

身を挺して自分を庇った七雲と、今目の前で罵倒してくる七雲は、本当に同じ人間なのだろうか。それとも――ずっと心のうちではそう思いながら過ごしていたのだろうか。

七雲は石像から立ち上がると、界の方へ歩き始めた。

「分かったらさっさと消えなさい、クズ」

何も言わず、界はその場から足を動かそうとしない。

七雲は舌打ちをした。

「消えろって――」

一層険のある表情になると、右手を振り上げる。

界はぼうっとその様を見つめる。何のための右手か、界にはいまいちぴんと来ない。

「言ってるでしょ！」

――平手打ち。快音とともに、界の頬は赤く染まった。

幕間、ある少女の回想その四

今宵の生贄が連れられてくる様子を、七雲は黒真珠の中から透かし見ていた。

今回は男児が蒼の子となったらしい。衣冠装束に身を包み、堂々とした足取りで向かってくる。死への恐怖は見当たらない。

否。

ただ、自分の運命を知らないだけなのだろう。

憐れみの感情が押し上げてきて、七雲は慌ててそれを呑みこんだ。獲物のことを考える必要はない。ただ自分は、これから訪れるであろう快感を楽しみに待つだけだ。

祭儀場の中央には祭壇が据えられ、蓬莱の玄玉の枝はそこにまつられていた。七雲の体は極小化して、その黒真珠のなかに入っている。玄玉の枝の背後には、十字形の柱。男児はそこまで行くと、大人たちの手によって磔にされた。抵抗する様子も、戸惑う様子すらない。

それを見て、七雲は軽い驚嘆の念に囚われた。

礎にされてあんなにも落ち着いている子を見るのは初めてだ。自分の身にこれから何が起こるのか、既に知っているのだろうか。

玄玉の枝が男児の目の前に置かれる。そこで改めて男児を眺めて、七雲はようやく気付いた。

態度だけではない。いつもの生贄とは、根本的に違う。

夜の霊鳥（とり）の量が少なすぎる。もちろん、普通の人間に比べればかなり多い方だ。だが、以前の生贄のような圧倒的な膨大さがない。

それに――。

七雲はこちらに微笑みかける男児の顔を見上げる。小型化してる彼女からすると、男児の顔は離れていても巨大に映る。その輪郭や、小鼻や、二重瞼をじっと見て、七雲は再び気づく。

男児ではない。衣冠装束をしているが、顔つきは女児だ。

七雲は何が起こっているのかを把握した。
きっと、蒼の子に選ばれたのはもう一人の子供――恐らく男児――なのだ。しかし、黒の子に選ばれて生き残るはずだった子供が、蒼の子と入れ替わった。自分の命を犠牲にして、蒼の子を庇おうとしているらしい。
何が動機かは分からない。兄弟愛か、犠牲心か、ただ死にたかっただけなのか。何にせよ、七雲には全く理解できない気持ちが働いているのだろう。それだけは間違いない。
七雲は、どうしたものか考えあぐねた。この子供では、本物の蒼の子ほどの快感は得られない。それに、入れ替わったことが後にばれてしまえば、生き残った蒼の子が狭霧家に殺されてしまう可能性もある。眼前の女児の行動が無意味になってしまうことだってありうるのだ。
「――あの」
言ったのは、微笑みを崩さない女児だった。
「蓬莱さん……私を殺してしまう前に、一つお願いしてもいいですか？」
――蓬莱さん？
おかしな名称だ。思わず笑ってしまう。
同時に、幾分失望する。
お願い。それがなんなのか、大方の予想はつく。命乞いかなにかだろう。身代わりという行いは綺麗だし、口調もおずおずと控えめだが、結局は自分の命が惜しくなる。この娘も、色々きれいごとを並べた末に命乞いの類をしてくるに違いない。
七雲は、黒真珠のなかで人と会話することができない。だから、黙ったままでいた。それを肯定と受け止めたのか、女児は後を紡ぐ。
「私、双子の弟がいるんです。ドジでとろくて泣き虫だけど、とっても優しくて可愛い、自慢の弟が」
澄んだ声。ささめくような小声で七雲に語りかける。
――ほら、やっぱり。

いかに自分が身代わりとならざるを得なかった不可抗力について、ここから語るに違いない。そうして自分の境遇に同情してもらおうとする。見慣れた手口だ。

「あの子、私がいなくなったら悲しむかもしれない。それに、父さんや母さんがあの子にひどいことをするかも。死んでしまったら、私が守ることはできません」

七雲は訝しんだ。話が、予想していたものからずれている。

「だから、蓬莱さん。私が死んだあと、あの子のことを守ってくれませんか？」

――なにを。

なにを言っているのだろう。

七雲は動揺した。

理解できない。目の前の年端もいかない女児の気持ちが、これっぽっちも理解できない。

「あ、出てきました。見てください、あの子ですよ。可愛いでしょ？」

見ると、祭儀場の入り口から汗衫（かざみ）姿の子供が飛び出してきていた。かぶろに髪を切り揃えて女児の姿をしているが、あれが弟だろう。姉とよく似ている。

彼は女中の制止を振り切って祭壇の前に着くと、大声で叫び声をあげた。

「僕を置いて行かないでよ！　姉さん！」

途端に、呪文を止めて妖術師たちがざわめき始めた。

ばれた。今の一言で、姉の苦労は全て台無しだ。

「ほ、蓬莱さん！　い、急いで、急いでお願いします！」

「え？」

どうするべきだろう。

妖術師たちが弟の元に駆け寄り、顔を確認し始めた。こちらにも何人か迫ってくる。

決断するしかなかった。苛立たしげに舌を打ち、両腕を掲げる。

女児の体から火の手があがった。
姉のところに着いた妖術師たちは、突然勢いをあげて噴き出した紫の炎に、わっと飛び退く。
妖力が自分の身に流れ込んでくる。
「ありがとう……」
最後の笑みを浮かべた女児に、七雲はどうとも返すことができなかった。黒真珠の中にいるからではない。もし面と向かって対面していたとしても、七雲はただ呆けた顔を返すことしかできなかっただろう。
分からない。
その言葉だけが頭に浮かぶ。
他人が傷つくのは痛い。だけど、自分が傷つくのはもっと痛い。だから、結局は自分本位になってしまう。そんな中途半端な態度によって、生きているかも死んでいるかも分からないような中途半端な状態となった七雲には、所詮女児の気持ちを推し量ることなど不可能だった。
振り返ると、男児は大人たちに取り押さえられていた。七雲に出来るのは、ただ一つだけだ。
「守ってあげるわ――あなたのこと」
決意とともに、快楽はどこかへと消えていた。

六、終極のひかり

――痛い。声はあげなかった。

「消えて……消えてよ！」

七雲の両腕が界の首を絞めにかかった。直前のところで手首を掴んで止める。

「一つ……聞かなきゃいけないことがあるんだ」

歯を食いしばりながら、界が言う。

七雲の力は思いのほか強かった。受け止められたと知るや、今度は体全体で界を押しにくる。

「七雲は、なんで卍巴の人たちを裏切ったの？」

笑う。心底おかしいとばかりに笑う。

「あっははは！　なんで？　そんなの決まってるじゃない！　あなたたち狭霧家のところにいればおいしい妖力が吸えたからよ」

界は七雲を押し返すと、二、三歩下がって距離を取る。

「妖力を手に入れるっていうのはね……私にとって全てなの。あの忌まわしい白装束の奴らを裏切ったのも、そのあと狭霧来と一緒に他の妖術師どもを皆殺しにしたのも、護円に行ったのだって、みんなみんなみぃーんな妖力を吸い取るため」

ゆらりゆらりと七雲は界に近づく。髪の隙間から覗く目が狂気を湛えている。

「……ねぇ、知ってる？　あなたって、夕の狐（きつね）があいてないだけで、本当はとっても妖力を持ってるのよ。お姉さんよりも……いえ、お姉さんなんて比較にならないほどたくさん妖力を持ってるの。よくわからないけど、狭霧家の双子ってそういうものなんだってねぇ。大変だったわぁ……おいしい妖力が目の前にあって、それを吸い取らないなんて」

七雲の足取りに合わせて界は下がる。

「あは！　そうそう、お姉さんの妖力……そういえばあまりおいし

くなかったの。ホント、あの女、私の楽しみを邪魔するなんて忌々しいにもほどがあるわ」
「ねえ……七雲」
界が足を止める。
七雲は首を傾げる。
「君は僕のことをどう思っていたの……？　僕は――他の人と同じ、自分の欲を叶えるための駒？」
「あ――あはははははは！」
ケラケラと――ケラケラと、七雲は狂った笑いのリズムを奏でる。
「なに？　自分が特別扱いされてるとでも思ったの？　勘違いしちゃってた？　あはははは！　そう、駒よ駒。ほんっとに、歩兵よりもよっぽど役立たない駒だわ！」
「そう……だよね」
界は顔を俯けた。前髪で目が見えなくなる。
「じゃあ、僕は」
刀を抜く。
集極が淡い明かりを投げかけた。
「君の駒として――君を殺すよ」
顔を上げる。覚悟を決め、界は地を蹴った。

「私をこうさせたのは、あなたです。星流様」
棒読みと言っていい。きくの声には、いつも以上に抑揚がなかった。
「言っている意味がよく分からないなあ」
東西南北ときくの二人は、星流に対して明らかな殺意を放っている。向けた切っ先も単なる脅しではあるまい。ここで確実に星流を始末しようとしている。
「分からないのであれば、説明してあげましょう」
一歩、きくが間合いを詰める。

「私は東西南北殿のことを元々存じていました。協力して蓬莱の玄玉の枝を獲得せよと、老中――いえ、将軍様から直々の命を受けていたのです。しかし、私の任務はそれだけでは」
「それだけではなかった」
星流が後を継いで、きくは怪訝な顔つきになった。
楽しげに笑って、星流は更に続ける。
「我輩が玄玉の枝を破壊しようとするかもしれない。もしそのような素振りを見せたときには――殺せ。それがきくちゃんの裏の任務だったんだろ？　きくちゃんは我輩も信用してるからね。簡単に殺されると将軍も思った」
杖をくるくると回す。
妖術を放つつもりかときくは身構える。だが、相変わらず星流は白い歯を見せるばかりだ。
「将軍はよっぽど七雲にご執心なんだなあ。彼女の力を解析すりゃ不老不死になれるとでも思ったんだろうかね。戦乱の時代からずっと生きてるってのに、自分の命に対する執念だけはホント大したもんだよ」
杖を天に投げる。人の背丈ほど跳んで帰ってくる。
「しかし、それだけで部下を殺そうなんざ、全くもって非情なご老人だ。同じ人類の所業とは思えない。それとも、我輩のことが嫌いだったのかな。ああ、それも仕方ないかもしれない。我輩の方が物知りだし」
器用にキャッチして見せる。
「ま、どちらにしろ我輩だってこれくらいのことは知ってるよ」
「じゃあ何を」
「分かんないのはきくちゃんのことだよ。君はなんで無理して我輩を殺そうとするかなあ。我輩のことが好きなくせに」
「す、す――」
きくの顔がみるみる赤くなっていく。
「な、ななななんで私があなたの――あんたのことなんかッ」

まともに舌が回らない。ひどく動揺するきくを見て、星流は心底意外そうな顔をした。
「あれ、違った？　小さい頃からずっと一緒だし、今も楽しげに話してくれるからてっきり我輩ときくちゃんは仲良しなのかと」
「えッ……。す、好きってそういう……？」
熟れたリンゴのようだったきくの顔が、今度は餅のように白くなって呆ける。
星流はそれを見てくすりと笑い――その場を跳び上がった。
直後、星流の立っていた地面が抉れる。
「不意打ちは良くないぞ、東西南北くんッ」
「貴様らが馬鹿な茶番してるからこっちは暇を持て余してんだよォ」
地面を削った帯状の紫炎は、空中に浮かんでいた星流を足元から襲撃する。
「あーはっはー！　やっぱり君は欠陥品だったんだなあ。七雲と違って昼の鮫を吸い取れない。だから我輩もこうやって妖術を使える」
星流は左手を下にかざした。突風が掌から吹きだす。風の抵抗で紫炎は上がれなくなる。
「欠陥品？　それを言うなら貴様だろう。生まれた家からは随分と嫌われているそうじゃないかァ」
「我輩は違う。選ばれたんだよ」
突風を止めると、星流は上昇を始める。
「……は？」
「君には生まれる前の記憶があるか？」
ぐんぐんと速度を上げる。
「我輩にはある。生まれる前も、今と同じような赤装束の妖術師だった。偉大な妖術師だったよ。……だが、殺された。黒い姿の妖術師たちによってね。我輩は悟ったよ」
紫炎は追いつけない。
「選ばれたんだとね。思えば、我輩の前世の死からが妖術師衰退のはじまりだった。我輩は――それを止める」

「違うなァ」
東西南北は鼻を鳴らす。
「生まれる前なんざどうでもいい。大事なのは……生まれた瞬間だッ」
紫炎の動きが速くなる。
星流は空中を俊敏に立ち回ってかわし、ある程度引き離すと雲の真下まで上がった。杖を下に向け、何度もしたようにくるくると回す。軽く、そよ風でもふかすように。
だが――それが巻き起こしたのは竜巻だった。
轟音が響く。巨大な木々が軋んで悲鳴を上げた。
見る見るうちに大きくなって虎の前半身をかたどったそれは、霧を晴らしながら東西南北を巻き込まんとする。
「ちィ」
紫炎は東西南北の体の前でとぐろを巻くと、円形の盾を形成した。
「哀れなものだ。親に捨てられたにも関わらず、今もその親のために戦おうなんて」
「貴様ァ！」
東西南北が激昂し、風の虎と炎の蛇が牙をむいて激突する。
大地が唸る。
数秒――否、数十秒の拮抗。
「やはり君は――」
確かな手ごたえを得たのは、
「欠陥品のようだな！」
星流だった。
炎がたち消え、竜巻が地面をかきむしる。東西南北の吹き飛ぶ姿が遠くに見えた。
杖を止めて竜巻を消し、星流は東西南北の吹き飛んだ先に向かう。木々の間だ。一瞬で到着する。あの白装束は見当たらない。
消えている――。
それを確認して、星流は内心で勝利を確信した。

東西南北は茂みに潜み、姿が見えないと慌てた星流を背後から刺すつもりだろう。
だが、星流はそれを読んでいた。考えて分かったのではない。直観で閃いた。
この隙も作り上げたものだ。左手に次の術を用意してある。東西南北の操っている人間の体を拘束し、遠くに持っていくものだ。まずは刀と人間の体を引き離す必要がある。東西南北の本体は紫炎の宿った刀。引き離さなければ、操られている人間を救うことはできない。逆に、引き離してしまえば東西南北は肉体を失って動くことすらかなわなくなる。
後ろで茂みが音をたてる。
読み通りだ。東西南北は、自分で殺した死骸を見ることに大きな意味を見出している。だからわざわざ自分の姿を現して殺しにかかる。
東西南北が真後ろまで来たところで、星流は左手をかざしながら振り向いた。
「もっかい吹っ飛べ――！？」
術を放とうとして――星流は絶句した。
東西南北が左胸から血を吐いている。銀色の刃が突き出ていた。
――どういうことだ。
いつになく星流は動転する。直感を元に組み立てた計算が、音をたてて崩壊していく。
東西南北の肩越しにきくが見えた。刀を東西南北に刺しているのも彼女だ。だが――笠をなくして露わになったその表情は、怯えきっている。
「おいおい、敵は俺じゃねェだろ？　何してくれてんだァ」
東西南北の口角が上がる。胸を刺されているのに、痛い素振りは全く見せない。逆に、刀の紫炎がきくの首元へ伸び、彼女を追い詰めていた。
「な、なんでこいつ……心臓を刺したのに……ッ」

――馬鹿野郎！
星流は心中で叫んだ。
東西南北の人形を刺したところで、人形は死なないし、まして東西南北が動きを停止するわけでもない。きくは知らないのだ。東西南北の正体を。
歯ぎしりをする。
ここで術を東西南北の人形に当てても、本体はその場に残る。そうなれば東西南北を押さえることは出来ても、その前にきくは首を斬られてしまうだろう。
東西南北の本体――あの刀に当てても、この小さな術では夜の霊鳥を吸い取られて効かない。
溜まった息を吐き出した。
左手から夜の霊鳥を放つ。拡散し、周囲の昼の鮫と繋がったそれは、木々から伸びる何本もの蔓となってきくに絡みついた。
「――え？」
強靭な力できくの体が遥か彼方に飛ばされる。
星流は右手の杖に意識を向ける。夜の霊鳥の生成は――間に合わない。次の術が出せない。
「ヒャーハハハハ！」
紫炎は鎌の形となった。逆光に照らされて、東西南北の姿が死神の影となる。
「隙ありィ」
右の肩口から斜めに鈍い痛みが走り、続いて体がだんだんと痺れていく。
「……ぁ……」
意識が薄くなっていく。
星流が最後に見たのは、生まれたときと同じ赤い世界だった。
界は七雲へと走り寄る。

通させまいと、七雲は両手を広げた。
「分からないの？　今のあなたではあの門を開くことは出来ない！
復讐の覚悟すらできないあなたなんかには！」
眼前まで迫ると、界は両脚に力を込め――七雲を飛び越える。
「くっ……」
七雲の背後で着地し、門の前まで進む。両手で刀を握り、頭上にかざす。集極がひと際強い光を放った。
「うあああああ」
全身に銃弾の雨を浴びたような痛みが駆け巡る。
集極の形が徐々に変化する。刃から生えた何本もの光の触手が、門へと向かった。開口部の隙間に滑りこむと、中を探るようにさわさわと動く。それに呼応して、門自体が紫色の微光を放ち始めた。
触手は、界の六個目の感覚となっていた。開口部にかけられた狭霧家の封印を探す。
――あった。
真ん中の辺り。小さいが、彫られているのは強力な印だ。触手を触れさせると、少しではあるが刻印が消えていく。それと同時に、界を襲う痛みが一段と強くなった。
「うがあああああ！」
界はこの痛みが何なのかを知っている。夕の狐が、あまりに多量の妖力で軋んでいるのだ。
七雲から与えられた集極の力。その正体も星流から聞いていた。七雲は獲物に外側から夕の狐を開けて妖力を吸い取る。それを利用して、七雲は界の両手に小さな夕の狐を開けたのだ。そこから放出した夜の霊鳥で無理やり術を発動するのが集極と呼ばれる力。夜の霊鳥だけでそんな妖術まがいのことを出来るのは、界に膨大な妖力が眠っているから、らしい。
一旦開いた夕の狐は、妖力が通過するたびに段々と広がっていく。――抉るたびに傷口が広がっていくのと同じように。集極を使うたび、界の夕の狐はどんどんと大きくなっていた。

だが、滝夜叉の門の封印を解くには更に大量の妖力を放たなければならない。無理に多くの夜の霊鳥を通そうとして、夕の狐は急な広がりを見せ、それに対し体が拒否反応を起こしているのだ。
門がゆっくりとその巨大な暗部を晒し始める。石と石が擦れる。
まだあの隙間では通れそうにない。もう少し――。
全身がガタガタと揺れる。何分経っただろう。いや、恐らく一分も経っていまい。それなのに、痛みで神経が麻痺してしまいそうになる。
「う……ああ……」
悲鳴のあげ過ぎで声がかすれる。夜の霊鳥が大量に失われ、意識がどんどんと遠のいていく。
「もう……もうやめて！」
界の体がぐいっと引っ張られ、手から刀が取り上げられた。
七雲の声は悲鳴じみていた。
「なんで……なんで分かんないのよ！　あなたはここへ来るべきじゃなかった。今すぐ立ち去らなきゃ――逃げなきゃいけないの。今のあなたには、あの門を開くことなんてできない。そんな無茶しても、何の意味もないわ……」
妖力の放出が止まり、開きかけていた門も動きを止める。
界は膝をついた。七雲に肩を揺さぶられながら、薄く笑う。
「やっぱり……七雲は優しいね」
「な――何言ってるの？　何度も言わせないで。私はただあなたを」
「利用するだけの駒として見てたなら……なんでいま泣きそうになってるの？」
「え？」
七雲が目元に手をやる。その拍子に涙が一粒流れた。
「七雲って、本当に痛いのが苦手なんだね」
「な――なにを言って」
「会った頃、妖術が苦手って言ってたけど、そんなの嘘だ。本当に必要なときは、高度な妖術だって使ってた。僕の怪我を治した時み

たいに。実際は妖術を使えたんだ。でも、使いたくなかった。なんでなのか、妖術を使うときいつも苦しそうな声をあげるので分かった」

七雲は瞠目したまま何も言えない。界の中で憶測が確信に変わる。

「妖術を使うと、君は……痛みを感じてしまう。そういう風に、君は作られたんだ」

もし七雲が自由に妖術を使えれば、それ単体で最強の妖術兵器となれる。だが、七雲には人間と同様の意志が存在した。――否、七雲も元は人間だったのかもしれない。どちらにしろ生みの親である卍巴の人たちは、勝手に妖術を使えないよう制限をかけたのだろう。それが、痛み。

昼の鮫の供給を七雲の意志に一任させたのは、七雲を支配できるという卍巴たちの過信か、それとも予期していなかったのか。どちらにしろ、それが星流に二流三流と言わせる一つの所以だろう。

「……そんなの、どうでもいいじゃない」

しばらくして、七雲がぽつりと口を開く。

「どうでもなんてよくない。東西南北を初めて見たときだって、体が震えてた。あれも、東西南北の痛みが怖かったから」

「違う――違うわ！　黙ってよ！　もう何も言わないで、早くここから出てって！　じゃないとあいつが、あいつが……」

嗚咽が交じる。

もはや蹲り、膝立ちの界よりも小さくなってしまった。

その背中に腕を回す。

「ホント、優しいんだね。怖いのも我慢して僕の身代わりになろうなんて。しかも今は、あいつが来るのを恐れて早くここから出そうとしてる。彼は僕を殺す気でいるから。何より痛いのは自分があいつに殺されることのはずなのに」

遠くで悲鳴が聞こえた。続いて、何かが落下する音。石と土が擦れて、何者かの足音が鳴り始める。

界の入ってきた通路からだ。

「姉さんも七雲も、いつも僕を守って、僕のために動いてくれる」
一本道を迷わず近づいてくる。
「だから今度は――」
誰が来るのかなど、分かりきったことだ。
七雲から刀を取り戻し、よろよろと立ちあがる。
「僕が七雲の願いを叶える」
集極を発動する。光の刃が出現する。界の身長の何倍もの大きさだ。
ゆっくりと構える。
通路から宙を浮く炎の大蛇が現れ、刃に素早い動きで噛みついた。
「ッ……」
歯を食いしばる。両脚で踏ん張る。
大きすぎて噛みきれないと判断した大蛇は、通路へと戻っていった。
「ヒャハハハハ！」
聞き覚えのある笑い声が響いた。
大蛇を刀に変えて、白装束が入口に姿を晒す。
「やァやァ、お集まりの皆々様！」
否、もはや白装束とは呼べない。全身が、仮面が、真新しい血で真っ赤に染まっている。
「ここで掛け声をお一つ――」
笑う。嗤う。哂う。
「痛みあってるかァい？」
狂い笑う。
血装束は階段を全段飛び越して着地し、つかつかと歩み寄る。
「あんた……味方を……」
鮮やかな返り血、先ほどの悲鳴。扉は開いたはずなのに来る気配のない二人の追手。つまり――そういうことなのだろう。
「それが何だってんだァ？」
蛇が再び襲いかかった。鎌首をもたげて頭上から界を狙う。

界は後ろに跳んで避ける。七雲と並んだ。
七雲は立ちあがり、涙をためた目で東西南北をきっと睨みつける。
「なんで界を巻き込むの？　私たちには関係ないはずよ！」
紫炎の蛇は石畳に突き刺さり、そのまま掘り進んでいく。
「ヒャハ！　化物のくせに情が移っちまったのかァ？」
ずれた仮面の位置を直す。
「笑える話だなァ。人間のふりをしようったって無駄なのによォ」
足元が揺れる。界は咄嗟に七雲を自分の元に引き寄せた。直後、七雲の立っていた地面から蛇が飛び出してくる。
――まずい。
界は思う。このまま戦闘状態に入れば七雲にも攻撃の手が及んでしまう。それは、まずい。彼女の辛そうな顔をこれ以上見たくはない。
七雲を背中に押しやり、刀を地面に突き立てた。光の粒子を石畳の裏に這わせる。
動きを察知して、大蛇が再び牙をむいた。
直前、東西南北の立つ周囲から光彩が迸り、石畳がはじける。細かく砕けて石塊となったそれが、鉄砲玉のように東西南北を狙う。
「ちィ」
界の目前まで迫った大蛇が、慌てて人形の方へと戻っていった。仮面の周りにとぐろを巻いて目元を保護する。剥き出しになった全身を光に包まれた石が次々に殴打する。
妖刀の動きが止まったその隙を逃さず、界は七雲の手を引いて駆け出した。
室内には様々なガラクタがひしめいて物陰が多い。それらを伝って身を隠しながら、出来るだけ東西南北と距離を取る。
「ヒャハハ！　やっぱ貴様は面白いなァ、ガキィ。自分を裏切った化物を助けようなんざ、俺には理解不能だぜェ」
界は真っ二つに折れた銀製の十字架に寄り掛かった。人の背丈ほどもある大きなもので、大樽に立てかけられている。

「それとも、愛に殉じようだとか考えてんのかァ？　だとしたら最高のお笑いだ。ヒャハ！」
七雲を隣に座らせ、自らも腰を下ろして身を潜める。
十字架の脇にはぼろぼろの絵画が山と積み上げられている。両者の間を覗き込むと、東西南北の動向が窺えた。
蛇の形が刀に戻っている。礫で受けた傷も既に回復したようだ。
ここから集極を使って東西南北を拘束できないだろうか。
――無理だ。
遠隔操作は妖力を大きく消費する。先ほどの門開けに多くの夜の霊鳥を費やしてしまった。これ以上不用意に減らすのは賢明とは言えない。
「俺にはなァ……だァい好きなものが二つある。痛みと子供だ。子供はいいよなァ。痛いときゃ痛そうな顔をするし、嬉しいときゃ嬉しそうな顔をする。あいつらほど人間なやつはいないぜェ」
誰に向かうともなくとうとうと語る東西南北。
「その点で言やァ、俺は貴様のことも大好きなんだぜェ？」
「！？」
――意味が分からない。
「貴様ほどガキになりたがってるやつァ中々いねェし、貴様ほど痛そうないい顔をするやつぁ中々いねェからなァ。ヒャハ！」
界は頭を振る。東西南北の話に耳を傾けていても仕方がない。
「――界」
呼ばれて七雲を向く。
「ダメよ。隠れても意味ないわ。すぐに見つかってしまう」
全身を震わせていた。歯がかみ合わずにカタカタと鳴る。
「……七雲？」
「ごめんなさい……。でも……抑えられないの。怖いと思う気持ちを抑えられない。あいつは私をいたぶって殺す。それだけの資格があいつにはある。それだけの罰を受ける罪が私にはある」
「罪……」

東西南北から罰を受けることであがなわれる罪。
――そう、やはりそういうことなのだ。
「でも……それが怖い！　痛いということが――自分の罪と向き合うことが、怖くてたまらない。一度はあなたを裏切ってまで、向き合おうと決心したのに……それなのに私は……」
声が恐怖とは別の震えを帯び始める。
「身勝手なのは分かっているわ。だけど、お願い……東西南北を、あいつを――」
七雲が界の右手を握る。体中に夜の霊鳥が充満してくる。
「大丈夫。僕がなんとかするよ」
両手で握り返す。更に夜の霊鳥が流入してくる。七雲が膨大な妖力を流しこんでいるのだろう。触れるだけでこんな芸当も出来たらしい。
「何をおしゃべりしてるんだァ？」
「ッ！？」
いつの間にか東西南北が界たちを見つけ、近くまで迫っていた。何故気付かなかったのだろう。それ以前に、何故見つかったのだろう。
七雲が手を離し、界は抜刀する。
「東西南北は妖力がどこにあるかで人の居場所を探すの」
「それは貴様も同じだろゥ？」
そうか――。
だから、護円に向かうとき七雲は追手がどこにいるか把握できたのだ。
前触れなく、界は距離を詰めにかかる。
「ヒャハ！」
蛇が対向してくる。
七雲はこの場からもう逃げている。それを確認して、界は跳び上がった。
「ヒャハハ！　そんな妖術を使う奴がさっき邪魔してきやがったな

ァ」
夜の霊鳥で風を集め、その推進力で天井すれすれまで上がった界は、その言葉に息を呑む。
「ど――どういう意味だ！　何をした！」
「んん？　痛みを与えてやったぜェ？　もう二度と痛みを感じられねェ程度になァ」
「な――」
絶句。
死んだ、ということなのだろうか。
にわかには信じがたいことだった。殺しても死なないようなあの男が、いとも簡単に命を落とすなど、そんなことがあっていいはずがない。
しかし――。
炎の中に悠然と浮かび上がる東西南北の姿が、小さな点となって見える。
――こいつなら、やりかねない。
それでもどこか非現実的な話だと思いながら、かた一方で脳内が熱く煮えたぎっていく。
星流に対して、元々は良い感情を抱いていたわけではない。今も得体の知れない相手だと思っているふしがある。だが少なくとも――ここで死んでいい人間ではなかったはずだ。妖刀などに殺されていい人物ではなかったはずだ。
「お前ぇえ！」
光を集める。集極がどんどんと大きくなり、地表まで至る尺となる。
真下に一振りすると、東西南北とともにガラクタや石畳が吹き飛んで姿を消した。
「ヒャハハハ！」
否――消えたかと思われた紫炎が、小さな灯となって残っている。見る見るうちにそれは膨張していき、何かをかたどっていく。

紫色の蛇。大蛇。牙が生え、炎の鱗が幾枚と顔を覗かせる。そこから更に巨大化しながら、形態を変化させていく。髭がたくわえられ、丸みを帯びていた全身に鋭利さが目立つようになる。顎の下の逆鱗、短いが針のような爪を備えた四肢、威風たる胴体。

「これは――」

――竜。

神話上の生物がそこにいた。全長十メートルはあろうか。全組成成分が炎の巨大なそれは、宙を支配せんとばかりに回遊する。

「ヒャハハハ！　いい気分だぜェ」

胴の上に東西南北の人形がいた。刀を竜の背に突き刺している。というより、そこから流れ出た紫炎が竜を形作っている。東西南北は炎の上に熱そうな様子もなく立っている。恐らく妖力が結晶化して足場が出来ているのだろう。

目前で神話が悠然と構えている。

とてもではないが現実味のある出来事には思えない。星流の死に対する激憤。唯一現実的なのはこの感情だ。それに駆られるがまま、界は東西南北の人形へとがむしゃらに突っ込んでいく。風の操り方も、星流に教わったものだ。

――星流さん……ッ。

竜の口腔が一段と強い紫の光を放つ。火の玉となり、弧を描いて吐き出される。大銅鑼が炎を纏っているようだった。

くぐって避ける。火球が背後で壁に激突し、部屋全体が揺さぶられる。

竜に近づくのは至難の業だった。敏捷に動く上、爪や火球、牙で猛攻をしかけてくる。

風の推進力を上手く使いこなし、蝶のように細かい動きで飛び回る。幾度もぎりぎりのところで攻撃を避け、少しずつ距離を縮める。

「――！」

そのうちに、東西南北の真上に隙が出来ていた。

もらった。

そう思った直後、視界が反転する。
「ぐぁ……！」
尾で横っ腹を殴られていた。もう一度視界が百八十度回転し、背中から壁に叩きつけられる。地上五メートルほどの地点だ。墜落する様も蝶のようで、ひどく体が軽い。
両手から夜の霊鳥を出す。だが、上手く練られない。痛みのショックが妖力を使えなくしている。風の力を得られず、そのまま地表へと落下していった。このまま地面に叩きつけられれば――死ぬ。
「界！」
真下に七雲が待機していた。両腕を掲げると、霧が集まり、水となり、大きな泡が空中に形成される。
「うおあ！？」
ぶつかると、泡はクッションのように優しくはずんだ。二、三回バウンドして落ち着く。穴のあいた風船のようにゆっくりと落ちていき、地面に当たると弾けて消えた。
「いでっ」
したたかに背中を打ちつける。壁に当たったときと比べれば、痛みなど無いに等しいのだが。
「界、冷静になって。頭に血が上るのも分かるけれど、それじゃあいつに乗せられてしまう」
妖術の痛さに顔をしかめながら、七雲が界の肩を抱く。
「ごめん、妖術を使わせちゃって」
半身を起そうとした界に激痛が走った。肩衣の左半分が破けてぼろぼろの肌が露わになっている。あばらの骨が二、三本折れているだろう。
「今治すわ」
七雲は界を再び横に寝かしつけ、左半身に手を当てる。その様子を見上げて、界は目を見張った。
「七雲！　後ろ！」
背後に竜が迫っていた。当然だ。こんなところで隠れもせず止ま

っていたのだから。牙の間から光が漏れている。何をしようとしているかは一目瞭然だった。
七雲が振り返る。やって来る火球を確認すると、にべもなく界の背中を蹴飛ばした。
「ぐぇ」
壁までなすすべもなく転がる。引きつつある痛みの中で七雲の方を見やり、界は更に目を見張った。
「あああああ！」
今にも擦り切れんばかりの悲鳴。直撃した火球によって、七雲の体は紫の炎に包まれていた。
「あ……ああ……」
茫然とその様を見つめる。
またなのか。また、導いた人間を消されてしまうのか。好きな人間を殺されてしまうのか。愛も、星流も、七雲も。みんな、みんな、みんな――。すべて、あの忌まわしき紫の炎によって。
ただただ、果てしない無力感が渦巻いた。願いを叶えると息巻いておきながら、結局何も出来ずに終わってしまった。――そう、何も。
竜が界を向く。
「いいねいいねその顔ォォ！　やはり貴様には素質があるようだなァ」
ヒャハハ、と添えたお決まりの笑いが界の鼓膜を打つ。
「このまま殺すには惜しいくらいだァ。……どうだ、生きたいだろォ、んん？」
反応を窺うように、仮面の無表情な瞳が界を刺す。しばらくそうして、ふいに唇を歪めた。
「チッ、嬉しそうな顔一つもしやがらねェ。つまらねェ……つまらねェぞガキィィ！」
竜が首を振り上げた。逆鱗がちらつく。あれが振り下ろされれば、一食いにされて終わる

界はそれを他人事のように見ながら、かた一方で七雲の姿を探す。
いない。いない。ここにもいない。――どこにもいない。
霧転の術でも使ったのだろうか。あの廃屋から消えたときのように。
界は逆鱗を見つめ直した。
何を血迷っているのだ。何が他人事だ。七雲は、消えてしまった。もう――命すらないかもしれない。ならば、今の自分にできることはなんだ。
竜に瞳を据える。
自分が向き合うべきは、目の前の敵。一人で立ち向かうのだ。それしか――出来ない。
――出来るだろうか。やったことはない。やれるか分からない。やるしかない。
全身の細胞と、夜の霊鳥と、光粒子。体内の全てに意識を集中し、目を閉じる。
「しっかりと痛みを焼きつけて、死ねッ」
瞬間。
界の体は引き裂かれていた。

「……ふん」
鼻を鳴らし、東西南北は思う。
――あっけない。あっけなさすぎる死。これこそが人間だ。
だが、なぜだ。
何かが疼いている。これでは満足できない。飽き足らない。
「……ん？」
妙に明るい。東西南北の周囲が淡く発光している。竜の発する毒々しい光明ではない。もっと柔らかい、銀色の――。
「まさか――」
霧が立ち込めたように、光の密度が見る見るうちに濃縮されてい

く。何度か渦巻いたかと思うと、漠とした光はある形を取り始めた。胴体が形作られ、手足が生まれ、頭蓋が生える。月光が舞い降りたような銀光は、色合いを変えて黒や肌色を帯びた。
「慣れないことはするもんじゃないね。慌てて世界を六周くらいしちゃったよ――」
光と肉体の境界線で、唇の形をした何かが動く。
「ヒ――」
左手を刀から離さないまま、東西南北は右手で拳を握る。
「ヒャハハハ！　面白い、面白いぞ貴様ァ！」
光が完全に人の形を――界の形をとったところで、東西南北はその腹めがけパンチを繰り出した。直撃すれば竜の背から落とせる。
だが、手ごたえはなかった。
「なに――？」
突き出した右手の先を見る。界の腹は光の粒子に戻っていた。
「残念だったね！」
東西南北の脳が揺れる。顔面を殴り返され、全身から力が抜けた。仮面が外れ、どこかへ飛んでいく。
――まずい。
刀を持った左手が開き、体は支えを失って地面へと落下していく。同時に腰から何かを抜かれた。
そこで”人形”の意識は途絶えた。

「――ふう」
抜き取った妖刀の鞘を手で弄び、界は地面を見る。
竜が動く気配はない。背から下までの高さは一メートルもなく、墜落していった男は気絶しているだけで命に別状はないようだった。仮面の外れた男の顔は、整っているわけでもなければ不細工なわけでもなく、これといった特徴が見当たらない。
妖刀東西南北に操られた哀れな男の無事を確認し、界は自分の掌

を一瞥する。ちゃんとした肉体に戻っている。腹も元に戻った。
――成功だ。
全身を光の粒子に変えて移動する妖術。七雲の霧転の術から着想を得て試したものだ。光になってからの移動が非常に難しく、一時は元の体に戻れないとさえ思われた。あれこれするうちに世界を六回ほど周った気がするのだが、詳しい記憶としては残っていない。
ぐら――と、世界が揺らぐ。
「う――」
眩暈を起こし、足で踏ん張る。妖力の消耗が激しい。
深く息を吸う。妖刀へと目を向けた。
推測していた通り、ある一定以上の距離離れてしまえば、東西南北は人形を操作できなくなるようだ。このまま人形がいないままとなれば身動きすらとれないのだろう。どうやって東西南北は新たな人形を獲得するのか。これもまた推測しか界にはないが――もはやそれも確信に近づいている。
「決着をつけようか」
妖刀の柄を握る。
意識に膨大な重圧がのしかかってきた。
「……ッ！」
意識を手放しそうになる。明け渡しそうになる。
「ヒャハハ！」
口の筋肉が勝手に動き始める。
「貴様ならやってくれると思ったぜェ」
握った両手に紫斑が浮かぶ。夜の霊鳥の吸われる喪失感。
だが、同時に竜もその体を何かに吸われていた。――形が変わっているだけだ。刀身の形態へと戻っていく。
「ほォ……逆に俺を支配しようとは中々やるじゃねェかァ」
爪が、牙が、鱗が、逆鱗が姿を消す。妖刀を包む単なる炎となり、足場を失った界は地面へと着地した。
「お前は……何がしたくて人を殺すんだ……ッ」

「つまんねェ質問だなァ」
同じ口が違う声色を発する。
界の意識に、記憶の間欠泉が吹きあげた。流入してくる大量の他人の記憶。
――これは、東西南北の過去？
生まれた時の光景、痛み、白装束を着た親たち。
――君は、そうか……。
よろよろと歩き始める。
「あいつはな、俺から全てを奪ったんだよッ」
「だから奪い返そうっていうのか、関係のない人間まで巻き込んで」
「違うなァ。巻き込んでいるんじゃない。ただ俺は教えてやりたいだけだ。あの時感じた俺の痛みをなァ」
「君は……飢えてるだけの単なるガキだ」
「うるさいッ」
咆哮が響く。
進む足は止まらない。
「七雲は、君を見て怯えてた。何故だか分かるかい？」
「貴様は質問の趣向が悪いなァ。そんなのァ決まってる。あいつァ俺に斬られて痛みを感じながら死んでくのが怖かったのさ。やつは痛みを何より恐れてる。だから心も体も何も感じられないようになった」
「――違う」
七雲の座っていた石像が目に入った。歩み寄り、通り過ぎる。
「七雲が怯えていたのは、君の白装束だ」
「はァ？」
「白装束は、七雲の罪の象徴だ。君の親を、卍巴を裏切ったという罪の。その罪悪感と向き合うのが怖くて、怯えた」
「ヒャハハ！　笑わせるなよ、ガキィ。やつは化物だぞ！　何も感じないんだよォ！　そんなやつは殺すしかない！　たっぷりいたぶって自分の罪を分からせなきゃいけねェんだ！」

「だったらなんで自ら君に殺されようとしたんだ。あれは贖罪のつもりだった。七雲は、君に殺す資格があると……そう言っていたんだぞ！」
界は立ち止まり、見上げる。僅かに隙間の開いた巨大な門を。
「なッ……貴様！」
界の視覚を支配出来ていない東西南北は、そこでようやく気付く。紫炎が唸りをあげて界の首に襲いかかろうとした。だが、動けない。
「動けない……だと。この俺が……貴様――こんなガキなんかに乗っ取られたってェのか！？」
「七雲はああ言ったけれど、やっぱり君には殺す資格なんてなかった。何も感じていないのは――君の方だ」
妖刀を鞘に収め、滝夜叉の門を向けて振り上げる。
「やめろ！　やめろやめろやめろ！　俺は――俺は人間に――」
振り下ろす。力いっぱい投げられたそれは、宙を縦に回転し、数センチばかりの開口部の隙間へと吸いこまれていった。海の底のような暗い門内で、紫色の禍々しい光が上がる。
紫炎は――門は、全てを呑みこむ。憎しみも、痛みも、感覚も。
暗いなかをたった一人で燃えいく妖刀の姿は、砂漠に落ちた一つの雫のようだった。
「人間になりたい、か」
最後、意識に直接伝わってきた妖刀の言葉が、胸の中に重く残る。
結局あの妖刀も、自分の存在を理解してほしかっただけなのだろうか。だとしたら――これとは別の結末もありえたのだろうか。
両腕を掲げる。夜の霊鳥を放つと、開けた時とは反対に門はあっけなく口を閉じていく。閉まりきるその直前まで、界は妖刀の姿から目を離さなかった。
「さて」
振り返る。
七雲は生きているだろうか。周囲に目をやっても、その姿は見当たらない。

「七雲！」
入口へと歩を進めながら呼びかける。返ってくるのは壁に反響した自分の声だけだ。
「七雲ー！」
もう一度。今度返ってきたのは――振動だった。視界が、世界が上下左右に大きく揺れ始める。
「これは」
軽い既視感。護円でも同じようなことが起こった。
地響きが鳴っている。大広間の壁や石畳が崩れ、隆起し、陥没し、互いに激突する。天井から大小様々な岩石が降り注いだ。
――崩れる！
あの竜が散々部屋を荒らしたせいだろう。石柱や壁が壊されたために地下室の危うい均衡が崩れたのだ。
足元がおぼつかなくなりながらも、どうにか部屋の入口へ進む。途中で無特徴の男を見つけて背負うと、移動が更に遅くなった。風の集極が脳裏をよぎるが、夜の霊鳥を上手く練ることができない。これ以上消費すれば気絶してしまう。
階段に足をかけた。
遠くから自分を呼ぶ声がしたのは、その時だった。
「界！」
聞き覚えのある、つややかな声色。それが誰のものか、一瞬判別できない。
「界！」
今度は近くで響く。
二度と聞くことはないと、どこかで諦めていた声。
振り向いた界の目は、茫然と見開かれた。
それは、相手も同様だった。
「界！」
もう一度、名前を呼ばれる。
界が、その名を呼び返す。

「――七雲！」
イブニングドレスが焦げてぼろきれのようになっている。だが、体からは炎も紫斑も立ち消えていた。代わりに浮かべているのは、清々しい笑顔。七雲のその姿に、界の目元がじわりと潤う。
なぜ大丈夫だったかなど、今はどうでもよかった。ただ、その無事に感謝の念が巻き起こる。
天井や壁から石塊が襲う。とにかくここから脱出しなければならない。
「こっち！」
七雲が界の手を引く。階段を駆け上がり、通路に入った。開け放しになっていた扉をくぐり――その周辺には惨殺された二つの死体と血の海が横たわっていた――城に繋がる抜け穴に到着する。しかし、そこまでだった。
既に抜け穴は土砂に埋もれ、壁が行き止まりを告げていた。
背後で轟音が響く。
振り向くと、通路が崩れて通行不可能となっていた。
「閉じ込められた……」
界は夜の霊鳥の消費が激しい。自分を光粒子化するなど、今は出来そうにない。
「七雲」
手を差し出す。夜の霊鳥を与えてもらうしかない。
だが、七雲は辛そうに界を一瞥すると、ゆっくり首を横に振った。
「ごめんなさい、出来ないの。昼の鮫はたくさん残っているけれど、夜の霊鳥はさっきの炎にほとんど吸われてしまった。これ以上使うと……」
そう言って、左の胸元に手を当てる。命にかかわるのだろう。
界は少しのあいだ逡巡し、七雲の肩に手をかける。
「じゃあ、僕の夜の霊鳥を吸い取って」
「え？」
それじゃあなたが、と言いかけた七雲を遮る。

「俺が気絶しても構わないだろ？　とにかく三人とも生きてここから出ないと。君が夜の霊鳥を吸って、妖術で外へ出るんだ」
天井に亀裂が入る。嫌な音が鳴った。
七雲は何も言わず躊躇したままだ。
「さあ、早く。妖力を手っ取り早く吸うには何をすればいいの？」
なおも躊躇いがちになりながら、七雲は自分の唇を指さした。
「あ――」
界は、察した。あのときの接吻の理由を。
七雲の頬に軽く手を触れる。真正面から向き合う。
頭上でひと際巨大な音が響いた。岩石が落下してくる。
一呼吸置いて、唇は触れ合う。二人の姿は岩石の下へと消えた。

幕間、ある妖刀の回想

生まれたとき、妖刀を支配した感情は――歓喜であった。
――感じる！　感じるぞ！　俺は――俺は、ここにいるッ！
五感を何一つ持たず、ただ妖力を感じ取るしかない。妖刀にとって、本来なら世界は狭く閉じたものでしかないはずだった。それでも彼は生の感動に満ち溢れ、自分を創り出した者に深い畏怖と敬愛の情を抱いた。
生まれるまで、彼は意識を持たない存在だった。暗い門の奥底にたゆたう漠然とした粒子でしかなかった。しかし、今はどうだろう。明確な形を持った妖刀は、自分が今ここに存在すると明確に感じることができる。
妖刀にとって、この生まれた瞬間が全てだった。
やがて妖刀の前に、生贄とばかりに一人の人間があてがわれ、その意識を乗っ取り、操り人形にすることで彼は五感を得た。
「やあ。私の声が聞こえるかい？」
目を開いて、聴覚を手に入れて、最初に認識したのがその男だった。上から下までそめぬいたような白装束。フードで顔すら隠す。周囲には同じ格好をした人間が何人も並んでいて、妖刀とその人形となった少年を囲んでいた。
全身から未知の情報が流れ込んでくる。妖力を宿したおかしな生物、赤いなにか、白いなにか、自分がいるのはどこだ。そもそも赤とはなんだ。白とはなんだ。何をしているんだ。そうした全てを人形の記憶から探り出し、妖刀は生物を知り、人間を知り、命を知った。
そして再び――歓喜した。
「どうだい、人間になった感想は」
「これは――これはとても素晴らしい。これ以上素晴らしいものなんてない。つまり、最高だ！」

初めて言語というものを口から放つ。
鼻をむずむずさせるのはお香というものだ。この狭い場所は分島城の一室。あそこにあるのは絵画。曼荼羅というらしい。灯篭には蝋燭が入っていて、火が明るく照らしてくれる。その表面に描かれているのは、印だ。あれで妖力を集めるようだ。
生の実感が沸々と湧きあがってくる。
妖刀は確信した。間違いなく、自分は人間となった。たとえ借り物の体に過ぎなくとも、人間になったのだ。
「私たちが君の親だ。分かるね？」
「親……」
親とは何だろう。脳内をいじくりまわして意味を調べる。答えを見つけて、妖刀は満面の笑みを浮かべる。
「そうか、あなたたちが俺を生みだしてくれたのか……。俺は……俺は生まれてこれて嬉しい。この上なく嬉しい。つまり、最高だ！
俺は親に一生従う」
「それは真の言葉かい？」
「無論だ」
そうかい、と言って男は微笑んだ。
「私たちも君が生まれてくれて嬉しいよ」
「ほ――本当か？」
「無論だ」
先ほどの妖刀と同じように返答してくる。
――俺はただ生まれただけじゃない。誰かに必要とされている。
無意識下のその認識は、妖刀の心をより一層満たした。
「少し、君の能力を試させてもらおう」
男は両手で杖を構え、目を閉じた。杖の先端が小さく振動する。その震えが止まったかと思うと、周囲から一斉に破裂音があがった。灯篭が割れている。剥き出しの灯が、火事を起こさんとばかりに強く燃え上がっている。
「妖術を使える、だと？　君……昼の鮫を吸い取れていないな」

「え？」
誰が話しかけてきたのだろう、と妖刀は周囲を見渡す。先ほどの男だろうか。そうは思えない。あの穏やかな声とは違って、ひどく棘のある物言いだった。
「ちッ……失敗作か」
もう一度、同じ声だ。今度はその所在を突き止める。おかしい。先ほどの男だ。だが、別人にしか思えない。柔和な笑みを浮かべていたその瞳が、今まさに妖刀を蔑視している。
妖刀は背筋を凍らせた。これが本当に、自分を必要としたあの優しげな親なのだろうか。
――違う。
妖刀は現実を否定する。
生まれた瞬間、この人間はそのことを祝福してくれた。妖刀を必要とした。今は、逆に役立たずとでも言いたげに妖刀を見下している。妖刀を不要の存在と見なしている。
ならば――違うのだ。先ほどの優しい男と、今の冷たい男は別の人間だ。自分はただ、前者にのみつき従えばいい。
「おい、こいつを部屋に閉じ込めておけ」
そう言って、男が立ち上がり部屋を出ていく。他の白装束は妖刀へ杖を構える。妖刀は身動きが取れなくなった。妖術にかかったらしい。
術の成功を確認すると、白装束は全員立ち去った。
誰もいなくなった室内で、妖刀はただ一人笑う。
「あァ……俺は生きている。俺を必要とする人に囲まれて、とてつもなく生きている」

数ヶ月後。
山の中腹で、妖刀は急勾配の斜面から眼下を眺める。茂み越しに敵方の動向が窺えた。銀髪の少女が黒装束の集団と面して何かを話

している。妖刀は忌々しげに舌を打つ。その向こうは林が途絶えて荒れ野と化している。点々と横たわる野晒しが目に入って、妖刀は憎しみを募らせた。

野晒しは、妖刀の親たちのなれの果てであった。もはや誰一人として生きている者はいない。妖刀が心のよりどころとした人間は全てこの世を去ってしまった。

卍巴と名乗る妖刀の親たちは妖術師の大家狭霧家を迎えうち、敗北した。本来は勝ち戦だったはずなのに。

なぜ負けたのか。

妖刀はその答えを睨みつける

――全て、あの女がいけない。

純白のドレスを着た銀髪の少女。彼女が現れてから何かが狂い始めた。その結果が現在だ。

”失敗作”と呼ばれた妖刀の誕生日。しかし、それ以後も妖刀は彼らに必要とされた。様々な術が実験的にかけられた。全ては妖刀が昼の鮫を吸い取るという能力を獲得するためである。それが、あの少女の登場によって一変した。親が新たに生みだした彼女は、妖刀に比して完璧な存在だった。昼の鮫（さめ）を吸い取り、無尽蔵に妖力を貯められる。親たちの興味は彼女に集中し、それ以後妖刀は見向きもされなくなった。

――憎い。

妖刀はどうにかして親たちに振り向いて欲しかった。だが――少女は、その機会すらも妖刀から奪った。あろうことか彼女は親たちを裏切り、皆殺しに追い込んだのである。あの黒い妖術師どもと結託して。

妖刀は――痛かった。どこが痛いのかは分からない。言い様のない痛みが疼いていた。

この痛みを、知らしめてやりたい。自分を痛めつけた人間に味わせてやりたい。

妖刀の操る少年は、上半身の衣服が破れ、ぼろぼろの風体になっ

ている。先ほどの戦いで何度も妖術を喰らったのだ。だが、妖刀の妖力がなくならない限り死ぬことはない。攻撃を受けるたびに少年の傷は治癒する。

静かに黒装束たちの背後まで移動する。妖刀が抜かれ、紫の炎がその刀身を包む。少女は一番遠いところにいる。だが、構わない。彼女は最後のお楽しみだ。

ふと、別の場所でも炎が上がった。反射的に目を遣り、少年は——妖刀は身を固まらせた。

親たちの屍体が一斉に炎上していた。曇天の中、それらは灼熱の赤に包まれて見事なくらいに映えた。

荒れ野の中心で、細身の黒装束が何かを語っている。

屍が燃える。消える。そのあとには何が残るだろうか。灰が残る。いや、あれは妖術だ。きっと跡形もなく、灰すら残さず焼失してしまう。

今や妖刀は、親との唯一の繋がりである屍体さえも失っていた。奪われていた。

——あいつ。あいつあいつあいつあいつあいつあいつあいつ！

全神経が活性化し、高熱をあげて煮えたぎる。

「おおおおおおああああああ」

気付いた時には咆哮していた。斜面を駆けおりる。

黒装束たちが気づき始める。だが、どれも遅かった。

炎を携える少年の姿を視認した瞬間、彼らの体は真っ二つに裂かれていた。

「ハハ！　ヒャハハハ！」

裂く。裂く。裂く。

肉を、骨を斬るたび、言い様のない快感が全身を走った。

否——快感ではない。実感。生の実感そのものが訪れる。

少女を視野に捉える。こちらを向き、驚愕に目を見開いていた。

——いい気味だなァあああ。その目玉、ほじくりだしてやるぜエ！

左足で踏み込み、右腕を大きく振り上げる。そこで、少年の動きは止まった。
「あァん？」
妖刀が少年の四肢に命令を送る。
動け。動け。動け。
動かない。動けない。
妖刀は自分で動くことにする。炎の刃が伸びて少女へ迫ろうとするが――これもまた動けない。
「あの微生物どもはまだ面白いものを隠し持っていたようだ」
少女の後ろから、細身の黒装束が姿を見せた。屍体を燃やしたあの男だ。
「貴様……何をしたァァ！」
男は質問に答えず、ただ妖刀を見つめる。フードの端から右目が覗く。声や顔つきからして、年はまだ三十にも達していないだろう。だが、眼鏡越しのその瞳は驚くほどに老成し、かつ冷めている。
周囲で下生えを踏みしだく音がする。斬り損ねた妖術師たちだった。杖がどれも淡く光っている。彼らが妖刀と少年の動きを止めているのだろう。
「七雲さん、教えていただけませんか？　これは何者なのです？」
男が少女に尋ねる。
「知らないのですか？」
「寡聞にも。私の放った間者はこれの存在を感知できなかったようです」
彼は、と言って少女は妖刀と少年を見比べた。
「この化物がァァ！　殺してやる！　ぜってェ殺してやるからな！　ヒャハ、ヒャハハハ」
少女は何も言い返さず、男に目を転じる。
「これは、と言った方が正しいですね。少年は操られているだけで、本体はこの炎にあります。私の前に作られた失敗作です。夜（とり）の霊鳥しか吸い取れません」

「ほう」
男は値踏みするように妖刀を眺めまわすと、ゆっくりと手を伸ばした。
「触らないほうがいいですよ。夜の霊鳥を吸い取られて、下手をすれば意識を乗っ取られてしまいます」
「それはますます――面白い」
悦楽的な笑みをこぼす。
「生きたがりの光永京氏殿へ手土産に渡してやればさぞ喜ぶだろう。君の存在は絶対に明かせないがね、七雲」
不気味な人間だった。
だが、妖刀には全く関係のないことだ。ただ心に浮かぶのは、壮絶な恨みのみ。親を奪い去り、居所を取っていった者たちに、自分が味わった以上の痛みを与える。今それが叶わなくとも、いつか必ず実行してみせる。
その前に試さねばならないことがある。
――何をすれば、人間は自分のように痛むのだろう。
妖術師たちの手によって、妖刀は意識を閉ざされた。

終、罪は／罰は此処に

妖力が消えていく。おのれの体が燃えゆく。意識が狭まる。

――ああ。

東西南北は、結局何一つ達成できなかった。

痛みを知ることにこだわるうち、それが生の実感と繋がり、快楽となった。いつの間にか狭霧家と七雲に対する恨みを忘れ、痛みを知ることそのものが目的となっていた。

今、東西南北は人間としての感覚を外され、痛みを感じられない。生まれたときはあんなにも実感がわいたというのに、今は死の実感を得ることすら叶わない。

だが――。

――ああ、なんと安らかなことだろう――。

炎が止む。

門の中で、小さな命が立ち消えた。

意識が戻ると、夜の世界だった。

久方ぶりに月が明るい。雲は見当たらず、諸星が煌々と瞬いている。

界は起き上がる。隣で東西南北に操られていた男が眠っている。七雲は少し離れたところに背を向けて立っていた。微動だにせず、何かをじっと眺めている。並んで同じ場所に目を向け、界は息を呑んだ。

城が、傾いている。比喩の類ではなく、文字どおりに傾いている。

二人のいる高台の端からは、なにに遮られることもなく、松明の明かりに浮かぶ分島城の姿が見て取れた。城の中から武士や女中、小間使いの少年が何人も慌てた様子で出てくる。距離の関係で表情までは詳しく判別できないが、皆が皆、何が起こったのか分からな

いような状態だった。混乱している。時折聞こえてくる狼狽しきった声からもそれが見て取れる。
傾いたのは、あの地下空間が崩落したせいだろう。城の一部はあそこを土台としていたのだ。
集極。
夜の霊鳥のみで術を発動する力。これによって、界は再び何かを破壊した。壊すことにしか使えない能力。そんなものに、価値があるのだろうか。
界は自分の掌を見つめる。
「使い道は、他にもきっとあるわ」
城に目を据えたまま、七雲が言う。
見透かしたような言葉だ。
「……そう思いたいな」
振り返る。男が目を覚ましていた。上半身だけ起こして、目頭に指をあてている。嗚咽で泣いているのだと分かった。
「大丈夫ですか？」
控えめに声をかける。
男は界に目を向けると、いきなり頭を下げて土下座した。
「すまない！　すまないすまないすまない！　拙者は、拙者はお主らにとんでもないことを……」
前髪が地面に垂れる。界は面食らった。
「あ、頭を上げてください。あなたのせいじゃないんですから」
男はそのままくずおれた。せき止められていたものが流れ出て、慟哭になった。
「せ、拙者は、部下もこの手で、あのときのあやつの――あやつの声が、耳にこびりついて離れない。本当に、本当に痛そうで、血が、こう――ばあっと出てきて。ほ、他にもたくさんの人間を……」
かける言葉を失って、界は黙りこくる。七雲も沈痛な面持ちで界と肩を並べる。
東西南北に乗っ取られていた間も、この男の意識は残っていたの

だ。自分の体が勝手に動いて残虐な行為に手を染める様を、ただ見ているしかできなかった。――地獄だ。発狂しなかったのは、ひとえにこの男の精神力のたまものと言っていい。

これからどれほどの罪悪感を背負って生きていかなければならないのか。

それを想像することはできない。全て東西南北がやったことだと言って、それで済むというものでもないのだろう。

やはり、かけるべき言葉が見当たらない。

ひとしきり涙をこぼしてしまうと、男はなおもむせびながら立ち上がった。

「こ、このままここにいては、良、くないであろう？　そろそ、ろ出奔しなくては」

「え、でも――」

気をつかっているのだろうか。確かに、このまま留まっていてはまずいのも事実だ。城の武士たちに発見されれば厄介なことになる。だが、本当はもう少しこのままでいたいはずである。

「取り乱してすまなかった、もう大丈夫だ。お主らは――狭霧殿と七雲殿であったかな。拙者は太田善之助と申す」

そう言うと、自ら先導して高台を林の方へ下り始めた。

界は最後に分島城を一瞥する。目に焼き付けると、後を追いかけた。

暗中でよく見えない足場を慎重に進んでいく。霧は晴れていた。七雲が昼の鮫を吸い取ったせいだろう。

昼の鮫のある場所で、人は夜の霊鳥を貯めることができる。七雲に吸われているとはいえ、霊峰神楽山に残った昼の鮫はまだ色濃い。事実、木々はまだ巨大であったり、逆に異常に小さいままだ。界は徐々に夜の霊鳥が充満してくるのを感じる。

木々の向こうに開けた道が通っている。城へ至る大道だ。それを横目に進んでいると、視界の端に妙なものが映った。

人だ。

小柄な人間が、蹲ってわんわんと泣いている。善之助のものとは違って、どこか儚い。少女の泣き声だ。
「ちょっと」
七雲と善之助を止め、人影まで歩む。近づいて、界は目を見開いた。
見覚えのある女だった。髪をかぶろに切り揃え、細い肩を震わせている。だが、界を驚かせたのは女ではない。その下で仰向けになっている青年の方だ。
「星流さん……ッ」
赤い僧衣の青年がそこにいた。月光がスポットライトのようにその姿を照らしている。そのせいで、破けた腹部や下生えを彩る血がはっきりと見えた。
――本当に、死んでしまったのか。
こんなにありありと死体を見せつけられても、界にはそれがなにやら現実味のないものとしてしか映らない。あの変人が命を落としたというのが、未だに上手く理解できない。東西南北と面したときにはあんなにもはっきり怒りがわいてきたというのに。
「あなたは……！」
女が泣きはらした顔を上げた。美花きくだ。あの冷酷な印象の麗人が、小娘のように小さくなっている。
「ずっと泣いていたんですか？」
こくりと頷く。
「そう――ですか」
二人はどういう関係だったのだろうか。ただの上司と部下ならば、ここまで泣くことはないような気がする。
「星流様は、私を助けようとして、それであの仮面の男に……」
そこまで言って、きくはびくっと後ずさった。顔が恐怖でひきつっている。
界の背後に七雲と善之助が姿を見せていた。きくの目線は善之助の方に釘付けとなっている。それで界は気づいた。

「この人は……違うんです。服装はあの東西南北とかいう奴と似ているように見えますが、別人です」
ひどく説得力のない説明に、きくは変な顔をした。恐怖心は薄まったようだが、代わりに不信感があらわになっている。
善之助は泡をくったように口をぱくぱくとさせていた。顔色が悪い。自分が手をかけた人物を見て、改めて罪悪感に打ちひしがれているのだろう。肘で小突き、囁く。
「今はまだ、詳しい事情は伏せておいた方がいいです」
善之助は小刻みに首を縦に振る。
心の片隅で、界は自分の行為を奇妙に思った。人が死んだ。しかも身近な人間が。それなのに、今の自分は不自然なほど冷静に行動している。
――やはり。
受け止められていないのだ。理解の範疇を越えている。星流の死が信じ切れない。
七雲が界の脇をすり抜けた。星流の端にしゃがむと、その首筋に手を当てる。
「脈はないけど、まだ温かい。恐ろしい生命力ね。腹は抉られてるのに、ついさっきまで心臓が動いていたんだわ」
きくが再びこくりと頷いた。
「あの人は――さっきまで笑ってたんです……。私を見て、変な顔だな、なんて言ってきて」
本当にバカですと言って、きくはしゃくりあげる。だが、ふと何かに気づいたように七雲を向いた。
「――あの、助けてくれませんか？　あなたが蓬莱の玄玉の枝なら、妖術でなんとかできるはずでは！」
七雲は複雑な面持ちを返す。
「そうしてあげたいのは山々だけど、今は夜の霊鳥が少なくて」
「あ、あの、じゃあ、私に何かできることは」
銀髪を指ですく。

「……あなたの夜の霊鳥を分けてもらえるなら何とかできるかもしれない。でも、気絶してしまうかもしれないわ」
「よくわかりませんが……気絶するくらいどうってことありません」
「そう――」
七雲は立ち上がると、界をまっすぐ見つめた。
「あなた、自分の力がどうとか言ってたわね？」
「う――うん」
「今、別の使い道ができたわよ」
「どういうこと……？」
電気よ、と返される。
「私がお腹の傷を治している間、光を電気に変えて星流の心臓に流してちょうだい。本当に少しだけね。運が良ければ衝撃で心臓が動きを再開するわ」
「電気……？　でも、今は夜の霊鳥だけじゃそれすらも出せるか……」
「私が昼の鮫を提供するわ」
「妖術を使えって、こと……？」
界の頬がそっと触れられる。
「集極よりよっぽど簡単よ。あなたなら出来るわ」
「……」
自分の掌を見つめる。首元に手をやってもあの石はもうない。
「拙者にもなにかできることはないであろうか？」
善之助の声は必死だった。彼にとっても、ここで星流を助けられるか否かは重要なことだ。
「そうね……夜の霊鳥を頂けないかしら。二人分もらえればあの娘が気絶しないで済むから」
「御意！」
四人が、星流を囲む。七雲の左手を界が握り、右手をきくと善之助が握る。
界に七雲の昼の鮫が流入してくる。体内に入ってくるわけではな

い。全身を包むように、まとわりつくようにしてやってくる。右腕から微量の夜の霊鳥を放出し、昼の鮫を掌に集中させていく。集極の際には妖力を光に転換させていた。近しい存在である電気に転換するのも――さして難しいことではない。

界は妖術の出し方を全く知らないわけではない。幼少の頃はさんざん鍛えられ、姉が死んでからも自分で訓練してきた。自分の無力で姉が死んだことに悔しさを感じていた。

それでも、界には一抹の不安がある。

以前は、いくら努力しても夕の狐をもたないがために妖術は使えなかった。だから、今の自分が妖術を放てることにいまいち信頼を置けない。

自信がない。

「どのくらいの電気を流せばいいの？」

「気絶するくらいね」

「気絶ッ……」

星流を見つめ直す。

――ともかく、やるしかない。

ここで尻ごみしても仕方ない。東西南北との戦いでもそうだった。自信がなくとも、踏み出さなければ何も始まらない。

自分に別の可能性を見いだせるか否かの瀬戸際なのだ。

星流の左胸に手を当てる。昼の鮫を電撃に変換させていく。肌が妖力の流れを感じ取る。

電光。

バチッと音が鳴り、星流の四肢がビクンと跳ねる。

「うっ……」

同時に七雲が小さく呻いた。放たれた霧が星流の腹部を覆い、柔らかく発光する。界の放出した余剰な電気が霧に引き寄せられていく。両者は融合すると、巨大な鳥をかたどった。霧と光の鳳凰。それは五人をしばし眺めると、何度か羽ばたき、天高く舞い上がっていく。

「なんだ、あれ……」
気づいたのは界だけだった。鳥に目はなかったが、なぜか視線が合った気がする。
再び掌を見つめる。
――使えたのか。
どうやら妖術は成功したらしい。そう思うと、不思議な充足感が湧いてくる。
――あの鳥は……。
笑っていたように思う。だとすれば――祝福していたのかもしれない。
霧が晴れる。星流の腹部に目をやる。皮膚は、しっかりと再生されていた。
「せ――星流様！」
きくが涙声で呼びかける。
十秒、三十秒、六十秒――。
「ん……」
彼の双眸は――ゆっくりと開かれた。
「んん？　あれ……きくちゃんなんで泣いてんの？」
第一声は――ひどく緊張感に欠けていた。焦点の定まらないまま、自分の胸にかぶさってひたすらに泣くきくの姿だけを視認する。
「そういやさっきも泣いてたっけ。いつもはあんなに冷たいのに。よくわからないなあ」
「星流様、あなたはバカです。ホントに……バカですっ」
バカを連呼するきく。はは、と星流は弛緩した笑いを漏らした。
蘇生後となると、さすがの星流も丸くなるらしい。平生とは違う彼の姿を、界は少なからずの驚きをもって見守った。
宙をさまよっていた星流の目線が界を捉える。
「あッ！　界、生きてたか！」
途端に元気を取り戻した。
「でもって隣にいるのは七雲！　界お前やっぱり殺し損ねたなこん

にゃろーッ。あれほど言って聞かせたのに。やっぱ落ちこぼれだな！」
界は即座に考えを入れ替えた。
星流は星流だ。どこも丸くない。
「言っておきますけど、星流さんを蘇生したのはその七雲なんですからね」
「知るか！　蘇生もなにも我輩は死んでない！」
滅茶苦茶だ。助けられたことを認めようとしない。
「さ、桜新殿！」
いきなり割って入ったのは、善之助だった。星流の脇で、またも平身低頭――土下座している。
桜新って誰だ、と界は一瞬疑問符を浮かべ、すぐに得心した。星流の姓だ。
「ん？」
星流は、きょとんとした。
「誰だ、君は」
「せ、拙者はその……拙者のせいで桜新殿は……」
「ああ、奴から解放されたのか」
なんでそんな珍妙な姿勢をしてるんだ、と星流はさも不思議そうに尋ねる。
「そ、それはもう恐れ多くて」
「なるほど、君は恥ずかしいのだな。自分の顔にコンプリートを感じているのか」
コンプレックスです、ときくが嗚咽交じりに突っ込む。
「あ、あの、桜新殿は拙者の罪を」
「罪？　何が？」
「拙者のせいで桜新殿はお命を」
「なんで君のせいなのさ。そんなの大体は東西南北のせいだろ。残りの少しは我輩のせいかな。ってかそもそも我輩は死んでない」
善之助はぱっと顔を振り上げて星流を凝視した。聖人君子か仏に

でも出会ったような表情だった。
「さ――桜新殿は、拙者の罪を許して下さると言うのですか！」
「いや、そもそも君の罪なんて」
「ついていきます！」
「――は？」
善之助は顔中を喜びに歪める。涙がぼろぼろと落ちた。
「一生お供させていただきたく候！」
突然仰々しい言葉遣いとなって、善之助は星流の両手を握りしめた。

「善之助さん、あんな変人のどこがいいんだろう……」
「堅物にはあれくらい型破りな人間のほうが似合ってるのよ」
神楽山の麓。夜明け近くの薄暗がりの中を、七雲が前、界が後ろになってのんびり進んでいく。星流たちは分島城へ戻った。復興の指揮を執る気だろう。星流はもうどこも痛まないと言い張ったが、きくは散々に罵倒しつつ気遣い続けていた。第三者からすると、どう見たところで夫婦だ。
界には今までにない満足感がある。星流の復活は、自分の能力が破壊とは別の方向に使われたことの証明だった。そして、その道を示したのは――
「……七雲」
はだけて寒々しい背中に声をかける。
「なにかしら」
「ありがとう」
「……なにが？」
「君のお陰だよ」
「気持ち悪っ」
心底嫌そうだ。
「事実を言っただけじゃないか」

界はむくれる。
「そういうことは言わないのが妙なのよ」
「よく分かんないな」
星流と同じようなことを言ってしまったことに気づき、慌てて口をつぐむ。
「――で、これからどうするの？」
七雲が銀髪をさっと後ろにはためかせる。
「護円が気になる」
「今私たちが行っても無駄よ。私がまた壊して終わりだわ」
「じゃあ、君の体が人間に戻る方法を見つけよう」
「お節介な奴ね」
「親切だよ」
またも界はむくれる。
「そういう君は何がしたいのさ」
「……そうね」
立ち止まり、逡巡するように指を顎に当てる。
「とりあえず生きていればそれでいいわ」
「……そう」
――死ぬ気は、もうないのか。
なぜ生きる気になったのか、それを聞くことはしない。
「そういえば、あの炎からよく助かったね」
「東西南北はあの場で殺す気がなかったから。あなたとの戦いに蹴りをつけてからゆっくり私をいたぶるつもりだったのよ」
「悪趣味だなあ」
「そういう奴よ」
その言葉に、嫌悪感はなかった。淡々としている。
「あいつは――なんで仮面なんてつけてたんだろう」
さあ、と七雲は返す。
「僕は……あいつも怖かったんじゃないかと思う」
「怖かった？」

「あいつ、人形の体が傷ついても平気なはずなのに、攻撃された時はしっかりと防いでた。石をぶつけたときは、反射的に仮面だけ守ってたよ。それほど大事だったんだな、仮面が」
「だから何よ」
「仮面を取り去って直接世界を見るのが怖かったんだよ。きっと、何かから逃げてた」
「そんなに弱い奴かしら」
「仮面は弱さの象徴だよ」
「――あら」
振り向いた七雲の顔は、意地悪そうな笑みを浮かべていた。
「柄にもなく詩人なことを言うじゃない」
「……からかうなよ」
あはは、と笑って七雲は林の中を跳ねる。その先に林の出口が見えた。
「ねえ」
一歩一歩、木々の途切れへと近づいていく。
「私がなんで死なないって決めたか、分かる？」
「え？」
聞いてしまって、いいのだろうか。
困惑して聞き返す。
七雲は後ろ向きに歩いて界を見詰めたまま、小悪魔的に微笑んでいる。
光が差し込んできた。二人で林を抜け出す。
「やっぱり、教えてあげない」
視界が開けた。地平線まで続く草原が広がっていた。朝陽が二人を照らす。暁の中のイブニングドレス。
「……からかうなよ」
陽光を反射するシルバーライト。化物と罵られていようと、妖魔と蔑称されようと、その姿は輝いていて――界からすれば、それはまごうことなき妖精の姿だった。

終、罪は／罰は此処に（後書き）

いやはや、ようやく完結です。
ここまで読んで下さった皆様、どうもありがとうございました。
初めて書き切ることのできた長編小説です。感慨深いものがありますが、自分なりには不満点もたくさんあって、これからもちょこまか修正して最善なものに仕上げていきたいと思っています。もちろん、ストーリーの大筋は変えないつもりですが。

改めて、最後まで付き合ってくださった読者の皆様、どうもありがとうございました。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3146r/

イタミヒメ

2011年7月3日03時35分発行